

特8

127

新開  
說明  
聖代の球謡  
全

091428-000-3

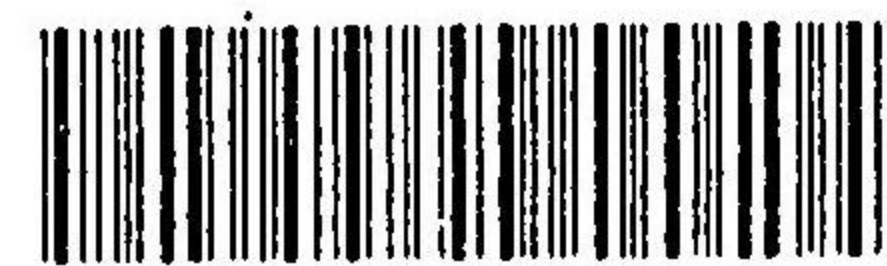
特8-127

聖代の球謡 (開明新説)

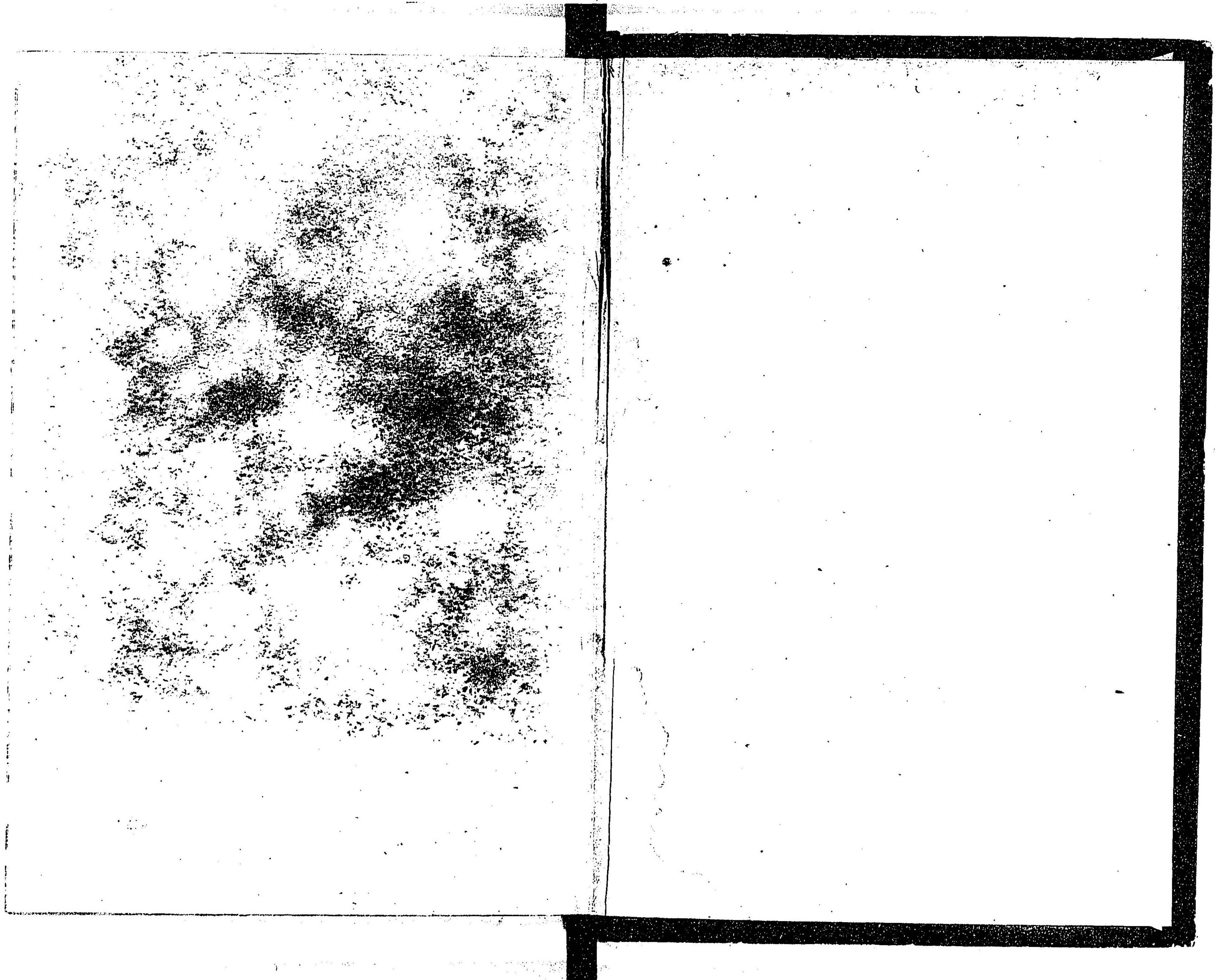
花笠 文京 / 著

M19

DBN-2339

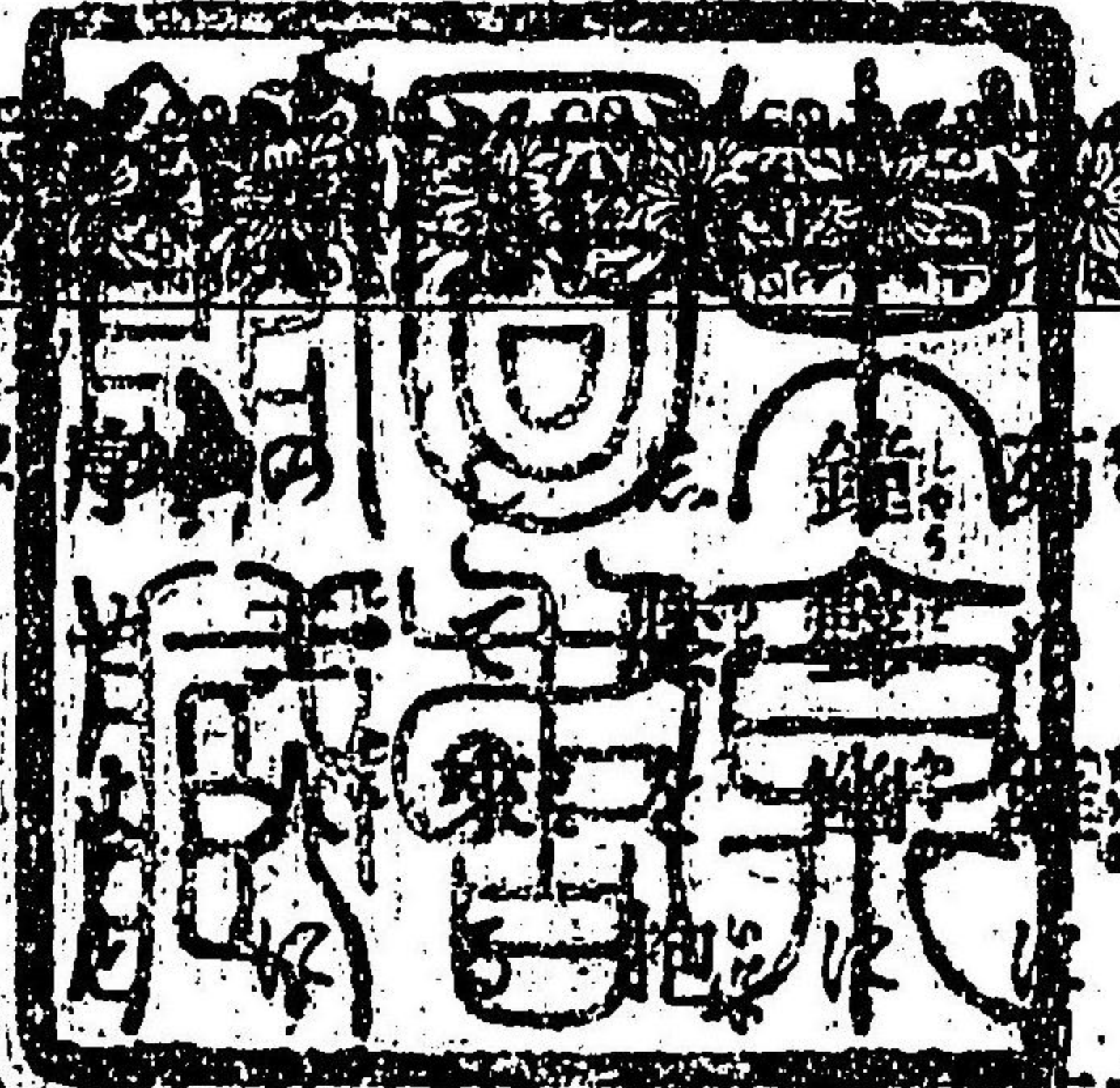








明治十九年十二月廿二日 内務省文部 2067

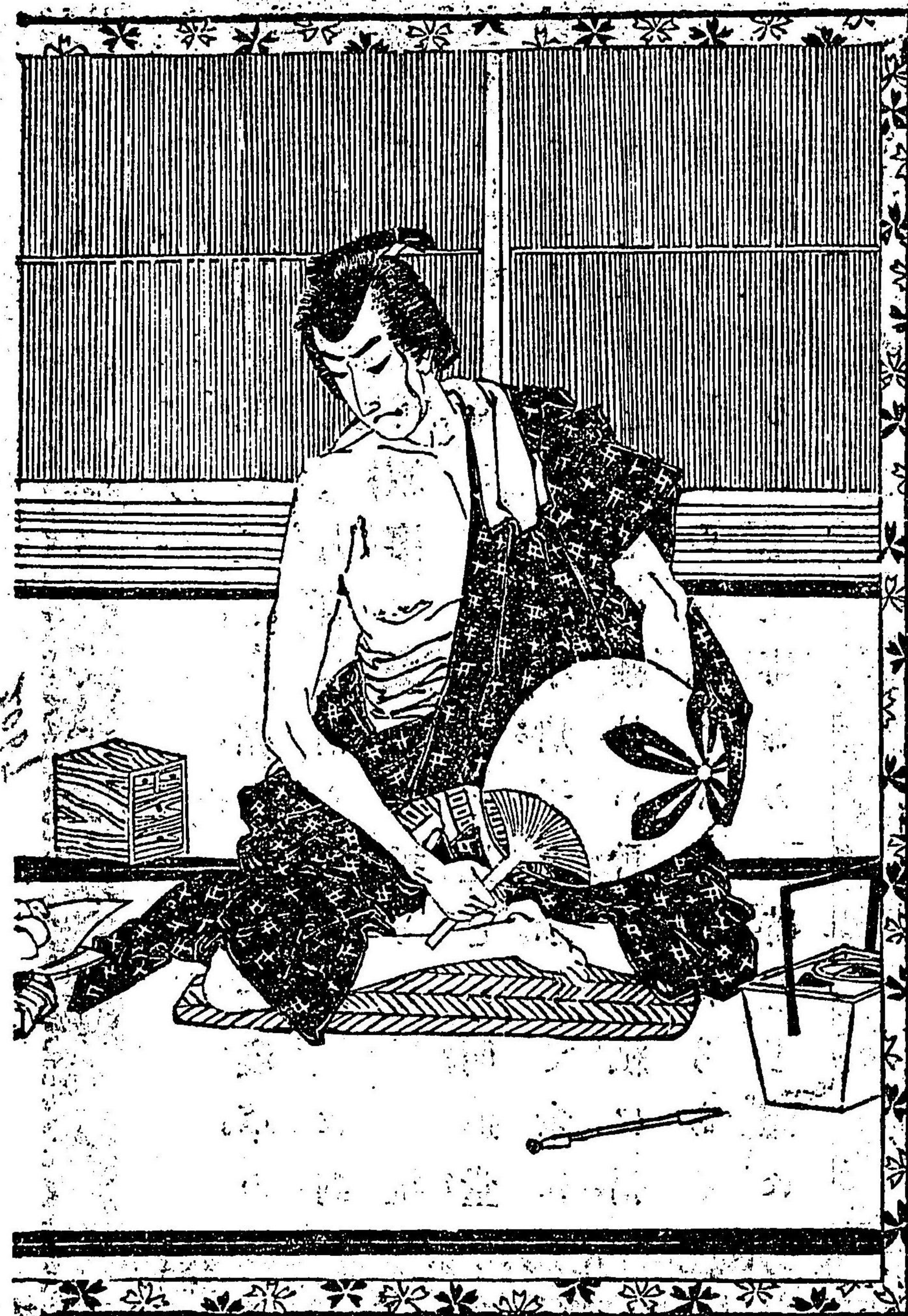


聖代の球謡序

荒れて小庭霜白く上野淺草の  
 て月軒に清し一人寒燈に對  
 寂寥を樂しむ折ら扉を推  
 のあり誰ろと見をハ明進堂  
 うある一小冊子を示して余に  
 乙ふ巻を緋けハ曾て新紙に掲  
 載ありし聖代の球謡てふ紳子に  
 本編を觀るに惡漢毒婦の一時意を恣に









して人を惱すことあるも后ち遂に善良  
に感化せられたる等能く其人情世態を  
寫しいたせし稗史にして聊か勸善懲惡  
の爲にもと發兌に臨み切に序詞せよと  
乞ひるゝに黙止難く其儘を書きて序詞  
は換ふと云爾

看好故人誌

新開明 聖代の球語前編

第一章

東京 花笠 夜 京漫著

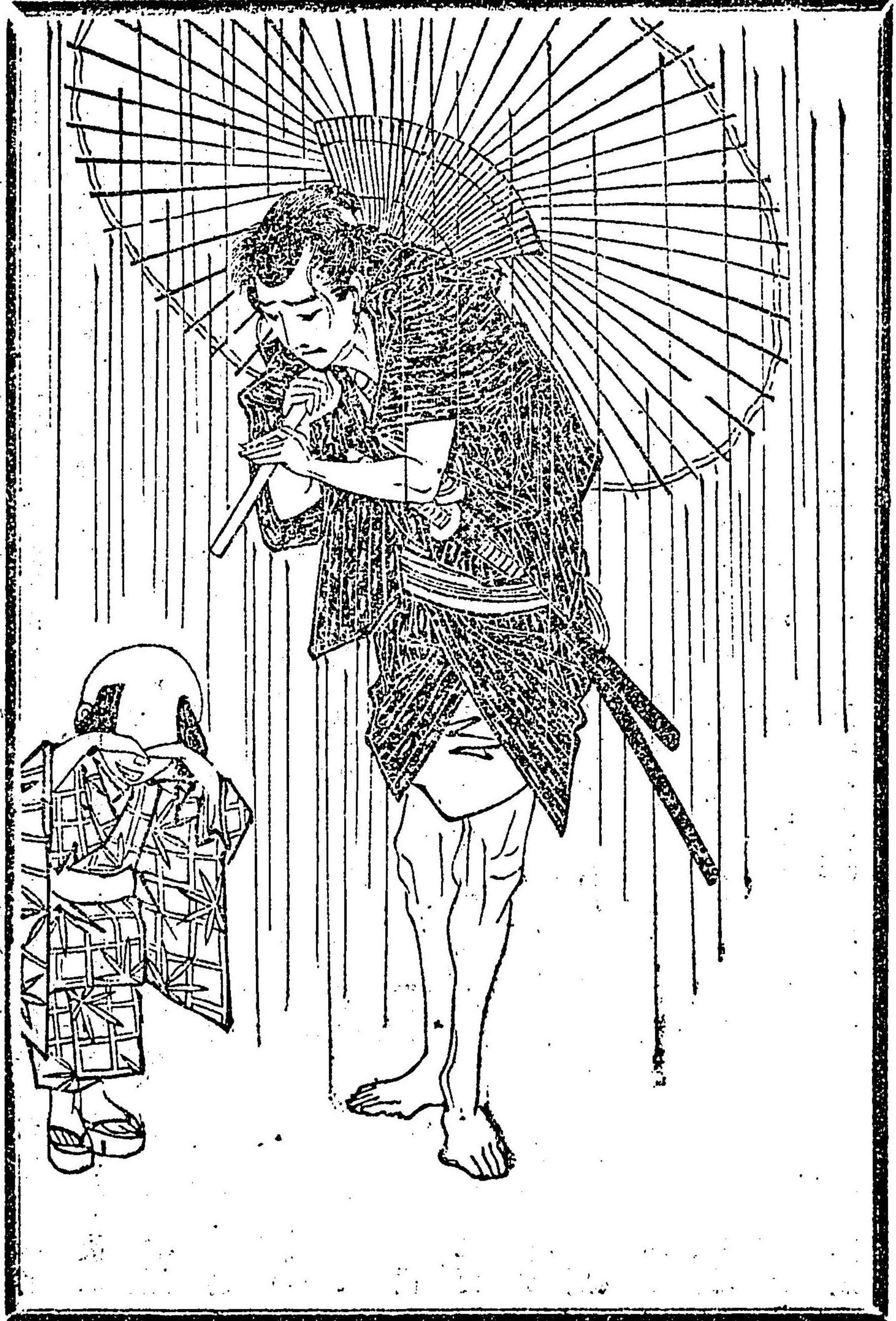
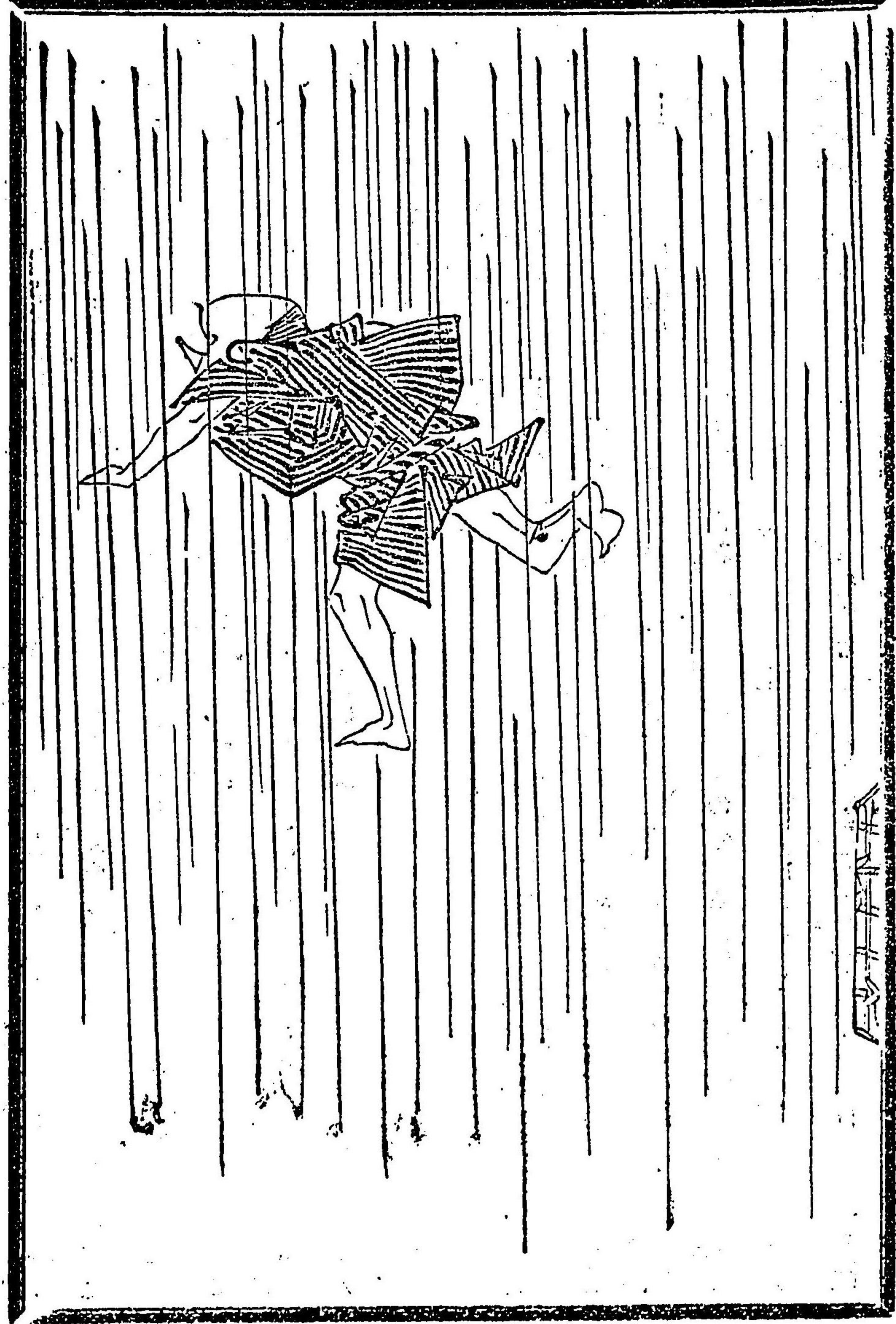
此人數船ならばこそ納涼かあさしもよ廣き大川も前橋後船相街み川よして水よ迷ふ兩岸の  
茶屋の紅燈萬點觀者膝を覆ね腰を疊む兩國橋の宛らふ人の虹を掛たる如く天黒して事を舉  
る懸懸未だ響さるゝ雷光迅く空よ響き一塊の火丸碎て萬星とある銀龍燈滅せんともれば金  
鳥翼已に離へる丹魚舟よ入り火鼠波を走る是や兩國川開の影況よて五屋鍵屋の喝采の水よ  
響きて暗騒く我が咽からすも知らざる程の今や烟花の揚り際頃を嘉永五年五月二十八日の  
黄昏時長乃癖として一陣の涼風もろどを颯とばかり夫と言問もあらばこそ車軸を流す雨の脚  
群集あしたる數萬の見物右往左往よ奔走なす雑沓混雜恰を暴れ鼎の沸ぐ如くよて親よ離れ  
て泣く兒われれ子をを見失ふて狂鷲の如く舞ね廻る親をあり此日神田三河町三丁目よ住て酒  
井左衛門尉（出羽庄内藩士）よ出入なす人入渡世の親分株松崎喜三郎と云る者あり五歳小  
ある娘のお濱よ花火を見せて喜ばせんと手を引連て矢の倉の河岸よ佇立ひ折しをわれ降て



湧たる急雨の騒ぎに我子を見失ひ其處か此處かと我が身体の濡るを厭はず尋ねるうち馬の脊分る急雨の事よしわれ忍ち雲散り雨を晴たれど胸の曇り争か晴れ尋ね詫つゝ米澤町まで来て見れば自身番は黒山の如く人立して彼の此のと薙さ合ふ何事ありやと四方の人を問はば迷子ありとの事又借へと群集の人を押分け町役人より由を尋て其子を見れば年齢の恰好同じ程なれば似ても似付ぬ男子ゆゑ爰は望を失ひたれば衣類の摸様の似てあるより萬一此子の親達か混雜の紛れ我子と間違ひ連行しを計り難し若し左あらんより此なる男子を我家へ連行さ養ひ置ば見失ふたる我子を得る手掛なりもやせんと思返しつ其由を町役人等と談判せしは現時の規則と事變り引取人のあること幸ひ該町内の厄介拂と異議なく引渡されしかば喜三郎の悄然と空頼ある事を頼みて彼男子を三河町なる我家へ連歸りつゝ面目なげは妻のお瀧は此由を語れば俱に打驚き如何に混雜したればとて我子と失ひ他人の子を連歸るとい疎然しいと本夫は對て嗷々と愚痴を翻して泣く唧ちつ怨も有繋女氣の嘆き然ことと喜三郎の妻を諭しつ此子をば養ひ置ば失ふたる我子と得るの手懸はあらうも知れずと云れて見ればホンと爾でんした演劇で能く演る盛衰記松右衛門の住家ならねと追付け此處へ來筆の機も此子の親が尋て見ぬ我子の所在も知れませうと打解やすき夫婦の情合慰められ

つ慰めて果敢なき事を夕襟かけてぞ契る神頼義理ある子とて大切よ養ひ置つ夫から夫へと我子の踪跡を尋るかど更よ手掛あらざりけり此川開の當日日本所北割下水よ住み高三十俵二人扶持を賜ふ幕府の御家人岩上勘十郎(三十二)と云る者を涼かてら兩國の烟花を見んと其邊を漫歩の折悲く俄の夕雨よ興を醒し濡て我家へ歸途向兩國日本杭の河岸よ急て來る時遙か彼方へ泣叫ぶ女兒を抱き一人の男が足を早めて馳行く休の何となく怪しげなれば箇の勾引は相違なき憎き所業と跡追掛け近付くまゝ大喝一聲癖者待てと呼止たり呼止られて彼男の其身よ暗き事や知りけん抱し女子と投るが如く大地よ置去り雲霞目散る逃去ぬ勘十郎の駈寄てやとら女子を抱き取り熱々跡めて思ふやう斯く愛らしき容貌ゆゑ勾引されたよ相違なき親達の嘆き嗚やさう尋あぐみて居るならん而て其許の名は何と云ふ年の幾干かお家の何處ぞと問試みても頭是あく廻らぬ舌の片言小切の名はお濱ちやんと云ひ紅葉の機も片手を開いて年の數を示せしのみ漸く五歳と悟りしかど外は據所をあらざれば餘義なく我家へ連歸りしが岩上勘十郎の妻のお花と呼び以前に吉原の大籠櫻屋の小太夫とて鶯鳥啼せた粹の果娼賣の中から勘十郎と思ひ思ひ思ひれ二世掛て契りし深間の買馴染面白事華美な事譯のありたけ付尽して遂に夫婦とありてより三年以來連添とお花は元是路傍の楊柳浮氣







六

乃風は吹荒し烟は晴る男の種をむしき故か子實なきと夫婦は朝夕昔は病で心淋しく思ふ矢  
 先此子を得たるの天の興へ眞實の親の知れ、ハ格別まつ差當り我子とあし養育て見たいと  
 只管養す妻の心は引されて子煩悩の勘十郎を其氣はありて眞實の親を尋ねる念いつしか  
 消矢せ結句知れぬを幸ひと好める物もど買與へ眼鑿結て美衣着てと夫婦右より左より心を  
 竭し手を變て騙しつ賺しつ種々甘やかされて兒心は濱の嬉しく喜び勇み夫婦の者に能  
 く馴染み父さん母さんと戀慕ひ與へられたる甘口の情は千菓子の花もみぢ實からぬ親とま  
 らぬ子を日を經るまゝは親と深くいと温和く生立よぐ夫婦のいよく愛は開れ下へも置  
 可愛がり我身の老るの悟らずして早く年月の經よかし疾く成人せよかしと自由自在に引伸  
 す兒女の玩弄物の飴細工を見つ、羨み昨日今日いと焦思しく過すうち春の花秋の紅葉と幾  
 回か樹梢の色を染換て愛は五年の星霜を經て望れハ安政三辰年濱の十歳の春と迎へぬ是  
 ちん松崎喜三郎の實娘お濱なるとの別段愛は説すとも看客既は知りたまひめ閑話休題お濱  
 の齡説は十歳金鷲始めて卵を出で梅花漸く替へ持ち天の生せる窈窕美貌小野小町の生立を  
 斯やと思ふ計りあれハ夫婦の念は憑母しがかり素より有福活計あれハ讀書裁縫の業は更  
 り琴三味線手洗等に至るまで稽古は入費の嵩むを厭はず良師を擇びて學ばせけるよ一を聞

第二章

て十を知る心探さへ伶俐ければ後來の善き聲取て老行く先の杖柱と末を樂み居たり覺

當時下谷山下は巾着切(拘捕の一名)の頭分小夫狗長次と云るものあり兇惡無頼の曲漢よ  
 似たる夫婦の比譬は洩す其妻はお辨(三十八)といふ毒婦あり丹が履歴を尋るは伊豫國宇和島  
 の城主伊達家の藩士杉浦左膳の娘よて父左膳の同藩の大監察を勤め大祿を領せし門閥の家  
 又生れながら二八乃春を遊へし年則ち天保七年中同藩ある三浦某の倅勝之助と人目の關を  
 しのひ兼親の許さぬ不義淫奔天は在らハ比翼の鳥地は在らハ連理の枝變りたまふな變ら  
 せと行末かけて契りたる二人の情由をしらぬ左膳の初孫の顔早く見やぞ同藩淺香松藏の  
 二男豊之丞と云る壯士を舞よしたしと言入しは縁談頼は整ふたれば雙方の親達より右の由  
 を運着して藩主へ斯と出願し結婚の許りありたりと聞て駭く勝之助お辨の素より踏迷ふ戀  
 の關路は前後も分す密よ多を認めて勝之助を招き寄せ身妾の心は變らねと親の隨意夫定め  
 貴郎は添れぬ上からの身妾の實は死の覺悟憐れと思ひたまひらハ連て退てと搔口説く情夫  
 を今の證術きく其許が爾云ふ心なら争か見捨ておくべきや不義不忠と謗らハ誹れ其許を伴  
 て此地を立退さ他國へ走て無遠ん。そんなら斯して云してと語るも四方を彈りて耳は口答

七



せ稍しべし呷き果て黙頭合ひ其日の其ま、別れしがいよく豊之丞と結婚と云ふ其夜室内の混雑は打混れお辨之父が所有の金二百五十餘兩を盗み出し圓へ行と見せ掛て縁側傳ひ庭へ下立ち小襦さりと取上て築山の彼方ある非常口の戸を密と明け外面へ出れば豫てより待設けたる勝之助と手は手を取て何の苦もなく江戸邸を逃れ出て繁花の土地と聞及ぶ浪花津さして東海道を西へくと落行ぬ茲に東海道掛川驛の伊勢屋と云る旅店の奥座敷は二十日餘の逗留客あり男女の兩個あるが男の風邪の心地より次第と重て今いしを三度の食を籍だも取らず頼少なき景象なるを心細氣よ伴れ女が介抱あすい是ぞ此れ彼の勝之助とお辨より第五日目又愛まで來つこの家へ宿を求めしが其夜よりして熱發し堪がたき様も見えければお辨の驚き左より右と介抱しつゝ夜を明し宿主と聞へて醫師を迎へ彼是と手を握せしかど傷寒ぞといふものもや後ふ人事も覺ぬまで惱めるまゝ夜の眼を合はずお辨のおろく娘氣よ介抱怠りなきものから頼よの藥餌の効験も見えず病人より己先づ心地死ぬべく思とも斯ていあらじと氣を勵し二十日餘も送るうち漸くふして勝之助の熱も半の愈りつゝ今い命は障あらしと醫師を言ひ傍でを思ふ程よのあれど食を進まず枕だも上らね何があしてと心急き種々氣を揉て價の高き藥の案より食物等を調へて進れとも舌乾き咽嚥して

喫べ得ず斯て何時か全快で立出る日のわらんやと干々よ心を碎のみか坐して食は山も空き比喩よ波す家出あす時持出せし二百兩の金も退々よ消費して百兩不足となりしかば是を苦勞の第一よて男の顔の衰しを見るよ付け聞よ付け親の命よ從ひおば斯した愛目のあるまゝいよ心がらとは言ながら知らぬ他郷よ彷徨て命よ換し男さへ今を眼と煩ひて便る方なき旅の空心の裡でい我が身をも然こそ怨とて在すらめ堪忍してと計よて塞がる胸は堰來る涙その泣顔を見せまじと隠す由なく鳩尾を撫て瘡よ紛らかす悔て返らぬ親れ對情夫の病よかゝる難義猶はこのまゝ長引て去等の爲よ此金を消耗さば如何せん進退其處は谷りて又せん術をなかるべし今の内よよき工夫のあからずやいと生娘よ似氣さ思慮を運らす折を四五日前より此家よ滞留なす旅人移り上州足利の絹商人ありと稱し上旅籠の食好茶代は素より下婢等も數多の纏頭を蒔散し如何よを金満家と思はれたれば茲よね辨の惡念生じ襖越なる隣座敷と借り切りて居るこそ幸ひ折を親ひ彼の旅人の所持金を盗み取らんと心の中よ恐ろしき事を思ひ起ち或夜小雨の降りしり枕よ響く鐘の音もいや丑瀧となり渡る時分を計りて假寝せしか辨の密と寢床を脱出で勝之助の顔を差覗けの病苦よ疲れてスヤスヤと眠る面相瘦果て頬骨顯れ眼凹み見る影もなき有様よボロりと落す一車心弱くて叶はじと氣



十  
を取直し廊下へ出で剛へ行て用を達し間毎く泊り居る合宿の客の寢息を窺ひ抜き足さし足忍び寄り隣座敷の一間の障子音せぬやうに引明つ内の様子を窺へば行燈の影いと暗く彼の絹商人の枕と外し前後不覺の高いびき造化精妙と這寄て蒲團の下なる胴巻を引出さんと差入るゝ手先をむづと捉へられ驚くお辨を取て押へ岸破とばかりは跳起たる彼の旅人の聲荒らげ。枕さがしの盗人め人むらうの東海木曾兩街道を股に掛け旅から旅を稼ぎ廻る絹商人を見損じたかと云つゝ行燈揺き立て灯影も透し見て驚愕。ヤ、其許の隣座敷の夫婦連良人が長の煩ひも旅費の金を遣ひ尽し貧から起る一時の出来心か知らねへが年齒も行かぬ嶋田鬻木咲の梅より愛嬌の溢るゝ娘の枕さがし呆れて物が言れぬへどうぞ見遣してと云たらうが良人の爲でも了簡あらぬ宿の亭主を呼覺し繩を掛て其筋へ突出すから覺悟しろトサ野暮を云ふ自己でいねへ壁へも言ふ通り魚心ぬれば氷心モウ斯あつたら其様もぶる戦慄もやア及べねへ度胸を据て自己様の素性來歴聞てくれと捉へし手首を弛ゆつゝ床の上小大胡坐お辨も對て云るやう上州足利の絹商人と言觸したの眞赤き虚飾以前を云へば播州明石で大富豪者と評判されし廻船問屋の息子株乳母や子傳も侍づかれ坊さま育の世間不見を蟹でも親も預かつたか生れながら手が長く何でも彼でも横も行き見る物毎も欲

くあり十二の時より盗みを始め十五の年親の金たんまり持出し神風の伊勢の國へと膽太くも脱參宮からぐれ出して酒と色と身を持崩し根が商估の悴でも算盤取て玉の汗流して拮据稼ぐより人間僅少五十年二天作折半の二十五年の寐て暮を長い浮世も短けへ命息のあるうち充分な快樂を尽すが何より徳だと心を定めて夫より人の物を我が物と胡魔の蠅の群小入り榮耀榮華をずるが路から東海木曾兩街道旅から旅を股に掛け稼ぎ廻るとの内も同氣求むる乾兒も出来今ちやア雷神與吉といふ綽名を取た頭分江尻の宿でお前達が駕を雇つて急ぐ休の欠落者の二人伴殊も懐中の重い處を瞥乎と睨んだ待網もかゝる好鳥逃さじと跡よなり先よなり二日以來踵て來つ此の掛川で合宿とあり其許が所持の胴巻を此方の懐中へ巻上やうと思ふ矢先折あしく情夫の熱病でお前の看病のその爲も夜も碌々寝ぬ体も盗む便のあかりしが一日く延すうち此の美しい顔も似ぬ魁された今夜の場合何と物の相談だが鬼乃女房も鬼神とやら何を隠さう眞底からお前の度胸と風致の二つは命を賭て惚やした病癒けた青二歳の鈍刀武士を振捨て己の女房もある氣のいかに否だど吐しやア氣の毒だが宿の亭主へ云々と今夜の始末を打明て突出すから覺悟して否か應かの返答を聞せてくれとお辨の手を再び取て引寄つ煙草輪も吹く面魂ひ常人ならず見ぬたりしが我が身の上



一落ち越る雷神與吉が寒身の豪詞弱身を附込み引寄せせず己の心は従ふが否か應かへ返答  
 まだい地獄極樂望みの儘モシお辨さん黙言て居ちやア分らぬへと再び手を取り引寄る引寄  
 られてお辨の今更否と云れぬ此場の仕義何とせん方泣顔を僅く擡げて與吉の面相見れば見  
 る程色白く肌清しく眉秀で凜然と締つた男様雷神と云ふ恐ろしき悪黨の名は似をやらすい  
 と美しさは恍惚と忽ち迷ふ淫婦の本性病癒けた勝之助は比べて見れば雪と墨死ぬか生るか  
 頼なき情夫を頼て便々と旅塵は長の光陰を送り路費の尽か曉は馬鹿を見るより寧ろの事出  
 來心とい言へ女達は盜賊を働く手請を見られ夫を繼ぎ引寄せせず口説るゝこそ此方の僥倖  
 半を馬は乗換る此處等が思案の決斷處と胸は問ひ腹は答へて早くも夫と決心せしかば與吉  
 の傍は身を摺寄せ。卑妾の様な不束者を本程までと思ふて下さるそのお詞は席詞かくは何  
 を行末見捨すよと跡言さして願口を襟に差入れ俯く風情淫婦ながらも流石の恍惚子耻らふ  
 体のあどけなさ與吉を莞爾片類は笑み。そんならいよく病人の。エー疑心深いと其まゝも  
 結々伊夢露縁の同氣求むる悪漢淫婦怪中となりたりしが夫より後の勝之助と邪魔はなし  
 つゝ不實も早や死ねかしと捨てて介抱處か藥餌を與へず酷く扱ふのみあらでいつしか與  
 吉と謀し合せ我が着換の衣類の素より勝之助の旅荷物より旅費の金まで一錢餘さず悉皆く

引摺ひ假令當座の淫氣もせよ一旦二世と誓たる病臥す情夫を宿屋に置き去り夜は紛れて與  
 吉と共に庭先より塀を乗超り忍び出て跡の野とあれ山の奥手は手を取て透電せしは現は憎  
 むべき所業よして浮薄と云を餘りあり

第三章

却て説く勝之助の倦る事のありどもを夢を絶て知る由なく病苦は疲れてうとくみ眠る  
 枕は鳴響く丑滿の鐘は目を覺し胃熱の爲は焼付く如く咽喉の乾燥を濕はさんと蒲團の上よ  
 起直り力なき手は引寄せ枕元ある灯燈の灯を揺立て彼方へ向け水を乞んと二聲三聲は辨  
 くは呼聲せと更ば返答のあらざるより箇の不審と側を見れば主のいつしか漢抜のから床  
 階の圓へでも行きしならんと待せをく戻り來す心しきり焦燥て咽喉の乾き堪えがたけ  
 れば手を打鳴し人を呼ぶ鼻息の聲の高く聞えて來るもの更はあかりける此のお辨は何し  
 てじや何處へ行きしと左思右考冬の夜のいと長き尙は一層思ひ屈し夜の明ると今か／＼と  
 待ち居たるうち漸くは一番鶏の告渡れば行方を急ぐ早立の旅人等が起出しより宿屋の下婢  
 を續いて起出て睡惚眼を擦りながら朝餉の準備手氣の湯と奔走ると呼び止め其處等はお辨  
 の居りませぬかと問へ下婢等の所々を尋ねお連のお女中さん影だは見えず何した事で



んせうと肩を擧めて語り合ふ折柄駈來る一人の下婢慌忙しげと聲を立て足利のお客人も何處へお出さされたかお荷物に素より影だも見えずと言葉未だ終らぬうち飯炊男の聲と去て平常の開かぬ土藏の後の非常口の錠を捻ぢ切り脱出た人のある様子紛失物でもありいせぬかと騒ぎ立ると驚く人々偕いの女中さんの良人が長の煩ひも愛想を尽して不實もいつか足利の客人と痴々苦離合て手お手を取り欠落したと違ひない笑止の事やと異口同音よ罵り騒ぐ始終の様子を聞くと齊く勝之助の切齒をちして口惜がり七人の子に擧すとも女よ必許す世の俚諺もあるものからお辨え限りて其様な浮薄な事もあるまいと思つて居た此方の過誤旅寝よかゝる病難の我を置去り逃去るとい浮薄と云も餘りあり人の手前も面目赤し強壯な身軀であるあらば跡追掛て引捕へ思ひ知らせてくれんもの夫も叶いぬ此病氣と我と我が身を悔みつ愧つ男泣よぞ伏沈む心の中や如何やら推測るだも哀なりかゝる折から宿屋の主個の勝之助の病問入來りいと氣の毒氣よ云るやう。貴客の御病氣も荷且の事と思ひの外日よまし重る御容体お運のお方があらば格別此様な薄情な事もあるまいと今日が今まで思つて居たアノ女中さんが貴君と捨て欠落した上からの一人旅の止めぬ規則況して重症の御病人万二の事でもあつた時よ私共が大迷惑誠にお氣の毒でいあります

保證人がなければ一日もお止めやすとの出来ませぬとサ斯ばかりやしての私しまでが薄情の様あれで憎ても猶ほ餘あるにお運の女中起居さへも不自由な貴客を捨て路費は素より衣類まで一つ餘さず持ち行れし由餘りといへば腹が立つ最前より若い者を八方へ手分して二人が跡を逐せしが喧嘩過ての棒三昧皆空しく立歸りぬれ可憐相な貴客の身軀や便ちくも口惜く思ひたまふお心の中お察しやして居ります此上の少しも早く御實家へ飛脚を立られお迎の人をお招きなさるが何よりの上分別萬事いよしまし私共がお取計ひやま升れば委しくお書状をお認みされいづれ後刻と言捨て立去る主人が後影伏拜みつゝ勝之助の面目なと口惜さよ胸も張張く無量の思ひ齒切べり獨言旅寝よかゝる憂目を見るも人の娘を教唆之親を捨て君を棄て不義不忠を働かして戀路の闇も故郷を迷ひ出たる我が過誤誰をか怨み誰をか憎まん今更斯と親元へ告道とのあるべきを我も武門の家よ生れ一旦不義の汚名を取りも昨非を悟らば豫て聞く死すべき時よ死せざれば死も彌増る恥ありとかななりくと胸よ問ひ腹よ答へて決心し名を包て死する譯を事簡短よ遺書し其夜更るを待兼て布團の上よ居直つ傍の脇差掻取て扱ば玉散る氷の刃手拭を巻て右手よ掴み肌くつろげて脇腹へ押當ちから突立んと心計の迅れども此程久き絶食よて腹の宛ら脊よ付つゝ凹て刃尖の達かぬを箇



口惜と氣を勵し力を極て苦陸と計り腹は突立て引廻す病癒けても有繋の武士物の美事よ切腹して相果ぬるこそ慙然あれ

第四章

話頭兩岐漫表惡漢毒婦の與吉お辨の掛川驛を欠落して追手の掛らぬ其間よと夜よ走り日よ歩み只管道を急ぎつゝ京大坂の華花の地まで人の目よ付やすければと伊勢の白子の知己を便りて茲よ暫く足を止め翌天保八年お辨の十七の春を返へまだ恍惚の小娘乍ら膝の益々肥太りぬ此白子の驛外れよ一膳飯を商ふ權太郎と云る者あり驛内の素より近在まで可也名の聞たる破落戸の頭分よ腕よ蝮の刺刺あるゆゑ人縛名して蝮の親分と云是あん雷神與吉の子分あれバ與吉お辨の昨年中より此家の庭を隔たる離れ座敷をかりの住居深く潜伏て居たりしが或日權太の與吉お辨と三つ鼎よ膝突合せ時小親分此間から姉伍のお辨さんを玉よ遣ひ何か一番金儲と相談の極つた故いろゝ工夫をして見たが先差當り是と云ひ此白子で一二を争ふ酒造家の大富豪富坂屋勘兵衛方よて小間道の小女が雇たいと云が先方ひ名よ負ふ大家の事茲へ姉伍を入込せ家内の様子を見たとき旨ひ話よならうもしれすと低さ告るを聞く與吉の暫し思案の体ありしが何か獸頭さお辨の耳よ口を寄て呶けバお辨の莞爾笑を

含み成るか成ぬへか知ねへがマア左を右を遣て見やうと云よ咄が纏りてお辨を權太の姪と言做し富坂屋方へ奉公よ住込せ久く江戸よ居た處兩親共よ病死して孤獨とありしゆゑ私し方へ引取ましたがお役よ立か立さるかお使あされて下さらひ難有く存じますと言拵へて富坂屋へ中働さよ住込せしが开も此の富坂屋と云るの土地よ有名き豪家よて江戸の新堀大坂西の宮の二箇所よ支店ありて番頭手代杜氏等の奴婢を合せて四十五人を召使ふ最有福の身代よて主人の名を勘兵衛と呼び一人息子の市太郎と云るの二十一歳の若丁あれバ性來伶俐くて商法向よを抜目なく奉公人等よ先立て實体よ働くゆゑ奉公人等を若旦那の用と云ひ骨を惜まず競て之が用を爲すまで皆盡々く服従せり母の先年没故て父よの孝養忘りなく朝夕優く仕るものから誰譽ぬ者よとてあし此市太郎よ三月程前娶たる妻有て其名をお菊(早女)と呼做つ攝州堺の醫師貢立齋の長女あり然るお此程實家よて餘義あき金の入用あり外に融通の道もあければお前から驛殿へ金の工面を頼で吳と父が無心の文面よお菊の痛く心配し如何よ夫婦の中とい云へ嫁入きて程もあき實家の不如意を打明て金の工面を頼となバ本夫乃機嫌の損じやせん殊よ本夫をまだ部屋付具の手前を如何あらんと夫や是やと思過去遠慮あせしが奇禍の種とあきともしら齒の花嫁類よ心を悶ゆる様子を早くも見て取る毒婦の



お辨茲ぞ何かの手懸ど忽ち巧む悪事の民折を折とて市太郎が取引先より受取たる五十兩の金を手函の中へ假ま入しをチラリと見認め隙を窺ひ其金を盗み取しを誰わつて知る者更も無りけり兩三日経て市太郎の右の金を取出さんと蓋押除れば箇の什麼も明て悔なき藻抜の穀箱他より盗人の入るべき筈かし察する處る雇人の中は盗み取たる者わらんと種々詮議及びつゝ夫々所有品を調しは九助(モツゴ)と云る雇人の文庫の中は近傍なる貸座敷の娼妓の元より送越たる無心の文の出たるより忽ち同人は嫌疑乃かゝる枉神是非もあや九助の座は平伏て番頭庄兵衛進み出で。コレ九助殿能く聞れよ若旦那が此間手箱の中へ入置れし五十兩の金が紛失り私等始め一同へ皆嫌疑のかゝる騒動種々調べて見た處何とも怪しい和主の素振若い時より往々ある習ひ不圖した一時の出来心から盗んだあらば包み隠さず誠は忍入ましたと詫る上の若旦那をお慈悲深いお方故私等から宜様も執成てやる程は速く實を吐きされ包み隠さばお前の爲め悪さのみかり私等まで其盗人の出ぬ内の痛くさい腹を探られ實も迷惑しますするト物柔かよ詰問され九助の只と呆れ果て。思を寄らぬ其お尋問何で私が大外た主人の金トト言せをわへず短氣の庄兵衛活と急立ち。爾強情を張る上の確乎も證據を見せてやると懐中探りて取出す娼妓の文殼眼前へ突付け。嚴い店の法則を破り御主人始め我

々の目を盗みて遊里通ひ娼妓は馴染を重ねく不忠を働か遣ひ捨たる金の如何して算段せしや昨日以來和主が預る花主先の帳面を調べて見れば餘程の引負開を埋んとて人知れず盗み出たは相違あるまい是でも知らぬと陳ずるかと詞餽とく問糺され九助の辨解あさんよも主人の眼裡を忍びくゝ娼妓買せしのみあらず融通の爲め遺線たる引負さへよめるものから彼五十兩の紛失したるに全く以て知りませぬと實を告ても嫌疑を解くべき證據のあらざるより庄兵衛中々合點せず云ねば斯して言すると有合ふ十露盤おツ取て散々も擧据し上土藏の二階へ行連て言ぬ問いつまでも斯して置くと無慘よも幽閉おきさる哀ある去程は市太郎の失たる金の詮議を番頭等も打委せ素より慈悲深き性あれば只穩便に計らへと吳々も吟附おき其身は部屋は垂込て獨りつくづく思ふやう奉公人が遊興に耽りて主人の金を持出し畢竟家事不取締より起るとよて愚將の下よの強兵あしとの世の俚諺を思ひ合され是皆主人の取締宜しを得ぬ我過失と斯る事よを我身を悔み心も耻て腕又ぬき氣も慄れて茫然たる折しも隔の襖を開け煎茶を入れて持來るお辨の市太郎の体を見てモシ若旦那様さんで其様よお變さ遊ばす只今御新造様がお茶をお入遊ばし其お初穂を貴郎よとれ優しいお心よ似氣をさいますア大外たと言掛て他事よ紛らす詞の端市太郎の聞答め。女房お菊が大外たとい聞捨ちら



ぬ其一言仔細の如何よと屹相變へ再三再四問詰られお辨の肚裏よ仕濟したりと思へど色も現はさず。サア其仔細を申しまするの卑妾風情の口づから申し上るの勿体なけれど常日寒からぬ慈悲深い貴郎よをお似合なさるぬ今度の始末罪なき九助どんはお土藏の内へ幽閉られて非道の折檻其お金の行道へ御新造様こそ能く御存知實を申さば此間お實家より金の無心親様のお頼は不圖遊せし出来心貴郎のお手箱より人知れずお金をお出さされたを慥に認ておさました只今大外たど申したの善悪あき下賤の口癖とお宥しあされて下さりませお家のお金をお家の御新造様がお使用なさるゝの當然よしや貴君よお斷りなくとも悪い筋よお御用あされたと云でもお支親御様の御無心とあればいつそ譽べき孝行必を御新造様を以て咎なく只九助どんの無實の罪をお解なされてお遣わさるべせと陽面よ飾る似非忠義我名の辨は打委せ首尾旨く言廻したる外面如菩薩内心如夜叉毒婦お辨が恐ろしき鐵をを鏢かす舌頭は説付られて市太郎のお菊は限り其様を不埒事のあるまいと思の外なる事を聞きお辨の妖言を半信半疑に膝摺寄せ。お菊が金を出し手證を慥に見たと云からの疑ふよりあらざれと愈々夫は相違なきやと期を押し問ふお辨の莞爾。外の事あら左も右もなんで卑妾が此様を偽虚言を申しませうか疑ひ遊ばすなら證據をお目よ掛けませうと懐中より取出す一通。此お手紙こそ御新造様のお實家から参つた無心のお多お金をお出さされた時何の氣をなく其お座敷へ参り合せた卑妾の足音は驚愕をされ奥の一間へ入たまひし跡よ遺りし此一通方一お事と言出て卑妾迄が虚言を云かとお疑ひ遊ばすお其證人よありますと斷然云れて市太郎今のお辨の口車は鈍くも乗られ迷ひ出たる心の駒の止途なく怒り任せてお菊を呼付け云々の由を云聞せ包み隠さず白状せよと思ひ掛る本夫の難題お菊は只管涙よ暮れ。卑妾が金を盗みし事と聞て恐しき虚言を誰が爲しか知らぬ侍れど罪なき卑妾は罪を若せ貴郎迄が其様をト辨解をさんとする傍からお辨の爰と進み出て。モ御新造様其様よをらをお切遊ばさすといッス々だと被仰りませ若旦那の御金を御新造の貴女がお出なされたとして別は不思議をありませまいお隠しなさる程却つてお爲ななりませぬと言まぐらされて温和のお菊借いお辨の讒言かと悟れど争論ふ術もなく口惜涙を遺瀨なき市太郎は飽までお辨を籠絡されたる事けふ一圖よ夫と思ひ込泣入るお菊を罵り懲し媒介人の何某を直よ呼で譯を話し一先お菊を預けたる此一段の混雜の繪様よ譲りて委しくものせず看客宜へ察しぬかし

り取出す一通。此お手紙こそ御新造様のお實家から参つた無心のお多お金をお出さされた時何の氣をなく其お座敷へ参り合せた卑妾の足音は驚愕をされ奥の一間へ入たまひし跡よ遺りし此一通方一お事と言出て卑妾迄が虚言を云かとお疑ひ遊ばすお其證人よありますと斷然云れて市太郎今のお辨の口車は鈍くも乗られ迷ひ出たる心の駒の止途なく怒り任せてお菊を呼付け云々の由を云聞せ包み隠さず白状せよと思ひ掛る本夫の難題お菊は只管涙よ暮れ。卑妾が金を盗みし事と聞て恐しき虚言を誰が爲しか知らぬ侍れど罪なき卑妾は罪を若せ貴郎迄が其様をト辨解をさんとする傍からお辨の爰と進み出て。モ御新造様其様よをらをお切遊ばさすといッス々だと被仰りませ若旦那の御金を御新造の貴女がお出なされたとして別は不思議をありませまいお隠しなさる程却つてお爲ななりませぬと言まぐらされて温和のお菊借いお辨の讒言かと悟れど争論ふ術もなく口惜涙を遺瀨なき市太郎は飽までお辨を籠絡されたる事けふ一圖よ夫と思ひ込泣入るお菊を罵り懲し媒介人の何某を直よ呼で譯を話し一先お菊を預けたる此一段の混雜の繪様よ譲りて委しくものせず看客宜へ察しぬかし



建廻したるいろは土藏を隔し此方の日向よお辨の一人夏衣の洗ひ張をして居る處へ四下  
 狼く見廻しあがら九助の近く進み寄りモシお辨さん此間中からお禮を言ふと思ふて居た  
 が一つ家でも折があくツイ其儘ふ打ち過しが私がお慮ね嫌疑を受け非道の責苦よかゝる時  
 此身も薄暗き行状あれば夢更覺のさきとあがら辨解がたき手詰の艱義をお前が斯々云々と  
 咄して下すつたバツかりで此身の嫌疑忽ち解け今猶は無事で勤め居るも是皆お前のお蔭ゆ  
 る死でも思ひ忘れませぬと眞實を面を顯して拜まぬばかりお謝辭を云ふをお辨の忽ち打消  
 て。おんのマア九助さんとした事が改まつたろのお詞一つお釜の御膳を喫れば大を鷹も同  
 し傍輩そのお謝詞より及びませぬ夫の爾と始めの内は若旦那の勿論大旦那で矢つ張お前  
 と疑つてゝ在たがお實家から来た御無心の手紙か何よりの證據とありモウ三月程も経れど  
 未だお御新造の媒介預どうせ御離縁ものでありませうホンよ意趣も怨もあゝ御新造様の罪  
 を顯し今更思へばお氣の毒お辨さんの餘計お饒舌と人よ指を憎まるゝ夫も是をお前の爲  
 と跡言として秋波は九助の顔を睦平と見やりて齒さず顔を掩ふて莞爾と笑ふ際ハ陥穽是が  
 毒婦が掛罟は箝らるゝとを知らぬ九助戰慄と染込む戀風は靡くお辨の女郎花終つて怪しき中  
 となり水洩さざと契りしが是も九助が身を果す基とこそ知られければお辨は謀略成就し

て嫁のお菊も罪なき罪を捺り付つて放逐させ尙ほ已が加擔人よ引入んため心よ染ぬ手代の  
 九助と仇し契を結びおさ此から先の市太郎を我が手よ入て一ト仕事と根強く巧む色仕掛律  
 義一圖の市太郎をこの頃妻の紛失せし金の件より調中媒介人よ預け遣り獨り寐る夜の肌淋  
 しく常よの飲ぬ口あれど少々づゝいお氣晴しよお過しおざるがお身の爲めと毎夜枕よ就く  
 際寝酒の準備何から何まで痒き所へ手の届くいと實直なお辨の姿よ稍や心の動き初めたる  
 様子を見て取る毒婦の手管引ば引るゝ姫百合の心の鬼か鬼刺草遂よお辨の据膳を鈍くを喰  
 ひし市太郎怪しき中とぞありよける恁てお辨の一日の事九助を小蔭よ摩招き四下見廻し聲  
 を低。め不圖した事からお前と契り末ハ夫婦と約束したが爰よ一つの障得と云いお前も豫  
 て知ての通り若旦那の御新造も別れ聞淋しき處から卑妾を捉へて無体の戀慕御主人様と  
 思へばお腹の立どを詮術なく恥掻さん有業よ一寸通よ昨日今日柳よ風と受流し會釋  
 て居れば好氣よあり附つ廻し口説るゝ悲しひ辛い卑妾の心若し此まゝよ過しなば果し手  
 込よ逢ふと知れず爾も事のつた日よ良人と思ふお前よ對女道の道が立ぬ程よ氣休か  
 しらさいが平常お前の云ふ通り眞實卑妾を可愛と思つて呉る心なら跡ハ野とあれ山の奥と  
 んお苦勞を厭いねばいつその事よ卑妾を連れ欠落して下さんせと眞言虚言打交て併べ立た



る空涙播口説れて何う堪らん九助の浮架と乗氣もあり。お前の爾云ふ了簡なら決まて私よ  
 否の幸ひ伊賀の上野の舊さ知已もあるされば夫を便りて少しも早くと急立つ九助を  
 暫時と止めお辨の耳は口を寄せ何か低々呷けぱ類は黙頭を片類は莞爾、そんなら今夜帳場  
 の金を、いふ聲高して押止め互は袖もて口を掩ひ後よくと捨臺詞店と奥との中仕切別れ  
 て立去る九助の影を見送るお辨は舌ペロリ是も奥へと入よける九助のお辨は教唆され主人  
 の所有金三百兩を盗み出し夜は紛れてお辨と共に富坂屋の庭口より塀を乗越へ表へ出で互  
 よ手よ手よ引合て伊賀の上野を志ざし行方の道の遠くとも入眠立立問道より走らぬ如か  
 ずと同國なる一志郡波瀬村を横切り里俗龍神山を越行く折しを日いつたりと暮果て瓜先  
 暗くありしかば迅く宿を求めんと只管急ぐ道傍の一叢茂の樹立の間より突然と出たる一人  
 の男手拭眼深き面部と包み葉越の月よ男女の姿を透し詠めて聲立振て汝等二人の大膽も  
 主人の金を盗み出し欠落さすと見たの餅目か开も我を誰どか思ふ斯る姿よ身を窺せど實と  
 云べ國主より内命受し探吏なるぞ二人共細打て代官所へ拘引てる覺悟せよと罵られ九助  
 の駭然弱身を見せじと戰慄る足を踏締て。私等二人の其の様を怪い者でい決してないぞ半  
 分言せず彼の男の。黙れ盗人狂々しいといの汝等の事其筋の探吏を勤むる我々が黒い眼で睨

んだ上のちたべたしてもモウ叶いぬ汝の富坂屋の手代九助あらすやと星を指れし一言よ夫  
 れ知られていと一生懸命豫て準備の腰刀抜 手鋭く斬付るを此方もさる者身を反し小瀬  
 を腕立奇怪千萬抗抵ささげ用捨のさいと同じく太刀抜き鬪し二合三合闘ひしが九助の忽ち  
 斬立られ後へくと峻巡ながら樹株は躓り倒るゝ處を踏込み來つて彼の男が嵩よ蒐つて打  
 下す刃の下こそ地獄され九助の左の肩先より乳の下掛て破亂淋す隙をあらせず又た一大刀  
 助の邊を貫かれ苦と一と聲叫びをあへず虚空を掴んで死んでけり件の男の冷笑ひ思つたよ  
 りの脆い奴と血刀拭ふて鞘よおさめ最前より彼方の樹蔭に潜み居たるお辨を見て。オイお  
 辨モウ野郎の死てしまつた辨「モウ與吉さん脚色を通り圖は當り 與「序幕の狂言大出來く  
 辨「是から肝心の二番目狂言時代と世話場で持込で 與「何の手筈を 辨「權太の家よて 與「  
 ドレ行うかと塵打拂ひ九助が死骸の懷中より阿卷ぐるみ三百兩の金を奪ふて死骸の其まゝ  
 其處よ打捨かき跡を見ずして悠々と立去しこそ不敵され开も此癖者の何奴ぞ是をんお辨の  
 情夫なる亦彼の雷神與吉とい看客既よ娛承知あるべし爰よ富坂屋方よての三百兩の紛失と  
 いひ九助お辨の姿を見ねねべの切二人の豫てより密通をして謀し合せ主人の金を持出て欠  
 落せしふ疑ひなし遠くへ行まじ逐駈けよイヤく逐手を出すよりも先づ差當りお辨の請人







蝶の權太を呼寄よと評議區々上を下家内の混雜一方ならず權太の此四五日以降他出あして  
 留守との挨拶又た九助の親許の隣國伊賀よて數十里を隔し事ゆる差懸りし火急の間合ふ  
 べくをあらす斯る混雜の其中より市太郎の二度三度お辨と契を重ねしゆる爾來如何ある奇  
 災の起るも知れべと右思左考途方暮之其翌日富坂屋の店先へ袴羽織ふ兩刀挟み威嚴げあ  
 る立派な武士彼の權太を伴ひ入來り我等の今般江戸表より態々當地へ参し者是なる權太の  
 事よ付きナト當家の若旦那は面談致したる筋あつて推参せり此義宜あふお執次をど折目  
 正き武張た詞は店の者の只唯々と平伏あしつ奥へ行き斯と告れり市太郎疵持の胸の薄氣味  
 わるく去とて面會すの尙更又怪しまれんかと思按を決め先づ此方へと案内させ一間へ請し  
 て對面す當下件の武士の頭を低て市太郎は對ひ。拙者の伊豫の宇和島藩よて淺香紋之助と  
 申し江戸屋敷在勤の者あるが是なる權太の紹介よて御當家へ奉公致し厚き御恩預るお辨  
 との親と親どが幼稚頃より号婚あせし本夫よていへば一應お禮もアし上たく且の聊か用  
 事もムれば何卒お辨よ逢せ下さるやう偏頼入ますと演る詞の丁寧あるを市太郎のお辨  
 の本夫と聞てギツクリ胸を釘左あらぬ体よて答るやう其お辨のことお付さ昨日以來幾回と  
 あく權太殿を迎遣しが他出せしとて來られず今も今とて迎遣んと思ふて居たよ能き折

柄ね二人ともよ聞われ借をお辨へ九助と云る店の者と不義を働き剩さへ三百兩の金を盗  
 みて昨夜の中よ欠落あして踪蹟しれず夫故よこそ權太のを屢々迎遣しあれと語るを篤  
 と聞果て彼の武士の打案じ成程金の紛失と云ひ九助と同時よお辨の行方知れずよかりま  
 云る、からの一應御尤をよの聞ゆれとまだ此外よ兩人が不義せしと認らる確乎を證據あつ  
 ての事かと問れて夫はと行詰る様子を夫と見て取る武士。外よ證據のあき時は是皆當家  
 の虚言よて我々を欺く巧みの種憫然やお辨の昨夜中非業の最期を遂てると云れて吃驚市  
 太郎。ソリヤ何故と問返せば彼武士の懷中より取出したる一通を市太郎の前よ置り。何と  
 涉主人此手紙の手跡よいお見覺がムらうなト扇子を膝よ突立て詰寄たり市太郎の不審あが  
 ら件の手紙を取上げてよく見れば箇の如何よ紛ふ方なきお辨の手跡打さしと胸を押鎮め  
 有枝有葉を讀下せば紋之助へ宛たる遺書よて其文言よ曰く貴君様どいいたた婚姻のいたし  
 やさずいへを親々が許せし夫婦中あるよ不幸のみ打續き遠き此地よ参り居りますなれば  
 心の貴君のお側と離れず旦暮無事を祈り居りし私し事を權太様のお世話よて富坂屋へ  
 奉公よ住込いらふところ何の因果か若旦那市太郎様よ懸想され思のぬ人よ思ひれて心よ從  
 へと無理難題涉主人様の涉威光よてとうとう手込逢ひ心ならずも肌身を汚さ夫さへ貴君



對し申譯も御座さき上市太郎様の因果の胤を身宿し如何のせん心配の折も折とて貴  
 君様よ此度私しを迎の爲め江戸より出張相成ゆ由承まへり我夫ならぬ夫重の仇し枕を  
 契したる罪の程宜しく此世までと詔を致しがたくはまゝ死でお詫す上は何卒に宥し下さ  
 れたく尙此上のお願よ私し方より心を許し靡さし譯よは之を只々主の威光は壓れ否と  
 云ても許されず無昧の戀慕は詮方もなく心は従ひて事ゆゑ切なき胸をお察し下され責  
 て私しが亡跡まで貴君のお口から一遍の御回向の程くれ念じ上よりわらくし  
 ど書たりける市太郎此遺書と看るゝ面色青くあり又赤くあり且つ驚き且つ呆れ消も  
 入なき風情なるを尻眼も掛て紋之助の突然權太を引捕へ斯る場合は至らしめし元をはとい  
 へば主の女を己が勝手も説勸め家風淫猥な町人風情も奉公させし汝の誤まりアノ愛な不  
 届者めと眼を瞋し同謀者權太を睨み付け聲荒げて罵るやう武士たる者が嗚呼と妻を他  
 人淫姦れしのみならず夫が爲め非業の死を遂せたるも是皆汝の科されば我が武士道  
 を立るため汝が首をす受け而して後市太郎殿も姦通の罪判せん觀念せよと云ふより迅く刀  
 の柄も手を掛て鯉口四五寸抜き掛くれの權太の狼狽聲慄のせ。エー情あいな旦那様市太郎殿  
 も聞えませぬ家風正さ御當家と思ひ奉公させたアノお弁を主の威光で無理口説腹散々姦淫

だ揚句非業も死なした其上も私しまでか此場の難義眞ツ二つよさるゝのを見殺さるゝと  
 の借も悲しや情あやどを詫して下されと頼も叫ぶ市太郎何とせん方行詰り途方暮て  
 茫然たる折から後の襖を引明け入来る父の勘兵衛の悴を奥へ逐遣て紋之助と權太も對ひ  
 始終の様子の一問よて残らず聞た悴の不知元より主ある女としらず手を出たの若氣の誤  
 り又たお弁が死だと云も何やら怪いこの遺書殊も九助の踪蹟さへ未だ明白も分らぬ何方  
 が胤やら贅やら弱身を借込む癖者が強迫騙詐の。エー。イヤサ堅い武家の御新造と知ら  
 ずも置たを此方の失策第一親元の權太殿も自分の姪だと偽つて私し方へ奉公も任させたも  
 過誤か但し心あつての業か其處等を厳く罰たなら互も惡徳が出やう程も何も言ずお辨殿  
 の轉送金として些少ながら此金を進せすれば足元の明るい内陣かぬやう歸らつしやれと  
 言つゝ左右の袂より取出したる百兩包み此金合て二百兩の兩人前へ差出ば悟られたかと紋  
 之助權太と顔を見合で顔で黙頭も眼で知らせ薄氣味悪さを押懸し左わらぬ徳の滅す口。堪  
 弁し難き處おれと學を分たる親御の仰如何も承服仕つると答る傍から權太も亦。斯う纏  
 たれ件が金で濟どの辱けないモン旦那君のお庇で此權太を危い命を拾ひやしたサア兄哥  
 イヤサ紋之助機用が濟だら行せせうと促す詞を機もして然らば御免と起上る折目正さ物腰



も心の曲む偽武士挨拶そこ〜戸外へ出で両手握る百兩包を見つゝ莞爾紋之助。まんま  
と首尾よく二百兩と云ふ聲高しと蚊の權太。モシ兄哥わんまり旨く行と過たが若し其金の  
百足ぢやアねへかへ。馬鹿ア言へアハハハ、

第六章

そを淺香紋之助と偽名し富坂屋へ來りし武士は是れ將た別人あらざして亦彼の雷神與吉お  
りお辨權太と謀し合せ斯まで根強く巧みたる其掛毘よかゝる災難富坂屋の勘兵衛親子を威  
して首尾よく二百兩強追取りたるのみならず囊よのお辨の惡才覺色又托よせ九助を蕩かし  
盜ませたる三百兩を手を滯らさず奪ひ取り都合五百兩を得たるものからまだ飽き足らず  
や惡漢毒婦惡逆ますます増長してね辨が富坂屋よ奉公中家内の様子を探りおき勝手知りた  
るを幸ひと案内者として或夜は紛れ富坂屋方の非常口より難なく内へ押入て勘兵衛親子の  
云も更あり奉公人一同を縛りわけ命惜くハ金庫へ案内せよと勘兵衛を引立ゆさく金倉の扉  
を明させて思ひのまゝ金銀衣類を強奪し立去んかなす折しも如何しけん蚊の權太が眼深  
く冠りし手拭の取れたる機會消え殘る行燈の灯は見合す顔や、お前ハト勘兵衛が言まくす  
るを與吉の途さず腰さる一刀抜く手を見せず腦天より鼻柱まで斬下られて堪るべき叫びも

わへず死でけり造化精妙と三人の惡黨は迅くも影を隠し巢穴へこそ歸りし後深くも潜み  
て居たりしが蚊の權太ハ與吉お辨が思ひしよりの大膽よて若しや露顯あすとき此身を同  
類の難れ逃れず殊よハ與吉お辨と共よ命を的よ危き橋を渡つて得たる金額の割賦ハ常よ少  
あさのみか親分乾兒乃間といへ萬事こめらるゝ口惜さ宛がハ次第の僅少金引れて命  
を縮めんより連累せられぬ身の用心發顯ぬ先どうかして自分の罪を脱れんと種々よ心を碎  
きつゝ豫て惡意の朋友ハ藤助と云ふ手先(探偵吏)のあるを是れ幸ひと同人ハ與吉お辨の惡  
事を話し己も實ハ彼奴等ハ騙され二三度お先よ使ハれたが其處ハ平生の馴染甲斐斯ぞて訴  
人をするからの旨罪を逃ゝやう取計つてくれめへかと只管頼ハ藤助も頼ハ承諾と斯々せ  
よと權太ハ罪を逃るべき手段を委細ハ言合め其夜直ハ權太の家へ仲間の手先とももよ  
馳向ひつゝ與吉お辨を難なく捕縛り其筋ハ拘引られ去が蚊の權太の家ハ在らざりければ與  
吉お辨ハ股肱と頼む權太が訴人おせえとい神おらぬ身の争か知るべき權太ハ旨く逃去しか  
將亦た縛よ就たるかと思ひ乍らよ拘引れゆく去程ハ與吉お辨ハ其筋の手ハ捕縛れ吟味中入  
牢とあり外ハ同類あるあらん包ます白状あすべしと數度呼出されて吟味らるれぞ知らぬと  
のみ言張て更ハ伏罪せざるものから犯罪の證據顯然なれば當時の習慣として別ハ本犯の自



白を要せず罪大概の定まりて近き處刑さるべしといふ其風評の逸早くも牢内も聞えしか  
 ば與吉お辨の男監女監と各々囚獄を異はずれど心の同じ悪漢毒婦豫てより破牢を企て如何  
 よして得たりけん與吉の五寸針のそれを以ていと堅牢よかまへたる四寸角の牢柱を根氣よ  
 任かせて少しづつ鑿つ穿ちつ其穴は尿水を注射して腐敗せつ穿ちて腐らせ腐らせて鑿  
 り日をかさね夜を積て漸やく一本の牢柱の根元の中を線抜て破牢の準備を整へつ折われか  
 しと待居たるが時機あるか或日の黄昏より大雨忽ち降出し宛がら盆を覆すが如く風さへ  
 いとい激しくて樹木を折り家を吹倒し物凄まじき事云ん方かく雲雨を得たる與吉の喜び此  
 大風雨を幸ひよ地中よ齊しき牢内を跳り出て天昇せんと忽ち牢を押破り戸外へ飛出し逃去  
 んど甲首乙首を見廻せば闇の黒白なし鳥羽玉の咫尺の間を見ぬのか折から開ゆる牢番の  
 夜を驚むる四更の撃析顯つ隠れつ提灯の灯影は閃めく雨の脚此方をさして巡廻來る様子よ  
 與吉の折悪しと思ふ間をなく提灯の灯の消て元の闇何やら人の争ふ氣勢よ合點行ねと進み  
 寄り闇よ透して窺へば我と同じき囚徒が是を破牢したりと覺しく巡廻の牢番を膝下よ確と  
 組布て縊殺しつ牢番の着て居た籠を剝取て我身よ掩ひ起上る撞着頭よ此彼齊しく透眺めつ  
 互は愕然。與吉さんか。オーお辨か何して牢を脱出たお前も能トア破牢して爾を話しの跡

どして寸時も速く此處を。トお辨の手を取り諸共難なく堀を乗越て出水も漲る外濠を泳  
 て彼方の岸よ達し闇よ紛れて二三丁逃去る田甫の畔道傳行方より來る一人の男篋笠よ風雨  
 を濺ぎ網を肩よ荷ふたるこの出水を幸ひよ雜魚を漁りよ行あるべし與吉お辨と指違さま  
 怪しき者と見たりけん癖者待てと呼掛て與吉の帶際かい掴み引戻さんと桃み覓れバ與吉の  
 騒がず其手を拂ひ突退ながら辨と共に行過んとするを彼男の尙ほ懲す間よ袖を捉へ力よ  
 任せて曳と引ば袖の斷離れて手よ残り力餘りて遂巡しつ後居よ堂と倒れたる音の聞ゆる目  
 よい見ぬ與吉お辨の足を速めて早くも此場よ立去ける前々より逐次よ説來りたるお辨與吉  
 が腹の權太方へ潜伏したるより破牢の一條よ至るまでの年月の天保八年より全十一年八月  
 よ至り端掛四年間よ跨りたる話頭あれバ看客其心して讀玉へ問話休憩頃ハ天保十四年四月  
 十七日の事なるが开を此日の駿州久能山よ安置せる東照宮の祭典とて參詣の老若腫を接し  
 蟻の甘さよ就が如く蠅の臭さよ集ふよ似て肩摩殺擊雜沓混雜就中同所入幡街道よてハ土地  
 在來の習慣よて此日を曠と野天の博奕道の左右よ楚と布き賭場を設けて大業よ長よ半よと  
 一天地六勝負を争ふ聲喧しく坪皿の音ポン〜と盛る中よも一層目立つ銀賭の賭場を取巻  
 て黒山の如く群集ひたる張子を左右よ押分て百姓らしき一人の男モ親方私を其博奕とや



るを遣て見たいが一体其骨子の目ハ幾何から幾何迄あり升へと妙尋の可笑と堪へてコイ  
 ツハ宜鳥がかつた網の押へたバつた財布の底を摸かし呉んと思ふ心を押隠し。ナニ旦那  
 始てかテ此骨子の目ハ一から十迄ありやすから勝手な目へお賭なせへ目と出りやア五割増  
 勘定。そんなら一番運試しへ壹兩賭りませうト小判一枚取出すを得たりと坪皿開きみれば  
 争かすのあるべきぞ。旦那お氣の毒だつたモウ一番おやんせせへと云つゝ骨子を坪皿に入  
 んとする手をむづと押へ。コウ兄哥法螺を大概よまねへ此日本ハ愚唐天竺へ行たどて一  
 地六東西四三南北五二象つか釋迦が思付の此骨子ハ六から上がわつて堪るものか此出来  
 星の間振野郎め此已様を誰だと思ふ眼が有てを節穴同前耳がわつても幹木耳か蠟耳であく  
 バ耳の垢をかつばじつて聴聞しろトサ大さき事を云たから五臟六腑が縮上り死失るかも知  
 れぬへからまづ巳の名を聞ぬ先命除の咒ひハ今の小判一枚を切餅(當時額金の二十五兩包を  
 切餅と云)一つとして返せし尻引捲つて片肌脱ぎ差出す腕より脊に掛て雷神を描きたる朱  
 入の刺繡土百姓也と思の外一癖あるべき面魂ハ常人あらず見たりしがソレ喧嘩賭場暴  
 上側杖打れて怪我すなと薙き騒ぐ群集の人々此方を屈せぬ破落戸敢て驚く。体もなく吐た  
 りな小冠者め何處の馬の骨だか知ぬへが變た趣向の白痴感し外の賭場から百姓と思て掛た

陥穽箱損つて是ハと驚き云か儘の切餅を馳走し出すかしらねへが曲金村の大親分金時金太  
 の代貸元旅鳥の黒八が今日預つた此賭場の假令益越二枚でも四方の圍ハ城廓同前指でもさ  
 せる事じやアねへ昨夜の夢でも覺ねへか顔でも洗つて出直せと聞を終ら進寄リナニ此  
 賭場が金太の持どの爾聞チやア猶面白ハ兎狀持が高飛が路用ハ借たと傳言せよと言ふより  
 迅く益越の端ハ手を掛け刎除れハ四下へ飛散る金錢ハ落花の雪ハ異あらず黒八怒りの聲高  
 く。命知らずの青二才小癩も腕力後悔すなと長鉄刀の柄へ手を掛け振んとするを足をもて押  
 へ。手前達の鈍刀で斬られるものなら斬てみよと飽まで罵る傍若無人斯と見るより慄慄の  
 博徒シヤ面倒ハ壘でしまへト大勢一度ハ組付ハ物々しやと件の男ハ右ハ投退け左ハ當り  
 懐中探つて取出すト首逆手ハ取て組付ハ博徒を矢庭ハ四五人傷けつ四方を腕で起たりける  
 侮りかたき力量快業さしを猛かる無賴の博徒も只一人ハ斬立られ少し怯んで見わたるもの  
 から衆を頼み競ひ掛り吼り狂ふ件の男を辛くして組伏つ手取り足取り漸くよと首をぎ取り  
 荒縄をてぐるく、まきよ縛し上げ打殺せと異口同音ハ罵り騒ぐを黒八ハ暫しと制止て一  
 同ハ對ハ此處で殺すハ容易れ此奴ハ邪魔をされたばかりで賭場の上りもおもひしからず  
 土産代ハ此野郎を金時親分の許ハ拘てゆき此場の咄をした上で思ふ存分腹愈ハ一寸試四分



試切斷ひを好下物よしして一杯やらうと件の男を縛りしまゝ、拘引て曲金村へと歸り行ぬ。ヤイ黒八最前汝が土産だとして連歸つた賭場荒し已が手料理理て呉ん此庭前へ引据よと親分金太が鶴の一聲オ、合點だど旅鳥が椽端近く引据るぐる／＼卷の荒幕男是ちん最前黒八が賭場を荒して捕へられたる大膽不敵の破落戸あり髪い亂れ四肢の傷き眉間受たる切疵方流る、鮮血顔を染成し齒と切しバク眼を睨て最口借げ椽側を仰視る金太の側ら煙管突立て並居る婦人と顔見合て互に驚愕「ヤ、汝い「オ、お前ハト云んとせしが咳は紛らし。ホンニお前の一昨年の春勢州白子で別れた兄さん日來私がお恩を蒙る親分へ對してあられもかい黒八さんの預る賭場を荒して喧嘩を賣來た敵手の兄さんのお前との今迄少を知らなんだ常の柔和をお前あるよどうした譯でありますへハ、ア聞ぬた香さへすれば酒亂の癖大方今日を飲過し酔ての上の不体裁か此親分を誰だと思ひあさる曲金の金時金太と駿遠三から甲州まで音響た有名いお方酒の上あら是非もかい迅くお詫をしたがよい共運ある妾までお前の疎相よとんだ迷惑と言つ、此方打向ひ。モン親分さん今お聞の通り此人の妾の爲の親身の兄さん幼稚い時から品行が悪く酒と賭奕を身を持崩去親の異見も練釘とうく末の勘當と身の成る果の博徒伊勢の白子邊で親分とか兄哥とか少い人よを立ち

れまもの其中兩親死去て跡は残りし私の不幸苦海の淵沈果しを親分さんのお情で今ヒやア氣樂を妾の身百人餘の乾兒衆と姉伍くと達られてお絹布ぐるみの上綺羅三味妹の妾が此程迄は御恩を蒙る親分さんの賭場と知す荒せし酒の科御恩序は兄さんの罪を宥えて下さんせ不圖した事より兄妹が邂逅しも尽せぬ縁今日から送らぐ乾兒衆乃仲間入て妾同機目掛られてと言さして金太の顔を秋波は實と見つめて片頬は莞爾笑ふ様子の妖嬈さ雨も惱る海棠の花の姿は似たれを内如夜及も刺を合ひ茨の花の恐し、并も此婦人を誰とかする是なん先年勢州よて破半を企て逃去たる彼の毒婦お辨まで兄と偽る破落戸の則ち雷神與吉あり始終と聞て金時金太の頻に黙頭さ倍云やう。忘れをしねへ去年の春社會の者よ勝れて讃岐の金比羅へ參詣した歸途旅寝の憂を晴さんと筑前博多の花街なる柳町に浮れ込み戸倉屋といふ亡八樓で歌姫とした此お辨初會の夜から手のある式と直翌晩の二會馴染互に胸を打明し話で見れば女でこそあれ据つた度胸と膽の太いを賞美えて購身をいやうと問合すれば二百兩餘の身代金旅先なれば詮方なく供の乾兒は吩咐て密に監ませ連歸り妾として見たところ已が最初の眼力違ひ長鉄刀の山の神のしつくり徹つた旨い寸法指でもさへせぬ已が賭場を荒した和主誰あらうお辨の縁は繋がる兄との聞く不思議な此場の



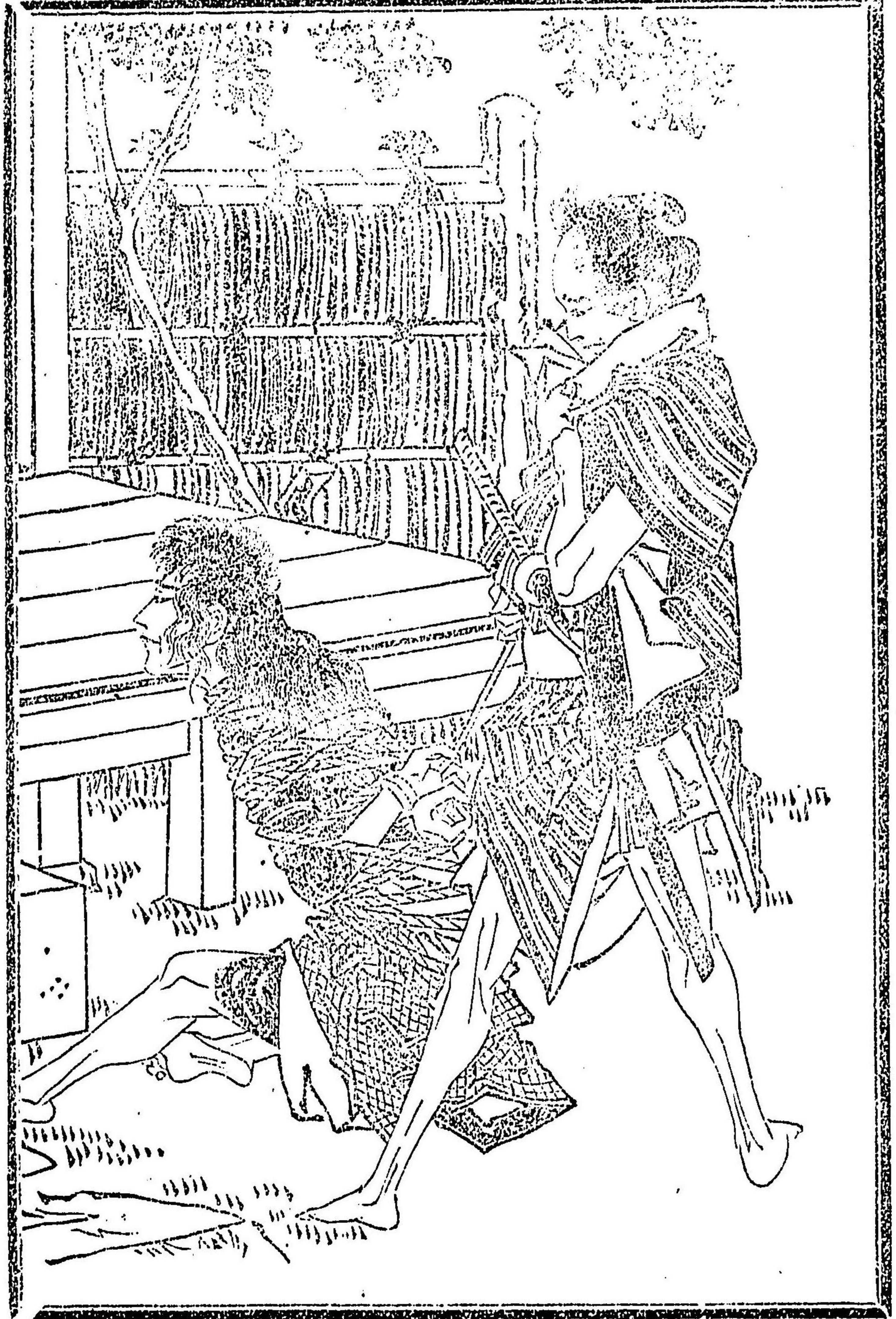
出會今お辨の云通り我の乾兒よあると云なら今日の罪の宥してやらうと云へ暗嘩の發當  
 人黒八汝は何と思かと思か聞れて黒八進出で親分が爾云ふから何で私よ否やがあらう姉伍が實  
 の兄分と云ひ殊よ最前只一人我々大勢よ擧て蒐りし本事の程の知れて在り親分乾兒とある  
 から龍の翼を添たる如く兒よ金棒虎の風雨降て地固まる双方の幸福此上なしと併居る乾  
 兒一同よ口を揃て胡摩を摺る雷盈の音も破落戸が解るも迅き卑屈根性繩のへ頼み解捨たり  
 與吉もさる者詞を合せ。今妹より親分へ委細お話申した通り餓鬼の時から好道ホンの小  
 皿の小博奕から漸く仕上た雷神與吉今度此地へ廻來て音も聞へた金時親分の賭場とをしら  
 す暴れたい鳥あき里の蝙蝠同前酔ての上の無分別根根たきも出來ねへ目も途ふとしたを  
 不測よも妹のお蔭で其罪を宥さるゝのみならず是から乾兒よさるゝ嬉さ及ばす奇から命よ  
 換て御恩よまつた親分よ一層花を咲せやせうと云ふ金太の笑しげよ。爾ち親分の乾兒の  
 盃お辨と俱よ快よく黒八を相伴しろと與吉と勞り與の間へ誘ひゆきて酒肴を整へ馴つ  
 酌へつ打解てしやし酒宴よ時を移しぬ

第七章

當時關東よの長脇差と唱ふる無類の悪漢跋扈して彼此互よ黨派を結び駿州よの安藤文吉同

く辰五郎横内村の毘沙門虎掛川宿の雲助三次沼津宿の和田丸甲府の小室井又下總上總邊よ  
 の笹川の繁藏白瀧の佐吉勢力富五郎あんどる餘派わりて動をすれバ斬合ひ撲合ひ喧嘩止時  
 あかりしかば誰しをよ乾兒の一人を餘計よ欲がる折から今日闘らずを旅鳥よ名代させた  
 賭場よ於て纏れ糸糸の今爰よ結ぶる縁の親分乾兒又お辨とを兄妹の久し振ある對面の尽ぬ  
 話しに實が入て酒の爛を醒たやうな肴を増せと金時金太が無上よ喜ふ様子を見てお辨はい  
 そく肴を換へ酒を温ため機嫌とりと甲首乙首へ勸むる杯金太の素より乾兒一同十二分  
 よ歡を尽し暇を告て歸るもわれバ其座へ倒れて高刷杯盤狼藉前後もしらす金太の辨よ指  
 圖去て與吉を一間よ案内させ其身をまた臥房よ入ていと快よく眠る就ぬ其夜も更て玉滿過  
 掛離れたる小座敷よ密々低語く男女の聲はお辨と與吉なり登下與吉の聲として。喃お辨富  
 坂屋の一件が早くをバれて喚へ込み二人共よ重罪あれば江戸へ差立よある所辛くも破牢を  
 企てし折を折とて汝も亦女達よ牢を脱出し逃去る機會よ邂逅迄何して破牢したとことかど問  
 ふも忙しき身の上ゆゑ話の晩のしら涙と共よ伴立ち逃去る際何者よか妨げされ暗夜よ争ふ  
 滅多撃間を覗つて風雨よ紛れ汝の手を取り三三下逃延たれと婦人の足弱足手纏と不實よを  
 汝を振捨て己一人越後をさして高飛ちし彼地よ恰と三年越るつと廻つた雷神も晴てい逢







ぬ日蔭者蔭ながら様子を開く富坂屋の一件を訴人したは當時まで一圖又味方と思つて居た  
 權太の所業と聞て驚愕いかで怨を晴さんと此在まで忍んで来た途中變た處で變た出會今ぢ  
 マア汝の金時の持物と聞ちやアこんあ處で浮かり長咄も出来ぬへ仕義夫のさうと汝のママ  
 何して茲に居るのだと問れてお辨の與吉よ對ひ。最前お前も逢た時有繫の妾も驚いたが欺  
 すよ手あしと早くも思接し兄弟なりと偽りて首尾よく乾兒とせました上の是からお前と心  
 を働せ床を借て母家を取る細工の粒々成功の後先づ差當り咄たいの別れて後の三年越積る  
 咄を聞ておくれと語り出たる趣きの編者が筆をのすれきた辨の物語としりたまへ話切復  
 舊却説お辨の富坂屋まで金を騙え惡事の素より九助を殺せし一件まで權太の訴人よ露顯し  
 て與吉と共よ捕縛れ吟味中入牢とありしが男を閉置く牢獄と違ひ女牢の締を緩寛あるより  
 恰と與吉が破牢の夜暴風雨を幸ひよ容易く牢獄を脱出の與吉と共よ脱去る途中男よ捨られ  
 只一人として行衛を去ら涙の寄する為とて有さきと大膽不敵乃毒婦あれば更よ怖るゝ氣色  
 なく逃るゝ丈は逃れて見んと盡の野山よ伏潜れ夜道を急ぎて逃延つ順禮姿よ身を寝して當  
 りなければと道次旨い仕事をあらんかと紀伊國へと志だし或木賃宿より同伴とありしいど汚  
 穢しき一人の六部の表の修行者と見せ掛て旅路は彷徨ふ眉目善き婦人を手當しだい勾引し

諸國の亡八樓へ賣渡す亦是れ一個の癖者なるを蛇の道の蛇とやらお辨の早くも夫と察し今  
 の旅費を盡果たれば故意と彼又欺むかれ何處の花街へかり賣渡されいつそ苦界よ沈みさバ  
 又浮む瀬をありなんと頼よ思接と決めつゝ思ふ心を六部よ告てよさよ周旋してたべと云れ  
 て六部の笑坪よ入り。其許が雨いふ心から屹度世話をしませうと互言旨く欺むさしと欺む  
 さ合つ誘われ播州室の津の遊女屋水月樓へ賣渡され名も春琴と改めて愛節しげき河竹の君  
 傾城と成の果素より期したる事あればお辨の苦界を愛もせず夜毎よ變る客人よ色を銜ひ  
 媚を献じ巧妙よ情を隠さしかバ好色の男子們我も〜と訪れ來て忽ち全盛の名を齎かしぬ  
 爾間よ與吉お辨が破牢あして逃去たるより其筋の探偵頗る嚴く全國中の津々浦々まで人相  
 書を廻されて變る隈なく詮議さるゝ由風聞止む時なかりしかバお辨の春琴の疵持つ足高飛  
 するが一手と廣き世界を曉詰て五尺の身体を置く地あく四尺五寸の身の丈を次第よ縮む  
 運の末一寸伸れば尋とやら左も右此樓を脱出なバ亦詮術もあるべしと迅くを愛よ思接を定  
 め我が突出の初めより馴染てしげ〜通ひ來る同所の廻船問屋播摩屋六郎兵衛の長男敬太  
 郎と云るを教唆し親の金三百圓餘を盗み出させ开を路費として手小手を取り或夜よ紛れて  
 水月樓を脱れ出つゝ跡を暗まじとして行衛の浪花瀉末のよしあしら浪の海を航りて落延



んと濱邊へ出て便船を引し沖合遙く漕出しがお辨の敬太郎は打向ひ貴郎と斯して花街を脱出  
 で逃ひしたれど今更思へば果敢きい二人が縁是から大坂へ行た處添途らるゝ的さへまき  
 空頼ある事を頼て浮世の苦患を見るよりも妾のいつを死の覺悟實があるから前はんも一  
 所死で二世三世黄泉の契を重ねてたべト涙ながら口説いて深くも痴情は迷ひし敬太郎  
 懐柔育の鈍ましくも甘き詞は賺されて共死をんと約束し其夜も更て水夫船頭の寐靜まり  
 去時刻を計りやをら船舷へ立出つ此彼齊しく掌を合せ口は唱名眼は涙雨無阿彌陀佛の聲も  
 ろともお辨の今敬太郎と情死なすと見せ掛て弱腰動と突飛せば哀むべし敬太郎の身を轉倒  
 船舷より千尋の海へ陥りて入水と立たる水烟寄せての返すしら波の底の藻屑と消えけり  
 登下お辨の船舷へ衝立ち上りて海面を篤と見透し片頬は莞爾笑を含めて造化精妙と思ふ心  
 の色は現われ飽まで不敵の面魂ひ物すおくもまた恐し、恠てお辨の船頭等も伴の男の誤つ  
 海へ陥り死去せし由を詞を設けて告知らせ巧み欺き果せつゝ願て浪花は着船し夫より又手  
 段を換て坂地筋乃藝妓となり色は托せ客人の金を奪ひつ手離を貪りあらゆる悪事を仕尽  
 て果は大坂も居堪はれず輕い尻は帆を掛て繋がぬ船の風しだい又も筑前へと流れ込み色  
 の凄の博多ある誰もも靡く柳町戸倉屋と云る遊女屋の娼奴とありて今一花咲せんと思ふ矢

先金時金太ふ盗み出され今での妾となりたるありと有果有葉の長物語を聞く毎々に有葉の  
 與吉を舌を捲て驚嘆し不思議の再會を喜び互に盡ぬ陸言の夢を結ぶぬ其間夏短夜明  
 やすく早や告渡る鳥の聲は打驚かされて起上り後を契りて其夜のそのまゝ別れて奥へ立去  
 しを知る者絶ておかりけり爾來お辨の與吉としばく密會をしつゝを折を窺ひ金時金太を  
 亡人として親分株を横領せんと較計居たる悪漢毒婦の心の中不敵と云も餘りあり斯る較計  
 のある間にお辨は一層心を用ひ深く金太を尊敬し又夥多の乾兒等より目を掛て慈しみ且又  
 與吉の五街道を股に掛たる強賊おれは何れの賭場にて喧嘩の起るを一度を後れを取らざる  
 より金時金太の先頃より乾兒を得つと人をも誇り自らも深く愛して二あき者とぞ思ひ居た  
 るのいとを危き事として内よりお辨の恐しき劍を抱きて眠るを齎しく外より與吉の虎狼を  
 養ふ一旦事の起るよ及ば其身忽ち亡びおん爾程は其年暮れ翌れば弘化元年の春も彌生  
 の花見時散を始め咲を捕ばず賤機山と名にし負ふ富士淺間の権現社内の花を見んとて毒  
 婦お辨の金時金太の許可を得て與吉一人と供は連れ外面を飾る姉伍と乾兒を元の夫婦の内  
 輪伴やがて社内よ來てみれば老若男女打集ひ花の下よ薙を布き酔て謠ひ醒て舞ふ思ひく  
 の興を添へ花より團子の賑ひを他よ見過おしお辨と與吉の往來絶たる賤機の静けき山路



よ分入て今川義元の城趾ある丸山よ接近たる小高き丘の陰か隠れ携へ來りし割籠を開きて酒食を食ふがら與吉の云やう豫て汝と言合せ金時めを亡者よきて親分株を横領と手筈の既よ定めたが時節がないのでツイ淨架く一年餘を過越方思へばいまで彼奴等如き馬鹿を野郎の手よ屬すべし今の旅鳥の黒八さへ旨く味方よ喃着たれば此機を過すべからず併し手荒を療治をして此身の害を惹起さんよりいつその事よ人知れず殺す工夫のコレ斯と耳よ口寄せ暫え叫び懐中探て取出す包お辨よ渡せば受取て。爾から此毒藥よてと言聲高しと四下を見廻。成就るまでの黙止くと尙も手術を謀し合せ見咎められぬその間よ此場を迅くと立去し傍よ聳ゆる大木の松の影より忽然と現れ出たる一人の癖者手拭眼深よ面部を包み廣裕の素裕よ三尺帯をしめたる体の言すと知れたる破落戸姿事皆亦聞つと覺しくて立去る二人の後影伸上りゆ、篤と見送りしはし佇立居たりしが思按を道も引換て與吉お辨が後を逐ひ見ゆ隠れよを踵てゆく开も此人物の何者ぞ後よ至らば知る由あらんお辨の與吉と謀し合せ彼の毒藥を寐酒よ浸して金時金太よ飲せしよ毒藥の効驗過たず血嘔吐を吐て其夜の中よ果敢なく非業の死を遂し金太も元是れ無頼の悪徒是まで夥多の人を害しわらゆる悪事を働きて淨雲の榮華よ誇りぬる積不善の應報よして惡を以て惡を誅す天の配劑妙あるかお

恠て親分金時金太の腹の毒よ中りて果敢なくありしと披露をし万事の豫て較計し如く與吉の其跡式を後見するとよなり概見望を遂しものから夥多の乾兒よ情を掛け取分け金太の乾兒彼の旅鳥の黒八をバますく重く用ひしゆる自と與吉よ勢ひ付き前の親分金太より却て與吉よ隨從しかバ仕濟したりと惡漢毒婦は好悪いよく増長し誰憚らば舉動居たるがお辨の兎角多淫の性ゆる與吉一人で飽足らず榮耀遊の敵手欲やと思ふ折から旅俳優の市川鯉藏と云る者わり放蕩懶怠の白徒よ博奕を好み酒色よ耽り錢あるとさの郵通が鼎を運ねて食へども飽りとせず錢なるとさの喪家の狗の如く餓たれを耻とせず衣裳高麗と質よ入れ演劇興行の手筈を違へ金主よ難義を掛るお良らぬ所業の度重り果ハ旅俳優の社會を省かれ寄邊なさま、與吉の賭場よ轉がり込で乾兒とありしが根が俳優の事おれバ垢抜のして何處とさく奇麗な姿を見るよりはお辨のいつか焦思て與吉の眼襪をしのびく氷油さじと契を込る一日二人の道あらぬ畜生道の交際よ其名を似たる四ツ足門外の足立屋といふ鱧屋よて人目を厭ふ與坐敷酌つ酬つ對坐痴話の有丈口説して十分歡を尽せしのちイザ歸らんと坐を起て一間隔ちし坐敷の前を通る折しも思掛あく後よりオヤお辨さんお久し振と聲掛られてお辨の驚愕誰あるらんと見願れば勢州白子の權太あり有繋のお辨もギョツとする程驚ら



赤がらを落付顔。誰かと思へば權太さんホニマアお久振。私もお前いと兄哥よ別れてか  
 ら造化悪くて國も居られず愛等邊へ流れ来て思ひぬ處で思ひぬ再會いろく話もあるけ  
 れと見ればお伴もある様子能年をして野暮らしく邪魔をするを氣が利ぬへ兄哥の前へ知れ  
 ぬへ様氣を注て歸んあせへと訝よからんだ詞の端お辨の素より鯉藏も手持無沙汰見ぬた  
 りしがお辨のつくく思ふやう此奴が訴人した計で愛目よ逢た其怨を武者振付ても言んと  
 せしが此方も姦夫を連込のをりあしき場合おれは盡を堪へて胸を撫り又其内と言捨て鰻店  
 を立出しが左ても右ても權太奴の生置べきよあらずとて家よ歸ると其儘よ我密事ハ深く秘  
 し權太は逢ぬる事の由を與吉よ告で彼奴をば生置く時の我々夫婦よ害を與ふるものなれば  
 少も早く押片付んと詞巧よ勤しよど與吉も素より怨ある權太が此地よ復訪ふとを聞ての中  
 々捨置す搜し出して引捕へ重なる怨を復いんと乾兒等も言聞つその入相を差示してとさ  
 く所在を搜し求めぬ」毎年六月十九日の此曲金村の本居神俣俗軍神坊と稱る摩利支天の  
 例祭よて同夜大烟花の献發有开を見んとて東の駿河富士川を限り西の島田藤枝より道を遠  
 しとせずして集來る老若男女の肩摩般擊宛ら數万疋の百足の友の跡を逐ふ如く蟻の甘よ就  
 よ似踵を接し歩を運ふ天未だ曇らざるよ奔雷一聲空よ閃き機關烟花の上る毎よ境内よ立滿

たる見物人が喝采の聲の遠く有渡山の嶺頭よ響き拍手の音の連山よ木魂して崩るゝか思と  
 ふ計り駿河一國の大祭おれは賑ふを現よ道理あり此夜お辨の三四人の乾兒を伴て軍神祭の  
 花火見物へ行たりしが折悪く喧嘩起て群集たる數万の見物の其側杖よ擧れしと老たるを扶  
 け幼あきを負ひ右往左往よ逃走る騒よお辨の俱よ連し乾兒よ外れて甲首乙首と見廻る内よ  
 誰どのしらす群集の中より煩冠せし四五人の曲者顯れ出て矢庭よお辨を引捕へ宙よ釣して  
 十丁餘飛が如くよ走去つ只在る數影へと荷ひ行く此時傍の辻堂よりやをら立出る一個の男  
 仲間の悪棍を勞らふて紙よ包みし金若干渡すを各自手よ受て●比喻よ云通り▲ホンよ煤  
 介バ宵の口△爾あら親分跡でしつぼり⊕恰好天さへ雨催ふ口私チ等ハ濡ぬ問よ●ドレ行  
 かと仇口交り思ひく〳〵の捨臺詞とつかい現場を走去ける大膽不敵のお辨おれど不意を擧れ  
 し此場の難義いかせまじと狼狽たる姿を見遣て彼男の冠りし手拭取除つコレサお辨をん  
 ちよ驚く者じやアねへ伊勢の白子の權太親叟サいつぞやお前と與吉とよもよ己の家へ來た  
 時から存魂惚て居たけれど與吉の前を憚りて蟲を堪へて居た問よ何者が訴人きたかツキが  
 廻て喰込み此權太まで連累の罪の逃れて百管鞭土地拂と成の果處々方々破落戸の雷神兄  
 哥が踪蹟を尋ね今での府中の横内村毘沙門寅の乾兄とあり此夏淺間の花見時お前と與吉の



姿を認め何して爰ふ来て居るか跡を踵つゝ隠顯れ樹陰に忍て様子を聞バ大膽不敵の較計  
 事逐一聞て呆れた度胸伊勢の白子の半破から金時金太の毒殺迄恐ぢがらと其筋へ訴へやう  
 かと思つたが序を今日まで押ッ堪へ黙て居たもお前が可愛さ與吉一個を守ると云ふ女なら  
 バ又格別此間も足立屋で一目と認た濡の幕どうせ汚れた身体なら是程思ふ深切男満更否と  
 は言れぬへまだ夫迄こか此方より確乎も證據の此片袖。爾あらいつか破半の時。逃去る田甫  
 の畔道傳ひ。引留んと挑合ふ。機會も斷離し此片袖役衣の主の借も與吉と點鬪解きの此出會  
 モシお辨さん何んと返詞を聞せて呉ねへと退引させぬ當坐の難題お辨をさる者逃れぬ處と  
 早くも胸は思案を定め。卑妾の様を汚多不具を夫程迄も執心のお前の詞も偽りなく何あ  
 りとありませうと云ハ權太の喜び勇み。流石の名代のお辨さん早く解けて辱けぬへ又もや  
 御意の變らぬうち此辻堂を仮寝の床イザと計し手を取て引の引るゝ糸遊の靡くも見せて懷  
 中は隠し持たるじ首と扱より迅く權太の眼を睨て突出す拳狂ふて頬の當を突裂ば流るゝ鮮  
 血の痛も堪かね怯む所を押伏つお辨の怒れる聲振立。言しておけば法圖をあい何者か訴  
 人したをよく出来た己が口から訴へて妾等二人も憂目を見せ已の高見て知らぬ顔いつか一  
 度此返報其許の命を貰ひふと思つて居た其矢先惡事を知られた上からのどうせ生して置

れぬお前此辻堂の本尊の恰と馬頭觀世音馬の脊で死出三途念佛でも題目でも勝手は唱て往  
 生しろと罵り懲す如夜又の權幕不意を撃れて有樂の權太も不覺を取て薄疵を負ひ驚きあが  
 ちも一生懸命吼りよ吼りて閃かすお辨が手も持つじ首を辛くして擊落し襟髪取て押へ付け  
 〇ヤイ阿魔め能も抗敵しやアがつたナ可愛さ餘て憎さが百倍殺してやるから覺悟しろと落  
 散る刃を拾ひ取り胸元目越て突蒐る毒婦なれども女の甲斐あき終る權太も蹂躪られ既も斯  
 よと見わたる折しを最前の喧嘩も外れたる乾兒の者等が泣叫ぶお辨の聲を聞付て此方を持  
 て走り来るゝ權太は驚きお辨を突退け逸足出して雲霞迅くも其場を逃去ける引違て馳來る  
 乾兒等お辨の異なる跡を訝り勞りあがら其故を問れてお辨の實を告す先刻お前方より外れて  
 がら歸途よかゝる折何者とも知す妾の衣類を追刺せんとする賊も出逢ひ危き場所へお前達  
 の來合せたので無事と濟しと事をなげよ口よの言を彼權太奴が執念も叶ひぬ戀の意趣晴し  
 併て其身の後難を恐れ發見されたる惡事の段々訴人さずも知がたし左して宜ん右せんと胸  
 も拵く手の思接橋入江を越て我家より戻りてみれば與吉の不在よて他の乾兒等も軍神坊の祭  
 祀も浮れ出かりけん耳の聾たる雇婆アの一人淋げも留守するのみ供も連たる乾兒等を翌日  
 を契て暇を告げ各自家より戻りたる跡よお辨の思接投首途方も暮て居たる處へ息堰入來る市



川鯉藏お辨を見るより。モシ姉御大變だく何者が訴人したか姉御と親分の舊惡露顯擽め取らんと與力同心いや近くへ向ふたり三十六計逃るよ手あし早くくと急立らた左右の相談さす間もなく斯る火急の場合もも抜目のあらぬお辨の働き手迅く箆筒の引出より財布の儘の數十兩肌も去つかど旅支度鯉藏も亦心得て共取出す三度笠草鞋の紐を結びもあへず二人齊く庭口より身を潜せ暗は紛れて落行ぬ

第八章

却て説くお辨の市川鯉藏と諸共曲金を跡よあし逃足迅く畔道傳ひ阿部川原又出で川越等よ酒代を與へて夜川を渡り足は任せて逸走り鞠子宿を通過し東海道中の難所と聞えし宇都谷峠は差かゝる此時既は夜半過て明五更の頃ありき折しも六月中旬の事ゆゑ夏の癖とて晴渡りたる一天俄はかき曇り嵐と降來る白雨の車軸を流す異きらで咫尺を判ぬ暗の夜の鼻を摘るも知れざれば足元不便の山又山九十折ある險阻道を辿らんと叶ひ難し幸ひ爰は辻堂あり雨の晴間を待べしと濡たる衣を絞りをあへず此彼互に手を取て辻堂の内へ駈込たり斯る處へ麓踏より振閃かす松明の灯火消え濡さじと雨を衝き風を冒し急ぎて昇り來る者あり箇を又目早く辻堂を認て暫しかり庇雨宿せんとする体よお辨鯉藏の見咎られ

じと内より扉を確と押へ息を殺して窺ひ居るとも知らざれば件の男の吐きながら半朽たる板椽は腰打懸て獨言。心を掛けたお辨の阿魔混雜紛れよ引摺ひ軍神切の祭禮と共に此方を祭禮の神輿を渡し首尾よく思を遂やうと思の外よ不覺を取り寶の山よ入乍ら手を空く逃去たが若し此事と與吉奴よ告られての大變と先を潜て意趣晴し直に代官所へ訴へて捕丁もろども家へ踏込み再びお辨を引摺いんと語りしとも書餅なりと早くも彼奴よ悟られたかお辨の素より與吉まで風を喰つて家の空明併し彼奴等の落行く先の一本道此宇都谷殊よ女のあし弱連ぬくら迅く逃たどて茲より先へのしやアしめへ天の晴るを待綱よかゝる玉を逃さぬやう一吸咽やつて待つかへト雨よ濡たる兩袖と絞りなどして待間程あく此方をさして麓路より一散走りふ昇り來り足音近くある儘よ素破來れりどお辨鯉藏と思ひの外身輕よ打扮つ一人の男進み寄つ、以前の男が燭し來りし松明の灯影も齊く顔見合せ此彼跡へ飛しさり。ワリヤア雷神與吉だナ。爾いふ汝は娘の權太かコリヤよい處で出ツ會した親分乾兒の好誼を忘れ伊勢の白子で惡事の段々よくも訴人しやアがつたナ其遺怨を返さうと夫から夫へと手を廻し汝が所在を尋ぬる矢先又も汝に先を越され汝が罪を逃れんと身怯未練の訴人をしたと迅くも聞き知る乾兒の注進南無三大事と出先から宙を飛で我家よ戻りて見れば口惜や



與力同心捕丁の人数のや薙々と押寄て家の四方と取巻居たれば其儘腫を引旋し何方へなり  
 と潜伏んと來掛る途中で能く聞へ内のお辨の鯉藏と捕丁の綱を首尾よく逃れ河部川と越た  
 りと人の風評も彼等が跡を逐んと茲まで來りしよお辨鯉藏も逢ずとも汝も逢し天の與へ  
 重なる怨思ひ知れと鉄長刀も手を掛れた權太の怯まず冷笑ひ。汝が惚てる女房のお辨の疾  
 から鯉藏と戀の目目を忍び寝よ深い中だと村中で知らぬ亭主の汝計り實を云ばお辨の阿  
 魔の此權太様が執心だ已が戀路の邪魔なる汝を茲で殺す代り姦夫の成敗の跡で已が爲て  
 やるから心残さず往生しろと罵り返しつ腰ある刀を閃りと引抜き身拵たり與吉の始て我妻  
 の姦夫をせしと聞からよますく焦立ち急よ怒り左右の間答をす間もなく身の程しらぬ蒼  
 蠅奴等我が刀の錆となれと扱各せつゝ丁々發矢一上一下と斬結ぶ此時風雨ますく激く篠  
 を束ねて投るが如く闇夜も閃めく刀の光と俱み眼を遮る光電雷神の音凍ままきく森を渡る大  
 雷大雨を物ともせざる荒暮男が劔を削る奮撃突戦何れを雌雄と分がたくおどろくと鳴撲  
 めく雷神與吉と蚊の權太が刀の光と雷光の閃めく影も見ぬつ穩れつ秘術を尽す命の取遣暫  
 らく挑み戦ふ折しも轟然として鳴響く霹靂一聲天地も崩るゝ計の音もろとよ傍へ響へし杉  
 比樹間へ落かゝりたる雷神與吉が懸運爰も盡たりけん一震の下も撃挫がれ微塵とあつて死



でけり己が綽名の雷神うたがも震れて死せしむ名陸自性因果めらせんじくやういんぐわう應報と云まくのみ權大も思はず落雷らくらいの音ねも荒膽取挫あらかもとひしがれ持たる白刀しらばを投捨なげすて兩手りょうても左右の耳みみを掩おほひ大地へ動どうと尻餅搗しりもちうき思おもを絶た氣けも蜘蛛伏くまはりあり在ありしが此落雷こゝろくらいの爲ためも掩おほひたる黒雲くろくも忽たちち四方しやうほうも散ちじ雨あめを小降こふりりとあければ怖おそ々々あがら起おき上あり與吉よきちの死骸しかいを見て莞爾わんじやう。豪氣ごうきも驚愕きやうがくさせやぐつた併しし此奴こゝやつの綽名あだなも呼よぶ鳴る雷神かみかみの加勢かせいもて手剛てたけも與吉よきちは此死狀こゝしじやう這奴こゝやつも抜目ぬけめのきい奴やつゆる幾干いくぢか旅費りゆうひのあるあらん死人しにんも金かねの入れめへから骨折ほねをり代しろも貰もらつて行いと獨言ひとりごちつゝ與吉よきちの死骸しかいへ手を掛かんとせし後のちより潜ひそひ寄よたる市川鯉藏いちがわいぞう詞ことばも掛かず斬付きりつける拳こぶし狂くるふて側かたの樹きと刃やいば尖と下くだりも削けりたり是こゝはと驚おどき飛退とびひく權太ごんた。鯉藏いぞう聲こゑを振立ふりたてて。お辨おんを連つて高飛たかあし夫婦ふうふとあるよ邪魔じやまも手前てまへ且かつの汝おぬも不覺ふかくを取り死した與吉よきちへの義理ぎり一遍汝べんなんの命いのちを貰もらふから覺悟かくごあせよと言いをわへず又閃ひらめかす刃やいばの雷火らい權太ごんたの呵からを冷笑ごんたひ。小癩こしかも腕立うでたて何なにひろぐ高たかの知しれた旅伴たびばん優舞臺ゆうぶたいで演ある立廻たちまわりどい違ちがつ筋すぢの兵劍へいけん勝負しやうぶ汝なんこそ観念くわんねんしやアがれと又またも丁々てうてう砍結きんけつぶお辨おんも今いま一いつ生懸命けんめいいかで鯉藏いぞうも勝かせんと甲首かぶたこ乙首おつこへ飛と巡めぐり小石こいしを拾ひろふて權太ごんたの顔かほを狙ねらふて投なる目潰めつぶの礫ついでを除よつ斬拂きりふ鯉藏いぞうも聊いさか腕うでも覺おぼえのあるものから元もとより鈍にぶき俳優やくしや上あり踏込ふみこみゝ斬立きりたる鈍にぶき權太ごんたの刃やいば先まへも敵かたし兼かつゝ跡あとへゝと退しりぞく塗端とたん樹株くびせも躓つまずき倒たるゝ處ところを得えたりと附入つきる權太ごんたが刃やいばも左ひだりの肩先かた斬付きりつけられて苦あつと計さり叫さけび



じあへず仰天る上は踏またがつて絶命の一刀箇の適いじと逃出すを辨の襟袷取て引戻し。  
 戀おれべこそ下から出て口説ば愈く附上り一度おらず二度三度我も刃向ふ不貞腐め夫程  
 命が捨たくば望通り殺してやる觀念しるど罵りわへず右手は血刀取直し左手は辨の胸倉  
 を押へてアワヤ咽喉を貫かんと因かそ此時迅く那時遅く外の人気があらざりしと思ひ居た  
 りし辻堂より廻し合羽の笠の笠甲掛脚半の旅人が突と立出つ權太の後へ廻ると齊く腰を捻  
 つて帯たる一刀抜く手を鋭くヤと腰掛て權太の細首殊の美事と打落し血刀振ふて起たりけ  
 るお辨の夢は夢見し心地既と斬きんとせし玉の緒を繋さ呉たる其人の善悪正邪を測り兼ね  
 謝儀さへ言で茫然たり彼旅人の四下を見廻る鯉藏權太の亡體を傍の谷間へ蹴落し何天打見  
 やりて獨言。いつの間もやら雨を晴れ北斗の星光を視る時のモリ未明も間があるまいド  
 リヤ一吸烟やらうかと腰を巻る烟草入を取出し消残りたる松明の火まで吸付け腕又咬へ喜  
 世留の脂下り何も言ねばお辨の先の心を計かね薄氣味悪くも諸手を扣き。危き難義をお救  
 ひ下されしお謝辞の詞は盡されずと云ふ顔詠めて是のしたり何の禮も及ぶものか私を最前  
 雨は逢ひ此辻堂まで笠宿り跡から飛込む主達二人修羅闘場の震動雷天血の雨降らす一伍一  
 什お主の難義を見るも忍びず差出た葉の喧嘩を賞ひ悪い奴でも一人殺して罪を造つたが

れ主を尋常の婦人じやアあしとんあも慄々もやア及べねへ烟草が吸たくは煙管を貸さう此  
 辻堂の縁側へ腰でも掛て話しながら明行く天を待せせへと打解たる詞の端はお辨の彼の男  
 の顔を熟々打詠めヤ、貴郎ハト打驚く男の莞爾打笑ひ。コウお辨さんが今漸く氣注とはお  
 前を餘程薄情だせ忘れもしねへ九年前鹿島詣の戻道と云をお辨の引取て弁アノ木下が乗  
 合舟男 他の乗合の旅疲勞楫を枕の高厨弁 其時貴郎が妾しと密と捕て耻しい筈を敷寝の枕  
 男 後の證據とお前より其時呉た簪は肌身放す今も猶は幸ひ愛もと取出す簪お弁の手も取  
 り左視右見。夜露に濡て濡初し貴郎のれ名をも伺ひたく 男 お前の住所姓名を聞たく思ふ折  
 を折同船したる甲乙が 辨 眼覺し体は打驚き互は左右へ飛退て悟られまじと本意をい別れ 男  
 別れくよなつたる後を其移り香の忘れ兼 辨 晝の幻し夜の夢片時忘れぬ貴郎の事思ひ焦れ  
 し此年月 男 双方の姓名を知る由なれば雲を當か探しをのツイ夫ありよ打過しが 辨 尽ぬ  
 縁か今茲で不思議もお眼も掛りましたが最前からの様子をお御存知の上の妾も定めて愛  
 想が 男 何しよ尽て堪るものか始て逢た當時の堅い屋敷の風俗もギリ、と締つたやの字帯と  
 うせ此方の手も合ぬ野暮の女と思の外小天狗長次と綽名を取た己の商賣もやア打て付辨爾  
 あら貴君も悪根の 男 己が名も負ふ雷神は撲れて死んだ與吉とやらふやア五分も劣らぬコレ



が家業と人提指を曲て見せ(是の盜賊と云ふ符牒)お辨の疑團漸く晴。夫聞て安堵しまたし  
 どうぞ此末見捨すと過し往時の長物語と思ひずも時移りて山の端しらむ明烏驛路の鈴の音  
 さへを遙彼方へ聞へければ二人のやをら身支度して岡部の宿へと急ぎ行く开を此小天狗長  
 次と云るの談話の冒頭と記したる下谷山下ある巾着切の頭分まで箇を亦無頼の悪徒なり而  
 して常陸國島鹿詣の途中木下川の乗合船までお辨と雜魚獲の怪しげなる夢結ぶ聞る右左衛  
 ぬ別れを告したるとお辨が三浦勝之助と密會の末國元を逐天あしたる前年の事なり現よ小  
 娘と小袋の油断のちらぬ世の比喩未だ恍惚兒と思の外爰に至りて勝之助と密會をせし其前  
 よかゝる淫猥のありしを知るお辨が多淫の姓なるを看客宜く察しねかし案下休題長次が今  
 宇都谷峠を股に掛け夜旅を急ぐ頼末の江戸の探偵殿ければ暫く他國も身を隠さんと大坂さ  
 して高飛の天狗が羽根よかゝる悪縁圖らずお辨も邂逅に往時の事を語り出で又も結ぶ縁  
 の糸與吉も離れて長次も合ふ此彼齊しき破落戸の敵手變れど主變らず離合時あり聚散命あ  
 り怪しといふも餘あり恠て長次のお辨を伴ひやがて大坂も着て後馴合姦夫筒持せ強借脅  
 迫勾引あらゆる悪事と數年を送り今を距三十年前安政元年の頃モウはとばりの覺た時分と  
 再ひ江戸へ立回り下谷山下も世帯を持ちお辨を妻とし夫と呼れ巾着切を渡世として良らぬ



業も耽りつゝ大膽不敵の白徒あれバ仲間の者も立られて親分姉御と持囃され膽の日小増し  
 太くあれど其首筋の日月は細りて今の糸の如く透まり刑場の露と消へ汚名と世上も傳ふ  
 るを知らぬとこそ淺猿け話頭復舊義も兩國煙花の夜岩上勘十郎と拾ひれたる神田三河町  
 の人入渡世松崎喜三郎の娘お濱の勘十郎夫婦も養育られ流るゝ光陰は淀なく春の花秋の紅  
 葉と又幾回か樹梢の色わ染換て文久元年辛酉年とありお濱の十五の春を迎へまた其年を果  
 敢かなく暮て翌れバ二年の春とありぬ爾程も下谷山下ある巾着切の巨魁小天狗長次の一日の  
 事妻のお辨と對坐酒うち飲居たる折しも剛の伊太郎と云る乾兒が訪づれ來りて、コウ親分  
 姉伍をよく聞かせへ大金儲なる打つ蔓を搦まへて來やしたト云ふ譯の外でもねへ本所北割  
 下水に住む御家人の岩上勘十郎と云ふ者も今年恰好十六もある小野小町糞を喰へ衣通姫徒  
 跣で逃出すお濱といふ頗る別嬪の愛敬娘がありやす其履歴を聞けば何處の馬の骨だか知ら  
 ねへが忘れをしねへ十年前兩國川の烟花の夜大白雨の混雜紛れ親も外れて泣て居る五歲計は  
 りの女の子コイツの金か捨てあると剛と練名の私ちが目速く認けて直に引摺ひ兩國橋を打  
 越て百本杭の河岸端まで來掛る折しも後より癖者待てと呼止められ驚きながら願回り見れ  
 ば度々演劇で演る五段目の定九郎と云ふ見得で人斬庖丁を挾て居るも仰天あして其子を置



去り一目散に逃去たが今能く聞ハ其時ハ折角己がものしたものを伴歸りて育て上たが則ち娘のお濱もて已を感した武士の矢ッ張岩上勘十郎と判然知れたが十餘年間彼奴も育てさせた代物を手を濡さず地方へ巻上げ年一杯賣込一本(百兩といふ事)の堅へ上玉ナント親分一ト狂言書ク氣のあいかと語るを聞き慾眼のなき悪漢毒婦成程旨へ金の蔓引出す工風ハハテ何したらと腕又いて黙然と工風を凝す長次の顔を覗きてお辨の耳も口何やら暫し聞けば長次の碯と横手を拍ら○ソイツの妙計我爲の桶孔明旨い〜と譽稱すをた辨の打消人をおひやるも程がある混ッ返しに廢にして何かの手等を伊太郎も謀し合して一狂言やめて見やうと三人が寄バ交珠の智慧ならで杜騙の手段を密々と語り合つゝ前祝と香を増し燭を直し各々酔を尽しけり

第九章

單表岩上勘十郎ハ此程あしき風邪を引込み快よからの處より出勤を断をりて部屋ハ垂籠の夜着うち擔ぎ汗など取て療養ハ如才内義のお花と素より養女のお濱も共々夫と養夫の病氣を看護り心を尽して介抱をなさ〜忘りなき折から玄關先へ紙打の塗棒襦を横付よして共々連たる若黨ハ案内を乞せて徐々ど駕の中より立出る婦人の年の齡三十右左推量豎のか

たはづし襦衣姿の折目正く歴然としたる上臍ハ是の如何ある方様の侈來臨かと打驚きつゝ妻のお花の頼て一間へ請じ入れ煙草盆を出し茶菓を勤め頭を低て丁寧ハ何れからのお來臨よや直様良人が御面會致すべき等あれと四五日以來風邪よて引籠り居りますれば何とぞ私しへは用の次第をト云ハ件の御殿女中の詞優しく云るやう。借ハ岩上様ハいか障とか折悪事よはべるあれと御内實とあるからの貴下ハ申し上るも苦しからず先づ一ト通りお聞下され卑妾ハ御本丸の奥詰紅葉とやす中老職又た良人の麴町貝坂ハ住居八百石を頂戴いたし御監察役を勤むる近藤將監と申す者今日推参いたせし何をお隠し申させう御當家の御養女お濱と申すハ現在卑妾が腹を痛めし眞實の娘トサ斯計でハ御合點行まじサ、そのお驚きもハ道理思ひ出せば一昔跡娘はまが五才の夏川開の烟花を見せるとせがむま〜乳母と下婢も傳を言付け兩國へと出し遣しよ其夜折あしく大雨の降で湧たる不時の災難哀れや娘を群集の中見失ひしと乳母の注進打捨ておくべきとよあらねば若黨仲間を同所へ遣し八百八町の隅々まで残る限なく搜索しかど更ハ踪蹟の知れざれば良人將監ハ天よも地よも只一人ある娘を失ひかゝる悲嘆の種と云ハ是皆卑妾の疎忽ありと以ての外立腹を就成す詞をなく計り悲嘆餘りて氣を半乱どうぞ娘を返したまへ何卒踪蹟を知らしめ玉へと神



よ佛ね願ねが事ごとを空そら頼たのみある此こ年とし來きたモウ此こ世よでハ逢あれぬとか消きる間ま近ちかき烟はな花はなの夜よを娘むすめが死し出での  
 忌き日ひと思おもひ逆さか縁えんをがら回まわ向むかして愛あいさ年とし月げつを送おくるうち此こ程ほど淺あ草くさ觀かん世よ言ことへ良よ人ひとと共ともに參ま詣げいの歸き  
 り道みち摺す違ちがふたる一個ひつぽうの娘むすめ幼わか稚ち顔がほ見み覺さる娘むすめの濱はま瓜うり二ふた割わりで其その儘まま生な寫りし詞ことばを掛かんと思おもひ  
 し娘むすめを亡なせし苦く勞らうより心こゝろの亂みだれ人ひと様さま娘むすめが我われ子こよ似にたやうよ見みゆるものかと思おも返しし狂くるふ  
 心こゝろを戒いめて漫まんよハ言ことば葉はを掛かず供つれよ伴たる奴やつ僕べよ吩いひ附つけ其その嬢ぢやうの跡あとを踵つひさせしよ御ご當とう家けの御ご養やう女にょ  
 と知しれ夫つまからそれへととひあはせしよ憫あはれや娘むすめハ烟はな花はなの夜よ惡わる棍ものよ勾か引ひされ危あき所ところを勘かん十じ郎らう  
 様さまのおすくひくだされしのみあらず實まことの父ちち母ははよも彌い増まる此こ年とし月げつの御ご養やう育いく何なにとお禮れいを申まをさう  
 やらうれし餘あまつてことばも出でず良よ人ひと將しょう監かんハ初はつ老らうの四よ十じの年としを過す越こ方かた外がわよ子このなき心こゝろ細こまさ  
 よ卑ひ妾めかけの畑はたけの惡わるくして時ときく種たねさへも生なぜぬを幸さいき事ことよ思おもひ屈くし愛あいを重かさねし今いまよ至いたり圖とららず  
 娘むすめが息いき才さいよて御ご當とう家けのお庇かきよ依より人ひと尋たず常じょうよ成せい長ちやうせしと聞きく嬉うれしさよ堪たへ兼かて長ちやうの御ご恩おんを顧かへみ  
 ず良よ人ひと將しょう監かんよハ時ときを移うつさず迎むかへ行いけどハ老おきなの癖くせ急いそ立たつ短たん氣きの心こゝろ根ねを諒あやめ兼かたる恩おん愛あいハ卑ひ妾めかけ  
 を同おなじ煩わづ惱なうの切きるよ斷きれぬ親おや子この縁えん押おし付つけがましき請こひ狀じやうなれど何なに卒つひ覆ひをハお戻かへし下くだされたく  
 長ちやうの年とし月げつ御ご養やう育いくの恩おん義ぎよ報むかゆるお禮れいよハ役やく目めを笠かさよ着かるよハあられと良よ人ひとは今いま上じやう様さまの御ご覺かく  
 愛あいたき御ご目め付つけ役やくゆゑ宜よしきよ執と成せい參まらせきハ御ご當とう家けの御ご出で世よハ瞬またく間ま卑ひ妾めかけを亦また御ご本ほん丸まるの奥おく向むか



五十六

を勤むるおれば及ばずお供々よお心添を致すべし此義よろしく勘十郎様へと意外の詞  
よお花のびつくり何と挨拶してよおからんと胸の思案よ左考右考當惑左こそと紅梅の尙を膝  
をすり寄て。其お驚きの御尤を長の年月我子の如く御養育下されし娘濱とバ敷から棒又申  
受る言出しよくさ此場の難題鏡面皮き者と思しめさんが是が此限離別よなるといふでもあ  
し麴町本所と住家の離れてをりましてを産乃思より彌高き御養育の御恩人以後の親類の縁  
を結び送よしげく往復おバ一つ家よ在るも同前早く此由お濱へもお傳へ成れてお逢し下  
され實の母と聞たららバ濱をさこそ逢たかるべし襖を隔て、最前より此咄の有枝有葉を側聞  
したる娘のお濱豫て養父母のお物語よ此身は實の父母なる由聞て居たれど今い將た何れ  
よ堂してゐるやらどうぐ一目逢たいと無理を願を掛せくも神よ佛も朝も夕も祈りし甲斐の  
御利益か今日の如何なる吉日よや問玉いりし實の母上盲龜の浮木優曇華の花咲く春よ逢し  
心地お懐ぞやと言バ又よ岩間の清水岩角よ堰れて落る涙の濡布育てられたる養父母の心の  
中を汲み兼のヨ、と計よ泣沈む娘心を惨らしく憐る所へ此家の主人岩上勘十郎の病床を離  
れ衣服を改め出来りお濱を見るより其手を取り今更何を泣とかと此方の一問へ誘來り紅梅  
よ對ひて威儀を正し。拙者の則ち勘十郎折あしく病氣よてお出迎を仕つらず痛く無禮を仕



つりぬ只今彼なる一箇よて來由の趣き承知せり離合天なり將た命あり親子再會の時機來りて迎へらるゝを何かの惜まん將監殿御夫婦の喜悅の言も更なり濱の幸福此上なき拾ひね往時と斷念いたせば御勝手は遠戻られし斯てこそ我々夫婦が馬を踏せず犬も噛せず養育甲斐のありといふもの併し只今承まれば養育の謝儀として上へよしなむお執成下さるとか其義の強て御辭退申す小身あれども勘十郎は他人の兒を養育たる恩義は依て榮達する身の出世の望ましからず是が我身の潔白ありといふは紅梅うち微笑み。思ふは優たる岩上氏武士の斯こそありたきもの其の御潔白あるお心あれば私共がお取成いたさずともやがては出世のしれてあると口を極めて稱賛し養母お花の脊後座し耻て頭を擡げ得ざるお濱の手を取り引寄て。コレ娘よこの母を見忘れしかヤレ懐しや喜ばしやようマア壯健て居てくれた是も夫も皆な御當家の厚きお庇蔭死すとも必ず忘れまいかと云れてお濱の今のまも眞實の母は邂逅ぬる嬉し涙と又更永の年月養育の恩義高き養父母は孝行らしき事もせず飽息別れの勿体なき盡ぬ名残の哀歡交々涙は絞る左右の袖何と答詞もなく計お花の殊な女氣の我を忘れて。コレお濱今實家へ戻るども遠からず歸ぬ來よ名殘惜やと手を取ればお濱も同じ恩愛は取換したる四の手の放れがたなき風情なり紅梅左こそと中に入り。は内義のお

悲喚の道理の事あれど是切別るゝとやすでいおま翌日の必ずな禮かたゝ又々娘を遣すべし濱も兩心得よと論す詞の尾よ付て勘十郎も心の歎きを咳も紛らし故意とお花を叱り伴。其許を武士の妻でいかに紅梅殿の云ゝる通り死別れといふでとあし逢んと思へばいつても好は逢れる娘乃行先何でメソソ泣とが紅梅殿よは遠慮なく疾々濱を連歸られし將監殿も待わびたまひめと云を紅梅好機會と襟衣さばきも興ゆかしく爾々とばかり起上る跡は附添ふ娘のお濱いづれ近日お禮よと精一杯ある娘の情跡のあみだは吳竹の雪は隠れし風情よて拜伏みつゝ誘おければや立出る立先養母お花も恩愛の絆あよかゝる哀別離苦引び引るゝ後髪娘待ちやと追出るを未練をのめと勘十郎衣の裾を引据る紅梅手迅く泣入るお濱を我乗物よ打乗てハタと立切る駕の戸の中よハワツとお濱の聲歎きを跡は残しつゝ供人早くと急立て挨拶こそく歸り行く开を此紅梅と偽名を婦人の亦彼の毒婦お辨なるは看客既は娯合點あるべし案下休憩再表神田三河町の人入渡世松崎喜三郎の彼の兩國川開の夜見失ひたる我子をば求むる手蔓もあやせんと果敢なき事を空頼めよ米澤町の自身番より連戻りたる男兒を我娘の名あるお濱の濱を取て濱太郎と稱名つゝいと大切は養育しが尋ぬる我子のお濱の素より不圖も連歸りたる濱太郎の親達をも知るよしなくいつか幾干



の春秋を送り濱太郎はとや十二歳とありし世の童との異よして算筆を好み萬事至て伶俐  
 ければ今の女子より優れりと去者日々は疎しの俚諺お濱の事の忘れし如く只管濱太郎を愛  
 しみ斯る荒蕪たる家業を譲らんより商人よあすこと良らめと思ふ仔細を妻よを語り濱太郎  
 又を云聞て横山町三丁目の袋物商播摩屋伊兵衛方へ丁稚奉公よ任込せし濱太郎の主人大  
 切と謝しかば主人の素より傍輩の氣受も宜との評判を聞よ付ても養父母の其喜悅の如何計  
 春秋二度の敷入毎一藤の商人よあるべしと教諭して行末を樂む甲斐も情や無情迅速養  
 母のか鐵の持病の瘧は閉られて濱太郎が十四の秋果敢なく鬼籍入りたりけり其翌年濱太  
 郎の元服して先づ男よ成しかば養父喜二郎の殊更妻の早世を歎き責て濱太郎が元服の姿た  
 を見せてやつたから返らぬ愚痴を離せしとを話題兩岐廻町三丁目よ紀州家の用達を勤  
 むる紀伊國屋治右衛門と云る商人ありお豊と稱ふ娘ありて年甫て十八歳治三郎と云る男子  
 ありしが五歳の夏兩國川開の夜見失ひしまゝ行衛しれず（此の治三郎こそ松崎喜三郎が拾  
 ひ上げ我子として養育たる濱太郎の則ち是あり）父母の悲嘆の一方ならず神よ佛よ願掛  
 て四方八方を搜索しかど終は踪跡のしれざれば見失ひたる日を忘日として追善回向をす  
 のみなり斯て治三郎の姉娘お豊の十三歳の春より行義作法を見習ひの爲めお出入屋敷なる

紀州家へお小性奉公よ上たりける恁てお豊が十八歳の春を迎し彌生中旬五日間の宿下を願  
 ひ御殿女中の外珍らしく今日の猿若町の演劇明日の淺草の觀世音と子よ托けて母親を良人  
 の許しよ甲首乙首と一兩日遊居たる第三日目明後日のモウお邸へ上る日おれだ是非夫迄よ  
 姫君様より拜領せし御定紋附の箱香子簪磨き直して貰いんと彼横山町成播摩屋伊兵衛方へ  
 依頼かば同家よての三ツ葵の紋付たる品故いと大切よ取扱濱太郎よ持せて下職ある何某方  
 へ運送中兩國廣小路よて巾着切よ右の簪箱香子共包の儘よ掠め取られしは又是非も無き事  
 ども也斯て濱太郎の大切の品を取られて當惑かから急ぎ店よ立歸り面目あげよ右の由を話  
 すと聞て主人の素より番頭の驚き一方あらず疎漏の叱言の兎も角も先づ先方へ詫入て新  
 調へ納めんと番頭藤助の濱太郎を仲れ詫かたゞ紀伊國屋よ赴き云々の由を言入しは同家  
 よても打驚き明後日娘をお屋敷へ上る日迄は何有ても無て叶ぬ拜領の品娘の身の上は係  
 りるとゆゑ御無理の様だが明日中よ是非持て來て下されとお豊の母親おさしが詞道理責た  
 る言状よ藤助濱太郎も詮方なくすゞ店よ立歸り主人よ此由物語り却如何よして宜らん  
 かといづれも手を組み眉根を寄せ空しく評議すのみよてよき分別も出ざるよぞ濱太郎の尙  
 の事居ても起ても居られねば密よ主家を脱出きて盜難よは利益ありといふ赤坂の豊川稻荷



へ參詣し一心不亂に祈禱を掛け御園を取れば第五十六番の凶にて失物出ずとある兆は頼みの綱も断果て嘆息しつゝ見上たる天のいつしか黄昏て翌日を限の尋ね物死で言譯なすより外もせん術なきものから産の恩より養育の恩義を受し養父に對し孝行らしむるもせず又二つより此年來恩あり義ある御主人よかゝる難義の勿体なき夫のみあらで實の父母尋ねる甲斐も情なきや現世で逢で黄泉へ行く遺憾なきを如何よせんと前へ二足後へ三足居所の羊の歩して最後の場所と踏迷ふ耳を貫ぬく石町の鐘の音色も哀を添へ諸行無常と響くなる眉指見ればいや初更今更物を思ひんより雨じやくと兩國の橋中へとて急ぎ行く實もや催はるる如く禍福の糾へる繩の如く人間万事塞翁の馬の手繩の伸縮吉も凶も定めなき浮世の習慣是非もあや濱太郎の使先にて大切の品を掠め取れし其賊難よかゝる難儀の我のみあらで主人まで退引ならぬ必至の當惑死で辨解なきものを漸くよして思ひ決め兩國橋の中央よりやをら欄干に攀登り身を跳らえてアハや今飛入らんとする背後より兄哥待たと抱止むる詞よ知るき勇肌男イエノ何ぞ見逃して助けると思つて死かしてと死なんとあせるを放さばこそコレサ兄哥時代を事を言ささんな助けたり殺したり出来るものかどういふ譯があるかしらぬ己を男た止たからよア死ぬ譯を聞ぬうち邪が非であらうと死かしやアしねへ

急すと譯を話しませへと引据られて濱太郎の涙ながら云々と紀伊國屋から頼れた簪と箱背子を巷賊に取れた始末を語り是が金づくして濟むとなら死さうとい致しませぬが何を云も今夜限り金で買れぬ花主先の大切な品を取れたとゆゑ私が死んで辨解せず大恩受た主人まで共難義のかゝる始末夫ゆゑ死ぬる果敢き身の上話した處が益なき線言去らばと計り身を起し再び入水なさんとする袖を捉へて件の男。エー氣の早いマア待ねへ夫じやアお前が死なうとしたい客先から預つた簪と髪指と巷賊に取れた申譯のないといふ一件かなんば三ツ葵の紋があるどて死ぬるといケチさ了筋だ其髪指も己が今夜中返してやるから決して死ぬやア及ばねへ何を隠さう己の家業の小天狗長次と緋名を取た巾着切の頭分掬摸れた場所が此邊だと云は代地の寅が繩張内己から旨く掛合て今夜中取戻しておくから翌日の朝己の宅へ受取よお來臨させへ下谷山下の云々の處だと賊あがらも義心ある長次の言葉の地獄で佛と濱太郎の雀躍さすまで打喜び。そんなら明朝貴君のお宅へ己を是から寅の家へ。何分宜しく。オー合點だと右左別れてこそ歸りゆく此結末如何ならん次編よ説くを聴ねかし



二十七 新明 聖代の球謠後編

第一 章

却て説く濱太郎の或方よて待明し鳥の聲と諸共よとつかひ山下へ走り行き長次の門を音信  
て昨夜の禮を述なぞするをまだ高剛よて臥居たる長次の漸く眼を覺し。籠棒よ早く來たじ  
やアねへか約束の品は是だらうと投出す管箱脊子とも擬ふ方なき該品なれば夢かど計打喜  
び心せくまゝ謝儀もそこへ急ぎ横山町の店へ戻れば播摩屋方よて昨夜より濱太郎の歸  
らぬより何した事と案じ居たるは満面は笑を含みて歸來りし濱太郎實の昨晚云々よて小天  
狗長次よ助けられ拘模られたる品物を取返し呉たる始終の譯を詞忙しく物語れば主人の更  
亦り番頭等まで小天狗長次の義心ある扱ひ方を深く感し給ひしがたき恩人たれば先づ差當  
り急ぎといふ此髮指と笄の研直志をせねばならぬと直に鋸師方へ持行き其日の申下りま  
でよ出來上りしかば昨日よりの始末と語り詫するまの當人を自身よやるがよからうと濱太  
郎を紀伊國屋方へ遣はせしよ同家よても翌朝の娘を屋敷へ上るといふ其前日の火點頃まで  
播摩屋よりの音沙汰おければ如何せしかと左思右思安さ心もなき折がら濱太郎の面目なげ  
は箇様くの次第よてとんだ御心配を掛まえたが云々の譯あつて再び元よ戻りましたゆゑ

御注文通りよ磨き直し取敢ず持参いたしましたと身の非を飾らず詫入て件の髮指と笄を差  
出しければ主人治右衛門を大に悦び僅ばかりの直物よて飛だ迷惑を掛ましたと氣の毒げよ  
挨拶しながら濱太郎の顔を打睨り傍よ居る女房よ對ひ。喃む仙死だと思ひ諦めても未練が  
残つて居る故か此若者の顔を見よ五歳の時よ見失ひ生死をさへ知る由なき治三郎の面色よ  
似たよの思瓜二つ割で其儘生寫しと言つゝ指を折て見て治三郎を息才で居たならば恰好年  
齡も此位と言つゝ蹴す一ト車お仙を其よ濱太郎の顔をつくく打睨り。ホンよ爾被仰バ被  
仰る程見擬ふ計の生寫し子を亡したる煩惱の僻目よ斯を見ゆるものかと夫婦右より左より  
瞬きもせで見惚居る中よ被まれ濱太郎の手持不沙汰よ稍暫し何か思按の体寄りしが治右衛  
門夫婦よ打向ひ。今お咄しの五歳の時失ひたまひし其お子が其時着て居た衣の編のもしや  
是でいありませぬかと神符を入し脰巻を手迅く解て差示すを治右衛門夫婦の一目見るより  
何して是をお前さんがト夫婦齋く問掛る詞を未だ終らざるは濱太郎の涙聲。偕の貴君方御  
夫婦の眞の父母よて在ませしかお懐しやと計よて御合點さるは嫉道理事長くも私の身の  
上先一應お聞下されト先年煙火の夜松崎喜三郎よ拾上られ永の年月養育られ播摩屋方へ丁  
稚奉公よ住込たるより現今よ至るまでの委細を簡短よ述畢り去年の秋没故し養母が最



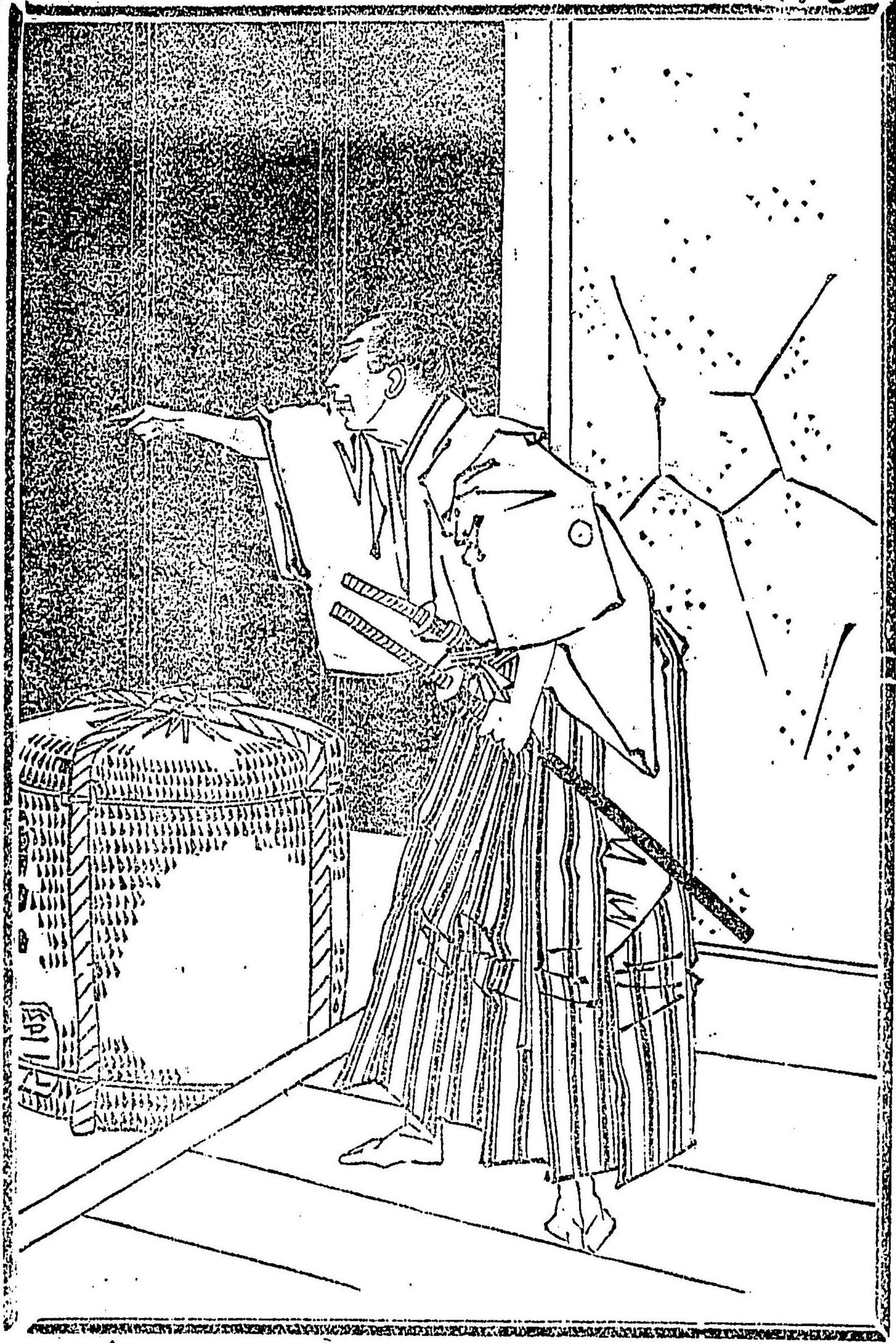
期の遺言、眞實の親を廻り合ふ後の証據と拾はれた時着て居た衣物をコレ此通り神守袋に仕立直して呉れたを肌身放さず所持したる其甲斐ありて圖らずも是日の災難うち解て親子再會の種となりし是も偏に神佛の利益よこそ依るあらぬと嬉し涙を暮居たる夢かと計り治右衛門夫婦偕に我子の治三郎かようマア無事で息子でも右より父親より母のお仙が取絶り齊く涙ふやれ竹のふえ識の事より此再會今將思へば燈火の夜其許に着せた此衣の親子の縁の尽すして再び廻り青梅織其占もよき仕合縹思へば是も松崎様御夫婦の御丹精と又一つよの實の姉の所持品と知ずして使先よて拘撓られ既に死かんと覺悟せま危き命をおすくひ下されし長次どのとやらが徴りせば争でか無事廻りあふべき眞實の親との名のみよて松崎様の養育の親長次どのの命の親執れ劣らぬ鴻恩大義を夢ふありとを忘るゝと十有餘年の其昔別れし我子よ逢見ての長物語は春の夜の更行く鐘は驚かさぬ主を持つ身の我儘よ留まり兼つ止めかね後と契りて立歸る子心よりも又一層歸す辛き親心義理と情の柵と思と愛との絆を斷ち其夜のそのまゝ別れけり恠て濱太郎の思ひぬ事より痛く歸りの遅刻せしかば道を急ぎて息堰と主家と戻れば播磨屋方よて濱太郎の遅き歸りよ亦如何ある災厄の起りいせぬかと案じて居たが先様の首尾の如何であつたと問訊されて今いしも包まば却て

悪かりかんと實の斯々云々の次第ありて遅なりしと實の親を廻り合ふ前の始末を物語れり主人の素より番頭等も耳新しき奇遇の話は膝の進むを覺へぬまで不思議と聞居たり却濱太郎が昨日よりの始末は只播磨屋方の混雜のみよて同人の不調法と親も知れせんを氣の毒ありと流石大家の計らひよて事穩便に濟せしかば濱太郎の養父ある彼の松崎喜三郎の此等の由を知らざりしと案下休題松崎喜三郎の拾兒濱太郎の未頼母しき出世をバ樂しみ暮して居たりしよ或はの期同町に住むよ組の櫛子持よて近來賣出の勇み肌二つ旋毛の三五郎と云るが上り口から無造作に兄哥宅かど入來るを見るより喜三郎は起出て誰かと思へば三五郎朝ッぱらから宜機嫌だに定めて昨夕いと云を打消。其昨宵の一件で夜の明るのを待かねて三枚肩で大急ぎ宙を飛して來たんだがマア聞ねへ斯云ふ譯だ己がまだ餓鬼の時分朋友の様よして遊して遣たり又苛めて泣したのして兄哥や姉伍よ呵られた此方の娘のお濱坊よ昨宵圖らず逢ひ逢つたが場所柄と云ひ極悪のツイ詞も掛あんだと聞て驚愕喜三郎半の信ぞ半の疑ひ。十年先よ見失つた娘のお濱よ逢たとい何だか原因の判らぬ話大方夢か左を奇くお濱よ似た女よでもト半分言ひせよ三五郎の顔と共よ手を掉て。爾活潤したとじやアねへ委く言ねへから疑るを尤もだが狼狽すよ聞かせへ。己の少を狼狽ねへが汝の方が











られたる御厚恩の印計り鹿酒一樽齎し來れりイザ御受納われかしと大部屋小部屋を渡り詰たる宮火丁等も荷せ來りし酒一樽合點行ざる勘十郎。貴殿の何れのお方かしらねと拙者も於て他の娘を養育したる覺を勿論故ありて年來育てし娘のありつるが開の兩三日前、離合時ありて其の親の自然と知れ産の母が尋ね來て連戻りたる其外は一向覺ゆるらね門違は相違あり甚だ疎相千萬ありと云せをわへ喜三郎。覺なしとは卑怯の挨拶去らば證據を言聞さんと威丈高もあつて詰寄つ十有餘年の永の年月天よを地よを只一人の我娘を養育られたる恩義の恩義怨の怨人を頼んで吉原の浮舟瀬あらぬ苦海に沈めたりとしたりとした大金を言々せしめて置ながら今更知らぬ覺をせしとらと切るとい卑怯千萬夫でも天下の御家人かイヤサ四民の上よ立つ武士の所業と謂べきか返答如何よと云せもわへ勘十郎の大よ怒り。黙れ町人身も覺なき惡口雜言いかは微祿の拙者ありとて仁義をしらぬ亡八屋へ他人の娘を賣る如き正なき所業を爲すべきや猶この上よも兎や角申さば伊達よの差ぬ刀の手前決して用捨あり難しとハツツと腕付け携へたる刀は反を撃せつゝ足場を計りて詰寄る侮りがたき身構よを更よ怯ぬ向不見喜三郎を突退て恐氣もなくツカくと進み出たる三五郎勘十郎の刀下よとつかと座し。ヤイ武士さんば人斬庖丁を差たどて痴人威の太平樂越後信濃

のぼつと出か京坂贅録の腰拔あら指を噛へて引ッ込まうがキャンと一つぶつ付りやア半纏一枚まつ先がけ振出す喧嘩の纏持とんなあをりを喰つても五分も引ねへ働さよ年中絶ねへ生疵の極印打た此身体性根と共に鏽腐つた竹光同様の其刀で斬るも乃から斬て見る今日の縫の發常人語據人の已様だ今更知らぬ覺がいととを切るゝ廢よしると吐き吐く不敵の雜言堪へ兼たる勘十郎。言しておけバ附上る命不知の蛆虫奴等爾程命が捨たくハ斬るか斬ぬか我が本事受てを見よやと腰を捻つて抜く手も見せず斬て掛るを此方も素迅の三五郎結名よ呼る、旋毛風の舞ふが如くは飛退りドソコイ爾ハと長鍵(馬口)よて發矢と計り受流す喧嘩馴たる身の進退初太刀を首尾よく受られて心焦立つ勘十郎右手は刃を打振ながら左手よとくく下緒ををて十字よ絞取る早瀬壘み掛つ、閃かす白刀の練の地上の電光ソレ三五郎。撃すと喜三郎が差圖の聲と共に群立つ數名の官火丁等獲物くを打振て身よ振りかゝる無法の喧嘩も冠る笠多く多勢を敵手よ一上一下と斬結ぶ流石の北辰一刀流の奥義を究めし岩上が群がり掛る三五郎等命知らずの荒喜雄を右よ確立て左よ當り事とをせざる手練の迅業只見る飢たる虎の群がる羊を驅る如く寄てハ返す滅多撃去れども喜三郎と三五郎ハ斬立られて逃去る他の乾兒等よい目も掛ず死を極めて踏止まり火花を散す奮撃突戰終







筒様くよしてくれよと私ちへの頼み今更鬼や角云たとして跡の祭禮で役より立ねへモウ尾張屋から半金受取り玉の今夜連込と堅く約束した上の是非を今夜連れて行ねバ己の顔が立ねへのらマア左も右も同道して何かの話の尾張屋へ行て相談しあさいと變つた話も吃驚仰天貴君(勘十郎)を指て云ふ)は限りて爾事事とさざる筈のあらざれば借の産の母と云し今聞く小天狗長次とやらんの女房まで深くも巧みしとと悟り茲で左や右争論より尾張屋とか聞く方へ起り同家の主人へ面會の上是等の由を掛合んと引るまゝは尾張屋も赴きたりしは折あしく樓中は病氣まで引籠も居るといふを強てとも言兼て心あらずを其夜を明迄翌朝鴉母どか聞く一人の老女が妾も向ふて云るやうお前何か仔細ありて是非とを樓主の旦那さん逢たいといふ言だが百五十兩と云ふ大金をお前の親御へ渡した以上の自由もさせぬ此方い身体どうせ賣れて愛河竹の辛い娼賣をさる身あれば切あいな仔細のあるは當然夫を一々取上て居て此方の商賣が出来ませぬ今から直すと云でいあし一日二日の猶豫するから愚圖く云々と座敷へお出と慈悲と情の秋草のその葉未置といふ露聊少をあらざれば泣て明せし其夜の愚明る朝も此事を多認みお知らせせさんと心の矢竹も惻れども紅筆へも持せぬ悲しき筆に此樓をへ脱出てと思ふ心の色見わたか護人の隙をあらざるほど如何よせ

まじと思接の底筋ふて出まゝ一つの工風今日のは是非とも店へ出るゝ鴉母の勸は納得の素振と見せて耻かしや君契情乃仇姿婀娜めく裾衣と身は纏ひ黄金花咲く遊廊の黙火頃の混雜も紛れ辛くも同家の非常口より裏の田圃へ忍び出で今がた茲へ漸々と戻りて見れば箇の什麼免めく白刃の雷光女心の膽潰れを何事の起りしやと暫し小蔭も身を忍ばせ残らず聞し此場の仕義産の恩ある實の親と養父との命の取遣元いと云バ我身より起りし事の勿体なさよ恐氣を忘れて白刀の中へ出まゝ這入か差出業お免しなされて下さりませと詞忙しく始終の機子を語るを聞き喜三郎の白刀を覆理と投捨て勘十郎は打對ひ大地は平伏し粗忍の罪を詫れバ此方も打解て互は初對面の挨拶終り次はお濱と喜三郎が父子不思議の再會も喜び餘る嬉し泣手も手を把て詞なく先立もの涙あり斯る所へ勘十郎の妻お花を麴町の貝坂邊を尋ね詫て歸り來り此圓坐の中へ入て近藤將監と云ふ人のあきを道理借もく騙術の仕業でありつるか甲一齣乙一齣語つ聞つ果しなき入組たる有様を拙き筆よのせんはくだくしければ省みて記さず看客宜しく察したまへ

第二章

最前よりの長物語を傍に在て聞居たる二旋毛の三五郎の面目なげは進み出で天窓かきく



云るやう。事の起源を押時の目ツちが尾彦で聞込だ其片言を一概に夫とバツかり思ひ込だ前後不見の早合點とんでをねへとを致しやした送は怪我でも有た日みやア大寺間違よなる處幸ひお濱さんが來合て丸く納る此場は宜れど納り兼ねる尾彦の一件勾引された娘をせよ大金と出て抱へた代物逃られて黙て居るへ夫も付ても憎い奴の騙局の張本小天狗長次彼奴の所業と知れたるからは少の間も猶豫ならぬ風を喰つて逃ねへうら此方の旦那と喜三兄哥乃名代兼て私ちが一番長次の家へ暴れ込み占たおはまさんの身代金を此方へ巻上げお辨と共にふん縛り辛き目見せて腹を愈んと引連れ來りし喜三郎が乾兒を隨へ起上り押出さんぞ權幕を喜三郎の暫と押し。和主の意見の爾とながら大切の掛合油断のあらぬ口も供々山下へ趣き長次とやらを引捕へ勾引の罪を糺しくれんと云は勘十郎も言葉添へ。我こそ騙局れし當人ゆゑ足下達も先立て行べきあれど奈何せんお濱が花街乃規則を犯し逃出て來りたれば尾彦よりも茲へ向け必ず追手の來るなるべし爾ば我儕の遣り居て尾彦の追手の來るあらば其者等も云々と勾引されたる始末を語し一談判やつた上共引連れ勾引したる長次の家へ伴ひゆき其處よて始終の罫を明くべしと相談頼ま決まりしかば喜三郎の三五郎を始め乾兒等を引率へ山下さして急ぎゆく却て説く岩上勘十郎の勾引の罪を糺さんと

て出行たる喜三郎と三五郎とを見送りつお濱も對ひて左や右と猶も様子を問究め又にお花が麴町へ尋ね行て貝坂邊を空く廻りて立戻りし等々委細を譯を語つ聞つ暫し時を移せしよ動也く入來る花街の追手おはまの姿を見るるを屋彦の樓丁の聲荒らげ勘十郎も打向ひ。百五十兩と云ふ大金を出て抱けた上玉を牛房拔も運出た其尻押の和主であらう疾々お濱を渡せばよし四の五の吐しやア氣の毒ながら花街の掟を犯した科武士ありとて用捨せぬ返答如何ふと囁付おとく吼り立れと勘十郎耳も掛ず落付顔。其嫌疑の道理おがら是よは段々譯の有と先づ一通聞て吳とおはまを尾彦へ賣たる小天狗長次の所業よして素より勘十郎が知るとならず夫も付き喜三郎と斯々云々の鍵を惹出し既喧嘩とありつるを折能くお濱花街を脱出し袋へ來たので始終の様子を解りし事を物語り。斯く入組たる事の起源は是が皆長次が所業なれば喜三郎等の今しがた長次の家へ出向たり何よして足下等も決して損へ掛問敷おはまの身代とて渡し玉ひし百五十兩の大金の長次より取戻し直償ひ返すべければ御苦勞ながら拙者と共長次の宅まで來られよ其所よて始終の罫を明べしと理非明白ある返答も追手の者等を承諾し然らば共も行べしと云は勘十郎の支度もそこく花街の者よ引連れて本所北割下水より御廐河岸よ出同所の渡船を越て藏前通を西へ下谷から三味線堀



へと差掛り同所竹町の立花郎の西門前より来りし時彼方よりして足を迅め息せき駈來る一人の婦人怪まき素振と勘十郎近よるまゝ、眼を注れバ手拭みて面部を包し風姿こそ變つたれ過つる日紅梅と名告て来りし婦人又相違なけれバ倍の彼こそ小天狗長次の妻よしてお辨と云る毒婦ならの察する所喜三郎等が同家へ掛合込しを以て逃る、道なく彼お辨の該事件の當人なれば逸はやく風を啖ひ逃出せしと覺たり憎さも憎しと大喝一聲曲者待てと呼とめつ猿臂を伸して進み寄り引捕へんと競ひ蒐る驚きながらも怯てぬ毒婦頭髪よさしたる簪を抜より迅く早速の手裏劍振顧さながら投げ付るさしを腕の違はねと此方も眼早き手練の岩上身を反しつ刀の鑢よて丁と受とめ衝と寄てお辨が左の片袖を確乎と捕へて引戻す引戻されて地地地と兵兵く足を踏みしめてお辨も今い一生懸命力限りは振りはらひ逃るはづみは片袖の弗ツリ断て岩上が右手に残りつ口惜や主の藻紋のから衣足元暗に甲夜闇は紛れて跡のしら浪の何くともなく消失しを勘十郎の遺憾は堪ぬ兼ね猶も退んと踏出すを引添來りし花街の者の袖を扣へて押し止め無益の長追措きたまへ長次さへ捕押へあつて夫よて用い足ぬべしイザ疾々と急立れば勘十郎も道理と點頭さ残る片袖後の証據と懐中なしつ、諸共よ足掻を早めて山下ある長次の家へと急ぎ行く茲は松崎喜三郎の二つ旋毛の三五郎等を始め

數名の乾兒を隨て下谷山下ある小天狗長次が住家へこそ押寄來つ先三五郎をして長次が家よ在か不在かを見届させ長次の素よりお辨も俱に家よ在どの注進、爾は何れも用心して二人共逃さぬ様。オ一合點だと裏表より一時は動也く押込たる喜三郎等の權幕よおどろきあから悪漢毒婦おちつきとらつて左右をよらまへ長一向奴なれば人のうちへあんあいをあく踏込とい不作法千萬といいせもあへず喜三郎の挿光らかす長脇刀よあたりも陔しとをすそをまくりて長次が坐したるほどり近く向騰わらひす高踏腕膝つきつけてつめよりつ。豫て名前を聞て居た小天狗長次とい和主よ己の神田三河町で人入渡世の江戸奴松崎喜三郎と云る者長「倍の噂に聞及ぶ九紋龍の親分なりしが其親分が何用わつて喜出掛て來たの外でもねへ和主等夫婦が勾引の長「エー喜罪の次等い云す其方の胸に覺がわらうと云ふ尾よ附て三五郎拳を握りて進み出で。ヤイ長次モウ斯なつちやア叶はね、噂アのお辨と奥女中の御殿姿よ打扮せ勘十郎を欺むいてお濱坊を引摺ひ旨く尾彦へ箱込でまんまと首尾よく大金を騙り取りたる時代を狂言その勾引の尻が割れ當つて碎たる男の意地突岩上方へ押してゆき喧嘩は花咲く出入の魂膽手前の所業と知れたるゆるぎ始終の罅を明よ來た占めたお濱の身代金をさりく出て詫ればよま四の五の吐しやアふん縛り突出すから爾思へ



と左右より聞詰られ有弊不敵の小天狗長次を跡跡充分なるものから争ひ兼ね見えたりしが三十六計逃るゝ手なしと迅くも思案を決めつゝ。願ひれた上何とか包まん如何もか彼を勾引し尾彦へ抜たれ私ちの所業騙り取た身代金の後とを云す今直は親分さんへお返え申せば穩便の御沙汰こそ願ひしけれと悄然として打詫れバ喜三郎を面を和らげ。其方が折て出るからまやア此方を素より器の好まぬと稍打解志由断を見濟し傍に有合ふ煙草盆を取より迅く早速の目潰投付られて此方も目迅く飛退ながら引抜く一刀小癩な腕立其處退と身構をしたる喜三郎の傍に引添ふ三五郎も同じく脇差抜つれて左右よりして斬てかゝるいとを鋭く刀の下を甲首乙首と逃廻る長次も今ハ一生懸命火鉢の上へ煮立たる藥籠を足もて蹴返せば發と立たる灰神樂家内の吹雪も異ならぬ灰と煙隔てられ進み兼ねたる二箇の敵の際を得たりと素迅さか辨の横手の壁を擊破りて早くも其場を逃去りぬ喜三郎等の逃るも辨も心を配る暇なく多勢一度も小天狗長次を取押へんと競ひ掛るを此方を聞えし不敵の曲濠右も當り左を突き組つはぐれつ舞きあひしが三面六臂のゐるもわらねバ衆寡敵せず引据られたる折から門の戸引明て長次様のお宅よかと入来る一人の若者あり喜三郎を見るより走り寄り。お前の父さん何故私しの爲よハ大恩ある命の親とを稱すべき長次さんと此

様よト云ふ顔眺て喜三郎。誰かと思へバ濱太郎此惡黨の長次奴を大恩人ぞとソロヤ何故と詞忙しく問掛たる登下濱太郎は付添来りし一人の男が進み出で。其御不審ハ御道理私ハ播磨屋の番頭藤助と申す者ト濱太郎が紀伊國屋方より詔へられたる髪指を使の途中で拘摺れ言譯ささぬ死うとしたを長次の爲に助けられたる始終の轢子を差當り喜三郎へ報知さんと三河町へ尋行しよ五歳の時見失ふたる娘伍の事よ付き本所邊へ出向れしと聞て一先長次様の禮を述べんと来て見れば思の外なる此騒ぎと話す傍より又一人。貴君が松崎喜三郎ののか私しと廻町に住む紀伊國屋宇右衛門と申す者不思議な縁で長の年月悴宇太郎の濱太郎を御養育下されし恩義の口も述べたま娘おとよの髪指を播磨屋へ研直しよ遣たが親子姉弟の再會の種となりたる奇き仔細を詞忙しく物語一体此場の爲体いさうした譯でありますと甲乙齊しく語を繼て問糺さるゝ勢ひ込たる喜三郎の言も更あり三五郎さへ張合振け忙然として稍暫し左右の詞をわらざる處へ又も入来る其人を誰かと見れば別人ならず亦彼の岩上勘十郎あり様子の戸外より立て事落もあく聞取しが此方の未始ハ云々ありと長次とお辨が計合せお濱を術よく勾引し尾張屋へ賣込たる始より喜三郎と紛議を生じ遂は長次等夫婦の巧と知りたる故に掛合も来りし迄の顛末の要を摘て語つ聞つ何を奇劇の思ひを



し不思議く云の外しはし詞の途切し折柄紀伊國屋宇右衛門の何か思按の体なりしが列居る人々又打對ひ。斯うしての失禮だが私しの悴を數年來の養育下されしお禮としてお濱殿の身代金の私しより償ひませう爾する時ハ悴の命をお救ひ下されし長次殿又對してを聊かおがら思返しお濱どのを苦海の淵に沈らししと言まだ一夜の勤をせぬと聞ハ勾引の罪は憎けれと無事よお濱どのへ戻る上の罪を憎んで人を憎すとやら長次どのハ此儘よ免あされてお遣おされ又一つよハ松崎様ハ岩上様方よりのお濱せのを受戻され私しハ亦松崎様より宇太郎の濱太郎を改めて引取すれバ茲に至りて双方とも實子を得るの場合よ至れど岩上様よは御實子なく入費多き女の子を十餘年間お育てあされ實の親が解りしとして只此まよ取戻されあバさぞ不本意と思し召んが茲よ一つのハ相談あり私しの娘ハ豊と云ハ町家育てのありますれと幼少の頃より紀州家の奥勤よ上あされたれハ行義作法も聊少ハ心得居るやと思われ升るが苦からずはお豊とバ貴君の養女よ差上たく此儀如何よと事を分たる宇右衛門が至當の意見を聞より決断迅き岩上ハ其義實よ然るべしと答へて頼よ承諾せしかバ誰か一人不の字をいふべき相談爰よ一決して纏れし事の纏りたるより宇右衛門ハ改めて花街の者よ譯を話し身代金を償ふてお濱を此方へ受戻し而して之を實親ある松崎喜三郎よ引

渡し又喜三郎方より濱太郎の宇太郎を我が方へ受取り宇太郎の姉ハ豊をバ岩上方へ養女よ送り各々一家親類の縁を結びて末永く交際をあさんとの約束全く整ひぬ箇ハ是れ後の話あれを筆の序よ記すのみ看客宜く推測せられよ問話休題かゝる愛たき計ひよ一同満足してけれハ岩上始め喜三郎等の長次の罪を問ずして爾來ハ必ず心と改め悪を捨て善よ歸すべき旨を懇切小説聞せ後を契りて人々の長次の家を退散せり是等の事は時刻移りて夜もハや痛く更渡り丑滿近くある鐘を暗号とあして長次が家の裏表へ忍び寄たる捕手の人数豫てより長次夫婦が悪事を働く風聞の隠れあけれバ其筋よて密に眼を注け居られし處今夕圖らず同家よて物騒がし折を窺ひ與力同心等の先刻より裏と表よ立て内の様子を儘よ聞知り岩上始め關係人等が示談よ仕遂て立戻りたる跡へ動也く御用くと手よく十手打振て踏込來るを不敵の長次迅くも行燈吹消て用意のヒ首拔放ち逆手よ取て身構たる暗よも夫と捕手の一人御用と聲掛け後より組むを組ませて後手よ脇腹さつと劈けば苦と叫びて倒るハ物音聲ハ聞ぞを目よ見の進退不便の滅き擊續いて進む一人が鮮血よ迂りて後居よ堂と倒れながらハ聲震らせ。彼ハ兇器を携へ居れり各々油断あるべからずと呼ハる詞よ捕手の人々怪我ばしとあと百よ警め灯影くと舞さ合ふ透を得たりと小天狗長次ハ畢生の勇を奮ふて



前を断ら後を遮る捕手の圍を右と左に斬断け或の蹴剣を突飛し宛ら獅子玉の荒たる如くは音遊手は振まひし辛くも我家を脱出し上野の山へと逃入つ山王山の樹間を匿れて悉く間もなく追來る捕手は再び捜し當られ御用くつと閃かす十手の下をかい潜りて逃るゝ丈の一生態命無門として韋駄天走り逃んと焦れと茲にも亦捕手の人数充満て進退谷る一期の浮沈同所袴腰の際に追詰られさしもは猛き惡黨の勢ひ窮まり力盡く終に縛え就たりける（長次が袴腰よて捕縛れしとい當時大評判の談話よして今猶都人の口碑に傳へ且へ眼前見たる人もあるあるべし）斯て長次の吟味中傳馬町なる幕府の牽獄に繋がれ數日拷問の嚴き故に遁るゝ道奇く云々と罪の次第を綻落もかく逃一白状及びしかば彌竊盜人殺の科に依り獄門の刑に處せられて小塚原の刑場へ三日の間鼻首され且其同類等も悉く縛え就き犯せし罪の輕重に依て或の流罪又の追放管杖等も夫々處刑せられしがお辨のみは彼の折は逃去たるまゝ其筋よて嚴く探索せらるれと絶て所在を知よしあく特り網天を逃れ居たるも未だ惡魁の盡ざるあるべし

第三章

木枯の削て細き月夜哉。芒花尾を霜枯て音あふ音の響々と樹梢を鳴す小夜風も筑波下の風

寒ら亥中の月の朧げは照す影さへ最暗きと忍ぶ小便りよしわしの離白化の一人の婦人手拭眼深に面部を隠し小袂さりとと端折て配る心も跡や先小塚原ある刑場へ歩みくつて悉く寄り竊に四邊を窺へバ獄門盡の首を守る乞丐人の甲夜の濁酒は酔たるものか高鼻息寐人し織子よ造化精妙と點頭ながら拔足し足親ひ寄つゝ獄門盡みやとら手を掛け長次の首を辛くと下を取わろし兼て準備の小風呂敷は確平と包て引抱へ立去んとあす折しを最前よりして小蔭に佇立み始終の様子を窺ひ居たる忍打扮の一個の若者今こ乃女が長次の首を抱て去んとするを見て急ぎ小蔭と走り出で物をも言す怪しみの女の袖を捕へて引戻す男の手先を振擲ひ行かんとするを筒も附入る忍打扮の男女二個挑み争ふ其折しも月の雲間を掩はれて闇の黒白あしめやあくも足場を計て此彼齊く透し眺めつ進み寄り争ふ二個の物音を聞附たりけん傍の小屋は熟睡あしたる首番の乞食の怒ち目を覺志首盗人めと聲掛て六尺棒を取直し二個が中へ割て入り滅多擲りよ進立る此時千住の方よりして爰へ來掛る一人の武士何事あらんと三人が探りながら挑みあふその中央へ衝と入て袖に隠せし小田原提灯差出す灯影を見合す顔。ヤ、貴郎の。オ、足下。南無三大事と逸足出逃出す婦人の後より件の武士の大喝一聲待てと呼掛け刃の柄は掛る手先の提灯を乞食が差出す棒の先は打拂はれてバつた



りと灯の消て以前の暗その間婦人の己が身も犯せし悪事の暗まぎれ迅くも姿を隠したる跡は残りし壯丁の續いて逐んと踏み出す足も障りし風呂敷包み拾ひ上れば怪しの女が盗み去らんと構へたる長次は首を相違おければ天の與と心も笑み其儘小脇をひッ抱ゆ南を指て馳去る跡夫やつていと念食へ再び六尺棒を閃か玄暗に敵手を見違て以前の武士は撃てかゝるをエー面倒ちと刀の望打乞食は其場へ蜻蛉がへりて匍匐伏すを見向をやらす塵打ち拂つて件の武士は何が思接の体もそこへ足へ迅めて是も亦南を投てど立去りける單表紀伊國屋宇右衛門の約束の如く娘お豊を紀州家より暇を取り衣裳調度を整へて岩上勘十郎方へ養女を遣ひし又松崎喜三郎方より濱太郎の宇太郎を改めて引取つ播磨屋より暇を取せて自宅に置き商用を習いせ喜三郎の又娘お濱を我家へ呼迎へ三家各自實子を得るあり或は養女を娶ひしより其中至て陸しく送し親戚の縁を結びて隔意なく交らひまが宇太郎の悪人ながら大恩受し小天狗長次が此程死刑に處せられて小塚原へ鼻首しと聞き責てり其首ありと葬りて修羅の苦患を安からしめん親も隠して只一人或夜に紛れて膽太くも同所へ赴き長次の首を取隠さんとしてけるは我より先一個の女が忍術つゝ其首を盗み去んとする体は驚きあがらぬ猶像のあらす取戻さんと挑む折から誰とこまらず一人の武士が携へ來りし提灯

の光と思はず見換す顔と互に認知る女のお辨又武士の思ひさや岩上勘十郎までありしかば是の什麼と躊躇ふ間も灯の消て以前の暗物分れして立去る折圖らず得たる長次の首天の與へと携へて迅くも家へ戻りしが父母の左もあれ岩上は認められし其儘に置んは却て悪かりならんと翌朝人知れず長次の首を携へて岩上方へ訪れゆき昨夜の始末を話せしは岩上も頻に點頭さす吾儕も昨夜朋友の甲乙は誘引れ千住の妓樓へ赴きしが早や聲を迎へる妙齡の養女を持てる身を以て如何に交際さればとて妻子の手前も面目なしと程よく座敷を切上て小塚原へとかゝる騒動演劇めきたる暗闘の其相伴は加へられ圖らず認めし其許とお辨如何なる故とも知らざれど當の仇とお辨奴を刀の錆と思ふ間も暗に黒白あしあやなくも物分れして今も猶合點ゆかねば輕忽しくまだ妻子も口外せず然るは今おん身より昨夜の様子から意中を聞き疑團囷は氷解せり悪人なれと思あり義ある長次の首を葬り得させんとし適晴見上し御心度吾儕を共々施主となりて厚く埋葬得さすべし又按ずるはお辨が昨夜彼處に在しは彼も亦毒婦ながら所夫の首級を取隠さんとの心庭なるべし果して然らば埋葬せんと思ひし首級の其妻の手に入らず却て他人の手へ渡り我等の供養を受ると云ふ宿世故ある事あるべしと打語らひつ夫等の用意を相談して長次の首を携へつ程遠からぬ回向院に至り住持よ



逢て仔細を語り併養料を寄附あして厚く法會を営みしとなん怨りし後は三家とも喜ぶ事の  
 み打續きて夥多の星霜を経過しつ爰も三歳の春秋を送り迎へて文久三年亥の三月となりた  
 りしが當時幕府の政權衰へ諸藩皆きて従はず世の中何となく騒立て從來江戸郎は住まべき  
 諸侯の大方簾中を國許在留勝手たるべき旨の令出しより諸侯各々自由を得て領地へ起く者  
 多く既も紀州家もても藤中始めお附の女中一同も本國紀州へ下向せずも同家一手もて業  
 を營み居たる紀伊國屋宇右衛門の我生古郷と云ひ親戚等をゆるとゆゑ衰微を來せし江戸よ  
 居らんより領主と共に歸國せば又よきともあらんかど盡ぬ殘名の岩上始め松崎等の人々よ  
 惜り袂を分ちつゝやがて江戸を引拂ひ紀州路さして下りたり是より先岩上ハ宇右衛門の娘  
 お豊をバお濱の跡へ養女又貰ひしが流石大諸侯の輿勤をしたる程わりて行義正く婦女の業  
 一通の心得居り心狀さへ正しく勘十郎夫婦も能く仕へ殊も器標を美しけれバ夫婦のいと  
 愛くしみ其翌年(文久二年)と知るべし)或人の媒介にて本丸詰のお坊主補沼兼齋の二男和三  
 郎といへるを養子よ貰ひお豊を之よ娶ひせて家督相續の願も濟しが和三郎も亦温順よし  
 て出ての奉職も怠るなく入ての養父母も孝を尽し夫婦中のいふをさもあり家内能く和合し  
 て樂き光陰をおくるうち滿れば欠る世の習ひ勘十郎の妻お花ハ其年の暮よりして風邪のこ

ちど打臥せしまゝ次第も重りて療養の其甲斐もあらず翌年の花咲く春をまたずして果敢  
 なく散し木枯の霜とさえよし一家の愁嘆倍あるべきよあらざればなみだを手向の水として  
 形のみとくも野邊おくりの式を濟せて七日ノ乃追善供養も小田環の廻れば早き一周年忌  
 昨日とすぎし元治元年霜月中旬勘十郎の駿府の城代何某の属員も充られ同地へ出張すべ  
 き旨幕府の命を蒙りて同地へ出張を命ぜられ急ぎ江戸を出發し其日の戸塚驛も宿をもと  
 めその翌晩の小田原驛へ着し同所の旅店伊勢屋傳兵衛方も投宿せしが旅の疲勞を慰さめん  
 と草臥足を踏延し下婢も吩咐け按摩を呼しよ間をあく廊下の障子を明け入來る一個の女按  
 摩召ましたの此方でムリますかと云聲聞て勘十郎耳も覺えの聲音かると行燈片手も引寄て  
 つらく顔を見てわれバ箇をも什麼先つ年紅梅ありと偽りて我家も來りし長次の女房亦  
 彼毒婦お辨おられ且呆れ且驚き。汝ハ惡婦お辨おられずや好や眼を失ふとも勘十郎とい聲言  
 てもも知りたるあらんと聲掛られ流石のお辨も愕然として逃出す裾を無手と押へ。待てど  
 ばかりよ引留られ遁れぬ處と度胸を据へ。お免しおされて下さりませと跡言さして口籠る  
 猛く見えても女丈面目おみだ堰上るお辨の様子を勘十郎尚よく見れば面瘦て身も襦袢の  
 衣を纏ひ兩眼ともよ腫潰れて見る影もなき零落の体も哀を催し言葉を和らげ。ヤヨお辨察



する所汝の未だ重なる悪事の止すして假し盲目と見せ掛て按摩し打扮し旅客の財を掠むる  
 深き較計か爾亦くは多年積悪の冥罰忽ち廻り来て兩眼とも明を失ひ爰等邊る徘徊する聲  
 女とまで零落しか今更隠すの要なきと懺悔の爲め始終の機子を疾々語り聞せよと問掛られ  
 てや、しべし差俯きて居たりしが僅計り頭を擡げ。今更申上るも何とやら身の非を飾るよ  
 似たれども先一通り卑妾の云ふ事お聞あされて下さりませと云つゝ涙を押拭ひ。女達は大  
 膽者紅梅りと偽りて貴君を欺さお濱さんを勾引せしとの早くも顯れぬ松崎始め人々も掛合  
 込れて退引ならず後の祟と恐るゝまゝ不人情をも良人を捨て寒口より逃延て通り掛りし三  
 味線堀不圖貴君を見咎られ危き虎口を逃れて後、或方又身を躲し様子を探れば良人長次と  
 死刑に處せられ其首と小塚原へ鼻されしと聞き責ての夫を取隠し葬り得させんと或夜、紛  
 れ忍び寄れる折も折時を時とて再び亦貴君と廻り合したので空しくその場を逃去しが假令首  
 の取得すとも悪人ながら正しき本夫争で後世をば用らんと思ふも付ての此身も亦良人よ  
 齊き強悪の心を爰等で改めずば重き處刑もあるのみか後世の苦患も恐ろまを俄に起る菩提  
 心我身ながら爰想が尽いつと死だが優あらめと先非を悔淵川へ身を投しを幾度か未だ罪の  
 消ざるよや生憎も死後れ生耻さらして惜からぬ命を繋ぎ昨日今日爾バ尼も姿を換へ佛も仕

へ亡入の追善回向を營まんと思ひしとも書餅とあり年來作り玄悪の報か去年の暮より眼を  
 煩ひ御覽の通りの盲目とあり此世がらある黒闇地獄の按摩とまで落魄果て漸く存生てをり  
 ますると眞實面も現れれて訴ふるといと切なり勘十郎の始終の様子を聞く事毎々歎息し既  
 ゝ前も云る如く才智も乏く義も敏く決断早きものかれバ先送は懲りまた茲も鈍くもた  
 辨の舌頭は喘着されて哀を催し金五兩を紙に捻り向後の心を改めて必ず善を歸すべき旨懇  
 切に説諭し其場はそのまゝ退かせ獨り枕を就たりしが翌日は是非とも箱根の險を越る旅路  
 を抱し身あれバ鳥の聲ともろとも忙て、起出で下婢を促し朝餉を濟せて支度そこゝ草  
 鞋の紐も結びあへず未明を冒して旅立たり此夜同家へ宿泊せしまだ年若き一個の武士あり  
 是を行方を急とよや勘十郎が發足せし間もあく續いで起出で出立の準備などして不圖心付  
 き傍を見れば箇の什麼巾團の下に入置たる二十餘金が胴巻のまゝ紛失させし其跡は紹色地  
 抱拍の紋を高袴繪したる一個の印籠の落てあり後の證據と拾取り手を打鳴して下婢を  
 呼寄せ旅費紛失の由を語りける同家にて他より賊の入を体なをければ儲け胡塵の蠅が  
 旅人よ打扮ち紛込だ疑ひなしまだ未明よして發足せし客一人よ過されバ詮議なすよも  
 便よま合宿の旅客を一人残さず旅籠屋の規則も照して取調し疑はしき者は更もあし件



の武士の彼印籠を宿主も示して云るやう斯る品は我坐場も落て在しを一つの不思議が手懸のあらすやと訝かり問を一人の下婢が此印籠も見覺のあげれと先刻お立なつた武家様が衣服の御紋所を是と同じ抱柏と云ふ尾も付て又一人が昨夜の御様子でいお早立の様でもさかつた今朝おあつてから忙だしくお立おなつたを怪いと一人が云へ三人五人果の一同岩上も疑ひかゝる無實の難義件の武士の斯と聞より我も函嶺を起す者おれば是より跡を逐止め事の實否を糺し吳んと急ぎ旅宿を立出つ足を速めて逐たりける勘十郎のかゝるべしとの神あらぬ身の争でか知るべき箱根の根方より來りし頃夜の漸くも明たれば暫し足を休めんと杉の株も腰打掛け火打袋を取出し煙草吸付け憩ひ居たる折しも跡より息せきと逐掛來りし以前の武士勘十郎の衣類の紋を驚と見辨し進み寄。不昧ながら貴殿の昨夜小田原驛の伊勢屋へ宿泊されし客人かと問れて岩上心の中も稀有ある事を問るゝをのかきと思ひながら爾わらぬ体よて。如何も拙者の尋の如く昨夜伊勢屋へ泊りし者。然らば此品お覺わらんと眼前へ突出す件の印籠勘十郎の熟々見て。箇は拙者が所持の品よて思ひ出せば先づ年千住宿より戻道怪しき曲漢を捉んと暗に挑みし其砌取落したる品あるよ何して此が貴殿の手よと腕又いて問返せば此方の聞つゝ冷笑ひ。千住邊で落せし品が昨夜拙者の枕邊よ

落て居よう等いあし詞を設けて其身の罪を言嘯んとせらるゝより正しく此印籠が貴殿の所有とあるから拙者が所持の胴巻とお交換いたすべし物數言ぬの武士の情サ一尋常ふた明しあれと詞説とく詰寄たり勘十郎の件の武士の詞を聞より面色變へ。箇の奇怪ある問状か拙者も於て覺あき貴殿の所持の胴巻と此印籠と取代んどの旁々以て合點行すと云せもあへず件の武士冷み笑ひつ進寄り。今更知らずと云るゝを昨夜伊勢屋の宿よて紛失おしたる胴巻の跡も残りし此印籠疑惑かゝる證據の一品又貴殿が今朝も限り星を戴を忙だしく發足されしも不審し去るを左も右も陳せらるゝは武士も似合ぬ卑怯千万。ヤア言して置れば喋嘯と身も覺あき賊呼り先年失ふたる我が印籠を不思議も所持おす貴殿こそ正しく怪しと思ふあるよ其實否さへ糺もせで人を賊と呼ひるの言すと知れし杜騙の較計。杜騙呼り聞く耳待たぬ拙者の私用の道中なれを伊豫守和島の藩主たる松平右京大夫の藩士淺香豐之丞と云る者（該豊之丞と云るは先年お辨と結婚の相談整ひたる者よて委細の該話説の始を参照すべし）武士の情も物數言す事穩便も扱へんと思ふ所存を反古とあし其身も罪を逃れんため言を設けし理を非も曲け却て拙者を騙賊と罵り飽まで知らぬと言張からの最早勘辨あり



斬んと油断なき双士の身構劣らず優ずイザと計り双方一度はすらりく引抜く白刃一進一退死生の前勝負を争ふ武士の意地咄嗟僅細の間違よりして世も稀なる益良雄の一個の爰は撃るゝか或の果して傷つくべく實は危く見えたる折から傍は茂る熊笹の藪の中は苦と一聲叫ぶ女の泣音は合點ゆかずと兩人の刃を引て猶豫たり

第四章

復説問もなく熊笹を右と左に押分て轉び出たる一個の女是れなん則ちお辨あり勘十郎の斯と見るより詞忙しく聲を掛。誰かと思へばお辨あらずや昨夜圖らず邂逅せし折身の非を悔て罪の次第を懺悔なしたる回果話盲目とありしと云たるは今將た見れば兩眼とも明かなるは何故ぞ夫さへ疑ひの第一あるは我々二人が武士の意地を立抜く白刃の中果合の折は臨み自殺せし何事ぞ故こそあらぬ如何ぞやと詰り問は豊之丞もお辨の姿をつくく見遣り。今岩上氏が此ある婦人をお辨と呼れしは心付き眼と注めて能く見れば姿こそ變りたれ誠よかん身の同藩ある杉浦左膳殿の御息女あらずや絶て久しき不思議の再會先年不義を働きて我は耻辱を興へたる淫奔の果は顔面あめくくと吹き荒るゝ仇し野末の業晒し如何ぞ

る故の自殺あるか知る由絶てあさむのから武士の意氣地も命の遺取生死を争ふ此場は出て由なき邪魔立其處退かずやと云ふ尾は付て岩上を。其辭が自殺は願末の聞とあらば後よて聞んイザ尋常よと再び亦た白刃を翳して立向へば云よや及ぶと豊之丞を同じく刃を取直し斬結びたる白刃の雷光閃く下は轉び出でたるお辨の我身を楯として暫らく待れよ云ふ事あり开もか二人が争論の基とありぬる胸巻と紛失せし印籠の其の行道と卑妾が能く存知て在ますると計よては合點行まじ焦立つ心を白刃と共に納めて卑妾が云事をお聞あされてくださりませ昨夜圖らず伊勢屋よて岩上様お目も懸り盲目と見せ掛け是迄の悪事を後悔しましたと懺悔話の口から出任せ其場の首尾よく欺きしが生て置ては後日の氣懸殺して仇を報んと夜道を懸て此所よ來り待伏なして居たる處思ひさや先の年親と親とが号婚せし豊之丞どのが岩上様を逐駈來りて争論の末果試合となりたるを良人としらず旅居よて其胸巻を奪ひし時怨恨重なる岩上様は執念く崇て脚を途んといつぞや千住の處刑場よて挑み合たる其折ふ拾ひ取りたる印籠を故意と跡は捨置たるより互は怪しき白徒と誤り認めて勝負を及小訴ふ果試合卑妾一人の曲りたる心よりして斯まで夥多の人を難義を掛け今更何とを面目かく責てその辨解は自殺なしてお詫かせば二人共は緇團をお晴しなされて下さり



ませと語るも苦しみ息詰り次第は細る段末魔再び豊之丞は打對ひ。云ふべき事も早や盡たれバ此上の罪亡しの爲め貴郎の手は掛け殺してと悪く強き善きも強く人の將死なんとする其言や善し勘十郎と豊之丞の爰に至りて疑團も解け怨恨も晴て豊之丞の涙ながら涙振上る晃く月の光と共に辨の首を打落し傍の土を鏝穿ちて其の死骸を葬じり得させ爰より二人連立て西を差て途次爾來親しく交ひるべき由話し連て程も亦く駿河の府中へ到着し尙所要なきはあらねど勘十郎の私しならね公用を抱し旅されバ同所札の辻まで豊之丞と後を契りて右左惜き袂を分ちけり不題松崎喜三郎が出入邸ある酒井左衛門尉の藩中へ曾根野和木夫と呼ぶ擊劍の師範役あり喜三郎の娘は濱の世は優れたる眉目姿は深く懸想せしものから彼が父喜三郎の町人ながらも心正く妾は所望なせばとて容易承諾べきをあらすと忽ち一つの手段を案じ或日使を以て松崎方へ云越やう明日常家へ來容ありて酒の宴を開くされバ右の給仕は此方の娘は濱殿を一日間借用したしとありければ喜三郎の豫てより恩義を蒙る出入邸の師範役ある曾根野の事ゆゑ問違もあるまじと請ふ任せて娘は濱を曾根野方へ遣せしは翌日よされども返來ず案じ詫て喜三郎の自ら曾根野方へ至り給仕の御用濟し上の何卒娘をお返しあるよう迎かたしと懇願せりと云入たるは一人の門人頼ての事は出来りお濱は

の未だ用事あれバ二三日の返難し然も強て連歸たくは先達手用立遣したる百二十金を只た今持参せよと先生のね言葉ありと言捨て突と奥へ入たるまゝ取合ふ人をあらざれば借財ある身力あく胸を擦りて我家へ歸り金の工面は掛りたれと男を賣る身は交際多く爰は花會彼處の達引と随つて物入嵩み手元不如意の折なれば漸くよして七八十金を整へたれと猶四五十兩の不足あれバ日頃親く交際する二つ旋毛の三五郎方へ至り金の工夫を頼みしは勇肌

の三五郎の切齒をききて口惜り從來人へ頭を下げ頼んだことなねへ親分が私ち等の所へ迄無心よ來るといふ休ねへ素寒貧の私をれど何よか都合しやせうと快よく約束せし此日の黄昏過されバ翌日を契て別れけり翌朝三五郎の出入店の印を附たる革羽織を携へ置附の典舖へ赴き是で五十兩貸て呉ると數から棒の難題は番頭は呆れ返りモシ頭イヤサ三五郎さん

れ前の氣でも狂たか此革羽織のいつも三兩附か附ぬは五十兩とい飛でもねへ夫も流し廻つて居るアノ品の利上をせずと云せをわへず三五郎頰膨して顔赤らめし此唐變木朝ツぱらから利島の催促を聞よ來ヤアッねへ假令此革羽織が二朱か一貫の品よもせよ此神田で屈指のお店の印は眼が付ぬか己の身は取た日よやア命も代難へ大切の品ゆゑ流しねへ愚圖く言すと五十兩貸か貸ぬか元天頭確平挨拶しやアがれと眼血走り鬚逆立ち義勇み



立つ一本氣否と云ハ擧兼まじき權幕ノ何事やらんと典舖の主人此場よ出て譯を聞さ爾云ふ譯の人費なら如何よを貸て進ませうと五十兩を渡せしかバ三五郎ハ禮もそま〜喜ひ勇て店外へ立出て直ハ松崎方へ至て右の金を喜三郎ヨ手渡し吻と一息吐たりける却て説く喜三郎の娘お濱ハ曾根野方へ抑留されて和太夫ハ是非とも心よ從へと威つ賺つ搦口説れ娘心の空しく如何のせんと進方よ暮れ此儘よして在たらんハ早晚和太夫の手込よ逢ハ肌身を穢す事もありあん斯る苦患を受んより寧ろ死だが増ならめと思ふ心を押隠し陽面よ納得せしと見せ掛け値少の間を窺つて死ねと覺悟を極めたる身よ降かゝる災難の始終を委しく手紙よ認め誰を頼みて此手紙を父が許へ届んと思ふ折から恰も好し酒屋の丁稚が今日の御用ハ如何と臺所よ聞よ來りし其顔を見ればお濱の隣町ある酒屋の丁稚長吉よて僅神田橋一ツを隔しとゆゑ餘其顔を見覺居れば是幸ひと其手紙の届方を頼みしハ小供心の思慮をあくお濱の手紙を懐中し應て答て去ける是日ハ此松崎喜三郎が金策よ奔走し三五郎が草羽織を携へて質舖へ至たる同日同刻と知たまへ備も曾根野和太夫ハお濱が心よ從ふと云ふ色よ返詞を聞からよ今夜を千代の初枕嬉しき夢を結ばんと酒宴の準備を整へつ日來氣よ入の門弟等甲乙を集めお濱ハ酌を取せんと幽閉置たる一室よ至り見ればお濱ハ影だよ見えお借ハ

吾儕よ油斷させ逃去たるかと大よ焦立ち足摺なして悔也を今更其詮あきものから責でもの心遣よ是から吉原へ浮込みお濱よ似たる娼妓でも買て愉快を盡すべしと酔よ任する自狂遊門弟二人を引伴て四手駕の三枚肩酒代よ羽を生乏つ、宙を飛せて大急ぎ吉原投て行く空の俄よ曇る雨催夜ハはや初更半輪の月を雲間よ掩ハれつ黒白を分ぬ闇夜を冒して松崎喜三郎ハ只一人漸くよして整へし金携へて曾根野方へお濱を迎よ出向途中モシ親分と後より呼掛られて振顧り見れば丁稚の長吉あり何用あるかと問を待すお濱さんから此手紙をお前の處へ届て呉と先刻曾根野様のね郎から頼れて來ましたと渡すを遲と受取て封白とく〜讀下せば自害するとの遺書よ驚愕せしが待しバハ斯手後よなる上ハ急の要なし三五郎とも相談あして此怨やハか晴さで置きかど血走る眼よ遺憾の涙拭ハを敢す三五郎方へ尋行しが同人ハ獨身者ゆゑ門を鎖し何處へ行しや出先しれねバ空く我家よ立歸り腕又いて案ハ煩ふ折柄本所北割下水なる岩上方より火急の使忙だしげよ門を叩きて差出す手紙と受取り思ふ機斯る折よ勘十郎殿が在からバ相談敵手よもあらんもの今は駿府よ在勤の留守を預る御殿より火急の使必許なしと封目とく〜讀下せば豫て聞及をいらはんが豫て毛利家幕政よ抗し謀反の兆を顯せしよ付き這回長州征伐として將軍御進發の供奉を命ぜられ拙者の素よ



り目下駿府に在勤中ある養父勘十郎も其列に加られたり是尋常の旅に非ず生死の程を定め  
 ちき軍の發途あるをかれは愚妻豊事拙者戰死の跡にて彼是難義致さる様豫め用意致置  
 度いへども豊が實家紀伊國屋宇右衛門の其許も御案内の通先般家族を纏め本國紀州表へ  
 退轉致候事故如何致さんと途方暮折から今朝紀州表より急飛脚参り其許多年お養育被  
 下は宇太郎殿より父宇右衛門事急病罹り目下危篤追り責て息ある内娘豊は今一度面  
 會致度旨申出間此飛脚同道發足爲致吳は機申來りい付是幸ひひと存じ妻豊の右の飛脚  
 は相托し今朝出立爲致拙者も生て歸らんと覺束なき發足はらへ御告別旁々參上可致  
 處明朝急場の發足故其義を克せず先右御報知迄如此以上と讀了て喜三郎の書面  
 を見詰て歎息し有異轉變の世の中乃習慣とい云へ拾たる濱太郎の事よりして交際深く結び  
 たる紀伊國屋宇右衛門殿の先般紀州へ退轉れ拾れし濱の上は依り義親厚岩上氏  
 の父子諸共死生も知れぬ今度軍の發足我の父母亦く兄弟亦く妻を世を早ふして杖を頼み柱  
 と思ひし親一人子一人なる娘お濱の悲さかな曾根野が非道の故に依り自殺なして相果たり  
 我身一つは愛事の積々し年の數人問僅五十の上を二年迄生延たる上からの死でも不足の  
 い年あり斯く覺期を爲たるから誰にも相談せず及ばず潔く曾根野方へ斬込娘の仇の

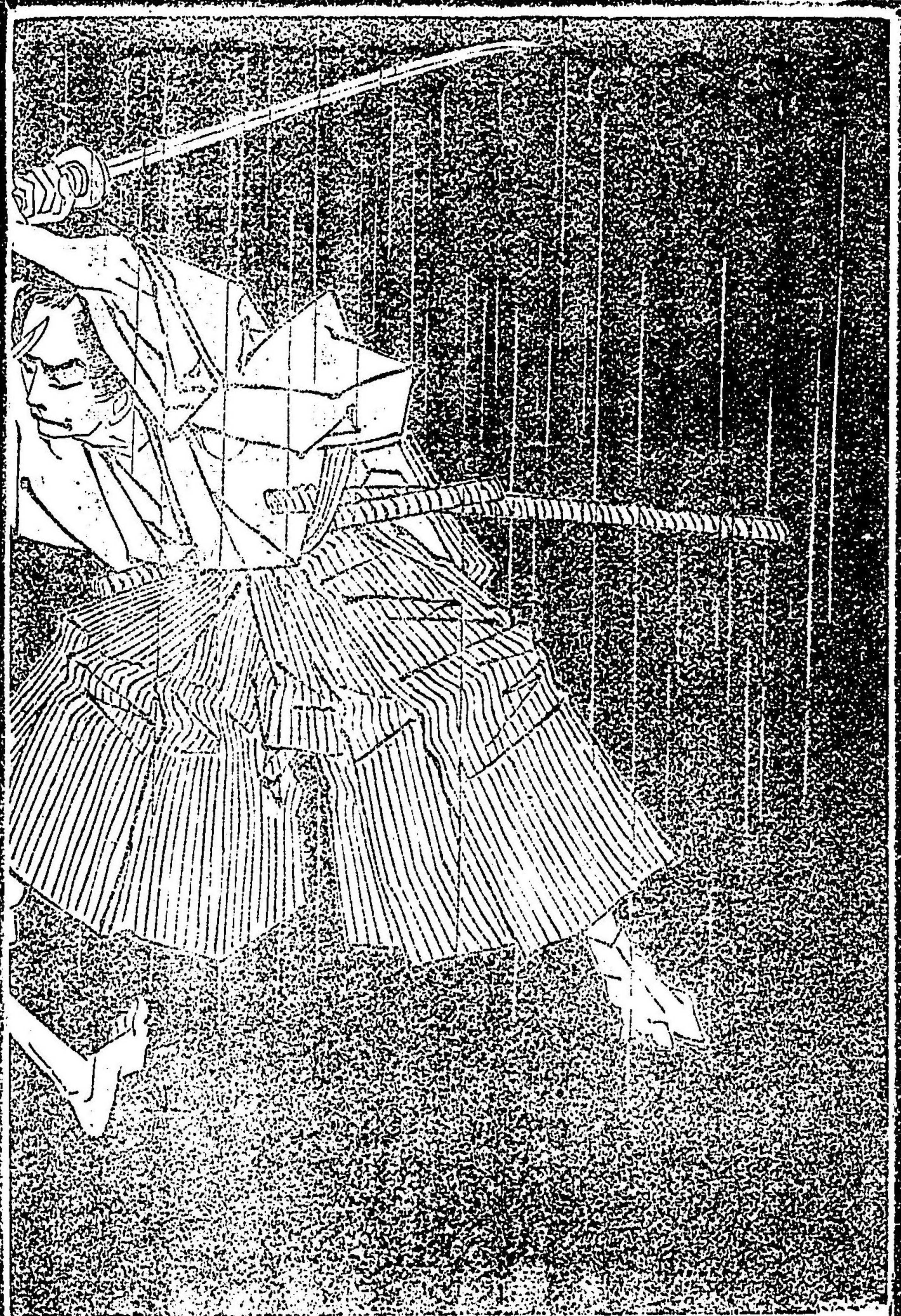
奴原を片ツ端から切倒し我を其場で相果せん爾じやくと獨り黙頭豫て用意の長差脇閃と  
 抜て臺所の草履を以て怨刀を合せ身滾束して立出んとする折から入來る二人の乾兒喜三郎  
 の右左も動乎と坐して此彼同音く。モ、親分何かの様子残らず聞た命を的の今夜の建引足  
 手纏もあるかいらねえ斯いふ時は死さるやア親分乾兒の甲斐がねへ何ぞ同伴も連れて行  
 き助太刀させてくんあせへト云を見顧り喜三郎。誰かと思へば長次も半六俱も行うと云て  
 呉るに己の身も取り難有へが夫よりか跡も残りて切刻まきた己の骨を拾つて呉ると云を押  
 止め長次半六。そりやア親分水臭へ百人餘の乾兒の中でも私ち等二人は博奕場の喧嘩の纏  
 り人を殺さ疾くは首の飛ぶ處を親分のお蔭で今日が日まで生延らへた此身体其親分の生死  
 の境をんで他は見居居られ生るも死るも共よせんと思ふ心を疑つて骨を拾つて葬る役  
 腰拔野郎の意氣地のねへ他の乾分も吩咐せへ私ち等二人は邪が非でも伴て行ぬと云る、  
 からの親分より真魁け曾根野方へ斬込で其血祭もまつて見せると止ても止らぬ二人の舉動  
 理も疎くとを議の一字も勇み立つ、面相變へ駈出んとする裾を提へて喜三郎の聲振立て夫  
 程迄も思ふあら決して止めいせぬ程に必ず身性の舉動す。オ、台點だと勇み立つ二人  
 を連て一目散酒井の邸内へと走行ける心頻りも焦立を有繫は老功の喜三郎血氣も早る二人



を制し敵手の名を負ふ武士と云ひ殊に撃劍の達人にて師範役さへ勤る者ゆゑ容易に勝負の挑み難しと故意落付き何氣なき体も管待し曾根野方の臺所より訪れて昨日お約束致したる拜借金返償の爲め調達いたきて持参せり此段宜く先生へお執次下されたしと申し入し且同家よての先刻和太夫が吉原へ赴きし後集り居たる門弟等も夫々自宅へ戻るもあり又はお濱の行衛を探せと吩咐られて思ひくも出行たる跡をれば若黨一人留守せしのみ今喜三郎の口上を聞開の折角のお入來をれと主人の今夜知己の誰彼も誘ひれて吉原へ今の程遊興も趣き家よて在らず明朝あらで歸るまじ尤も門限厳ければ夜の明ぬ間も戻るあらんと告る様子の偽りとも思われぬが喜三郎の戸外へ出て長次半六も打對ひ此まで事を起さんより吉原こそ我々が喧嘩の場所よは最屈竟いと面白くくと密語合つ手等を謀し折しを降出す雨を衝き風を胃て踵を旋し吉原投て急ぎ行く恠で喜三郎等三人の程なく吉原へ到着し豫て知己の地廻の破落戸も頼みて夫どはなしに曾根野等を捜させまは角海老樓も登居て今愉快の真最中歸り確乎も明六刻前と聞て三人喜び勇み爾は左せよ右せよと花街を出て大音寺前の便宜の所へ潜伏せし曾根野の歸を今や遅しと各自腹も手挾たる長脇差の鯉口省け裏と表の目釘を濡し來れや應と待掛たり斯ることのあるべしとい神ならぬ身の和太夫の知る由絶て

あか／＼よまだ覺やらぬ移り香の夕邊の酔と駕も揺動れて二人の門弟と共に三枚肩の急ぎ駕籠突く如く降る雨も泥濘ま道を踏こなるなと駕丁們的警め合ひ送る聲を掛合てさしかりたる大音寺前待ち設けたる喜三郎等の二人の乾兒と手等を合せ三人三所に立分れ駕も付したる提灯の印の儘も和太夫と走り寄つ引抜く白刀提灯ばかり斬落せパツリヤ道割し物取よと臆病末練の駕丁們的駕を其まゝ地も卸し跡をを見ず雲霞逃る奴們も用いぬ敵手の曾根野和太夫子弟駕を出よと罵つたり。其聲音こそ覺ある松崎喜三郎よのわらずやと言ゆゑ垂を刎上て駕より出る曾根野和太夫喜三郎の斯と見るより。娘の仇覺悟せよと大喝一聲斬込む刀先心得たりと大刀の柄も手を掛け振んとする和太夫が右の腕を二寸餘微りたり長次半六兩人の曾根野が二個の門弟も渡り合つ丁々發失と斬結びたる奮撃突戦に數ヶ所の重疵を負ひ遂に斬死したりける曾根野の門弟兩人も同じく數ヶ所の疵を負ひ枕を並べて斃れよけり残るの喜三郎と和太夫二人彼の名も負ふ撃劍家此の江戸の花と呼ぶ義を見て勇腕の二代目我流ながらを自然と得たる大刀筋頗る鋭くて互も一步も退かず火花を散して戦ひしが流石和太夫の撃劍の妙奥を得たる達人だけ精心愈々加りて喜三郎の疲勞を催し亂るゝ大刀の下を潜り無念流の微妙の一手巖石崩の諸手突きて左の肩脇貫かれ何ぞ堪らん苦







と一聲叫びをあげ倒るゝ頭上へ落来る刃を腦天と立割れ脆くを愛し撃れけり嗟憫ひべし  
義侠名を遠近に輝かし男の中の男一疋の幟隨院の流を酌むさしを猛き喜三郎も碎て元の  
土塊となりも果ぬる非業の最期葉末の露と消たるの惜みても尙餘あり

第五章

登下和太夫の倒れ伏たる喜三郎の上を踏踏り止命を刺んとする折しを後朝告る明鳥の聲も  
送らぬ花街より早歸の人の足音近付をのから周章狼狽き見咎められて後日の障碍と止命  
を刺す一目散退くも影を潜しけり憚る所は廊の方より雨を冒して一人の男鼻唄うたふて來  
掛りしが昨夕の夢のまだ覺せずや浮付く足は墮きつ倒れんとして踏止まりエー危険へ往來中  
へ何を置くのだと吐きながら打ち見て驚愕ヤ、ヤ、コリヤ人が斬れて居ると思はず跡へ  
飛退り能々見遣て再度びつくりコリヤ是れ親分の喜三郎をエー情ねへコレ親分氣を借も持  
あせへと抱き起しつ雨氷を片手は受て口の中へ注ぎ入つ、呼蘇る喜三郎の腦天を斬れて一  
度絶命せしが今此男は墮かれ脾腹を強く厥られたるが死活の法もや適ひけん云と一聲蘇生  
り幽眼を見開きて。オー三五郎か宜い處で逢た怨重なる和太夫の刀よかゝる非業の最期  
その故の云々なりと昨夜の始末を委しく語り深疵は屈せぬ強氣の喜三郎血走る眼は遺憾の

涙齒を切べり彼方を睨み尙三五郎は打對ひ。日頃の好誼を忘れずの娘と巳と二人の仇讐和  
太夫奴を撃取て修羅の無念を晴してくれ頼むくと云ふ聲も次第に細る虫の息三五郎は聞  
毎々も或の恨み或の驚き胸も張裂く計あると憤然と堪へて聲を勵し。エー親分日來の氣丈  
よも似合ねへ是ばかりの微傷をんなは弱る事アねへ確乎しねへト勵すを耳よを掛す喜三郎  
は落散る刃を逆手は取り自ら咽喉を刺貫き前を伏て死したるの現も勇まき最期なり是より  
先曾根野の邸は押留られて和太夫は挑むる、無体の戀慕を拒ぐ術なく思ひ迫りて死を決し  
既、斯よと覺悟せしお濱の危き難儀を助け救ひ出せし其者を誰なるらんと釋ぬるは曾根野  
方の仲間茂助と云る親爺ありとを該茂助が如何なる故ありてお濱を救ひ出せしと云ふ其身  
の先年子も死れ妻を先立て便るべき親戚とてをあらざれば赤貧宛ら洗ふが如く飢餓も迫り  
て老の愚痴吾妻橋から身をなげてしあんとせしを通りかゝりし喜三郎も助けられ乾兒とな  
して酒井家の折助も住込せされあんとせし玉の緒を繋ぎやりたる陰徳の陽報愛もあらはれ  
てあさけの人の爲あらで娘お濱の急危を救われし事とありたるありかくて茂助のお濱を  
誘ひ首尾よく酒井の邸を脱出で松崎方へ送行し喜三郎の勿論乾兒等を居合せさざり連斯  
る大雨乃夜遠方へ行るゝ筈をあければ大方今小親分も乾兒の衆を歸るであらう私い是でお



暇申す何れ明朝参りますと別を告て茂助のこゝ歸行たる其跡までお濱の獨り思ふやう先刻酒屋の丁稚を照死ぬと覺悟を決めたる始終の様子を多し認め父さん告越た故夫等の事まで察する所岩上方へでを行れまか此身之幸以茂助は救れ無事歸宅したるもの、此結局の如何なるか父さんの嘸やさを心配あして在すらん由あき物思と掛て參らせ今更悔しく思ふありと彼を想ひ此を思ひ安き心を嵐吹く雨風彌々烈しく廣き家只一人更行夜半の鐘の音を屈指見れば早丑満までと暮せど父は素より乾兒等も歸りこそ何か凶事でも有らせぬかと思ひ屈しつゝ一目を睡らす火鉢の傍に坐りしまゝ父の歸を今かくと待つゝ空く待ち明し夜の果敢なく明渡り雨風収まり朝日眼輝く天氣よく晴たれと胸の曇り晴やらす左右する間正午といふありぬ折から外の方噪がしく多くの人の足音して入来る乾兒の先立立つ二つ旋毛の三五郎を見るよりお濱の走り出で宜處へ三五郎さんト云顔つくゝ打詠め三五郎は大驚き。オーお濱さんお前若や幽霊でいねへか何の左もわれ親分の情ねへ事もありやしたと後の方を指さして昇さ込だる喜三郎の死骸をお濱示したるよ一目見より胸潰れ心焦れて詞も出ず喃淺ましの父様よと嘆いや増す愛情の空を骸抱き付胸を断るちすぢの涙左右の袂を絞もわへず岩破と伏て泣沈む憂いハ油ぬ三五郎併居る乾兒も一同喜三郎の

死骸を取圍てお濱の嘆きの道理あるを道理なりと慰めかね頭を低れ齒を切はり親が死でも泣ぬが自慢鬼を恐れぬ荒蕨雄を爰まで至つて酸鼻り我から我身を攻念佛胸急鉦うつゝとを夢とも判ぬ人間は這れぬ實は會者定離かくこそあれと觀念の眼を閉てもいふり落る涙は咽びて泣然たり三五郎の漸くは涙を拂ひてお濱に對ひ。お前ハ昨夕曾根野方まで自害したと聞たるまどうして無事で居るとだか何を蚊を滅茶まきり何だか藤張分らねへお前が死だぞ云ふ事より親分が事を起し其仇を報ひんとして却て仇は返討とあり情ねへ事もありやしたが折よく私チが朝歸は通り合せて最期の遺言を委しく聞たが責ても心の遺言の譯を委しく話すた濱も涙ながら曾根野方よ抑留されし事より茂助は救れし事迄を落をあく物語り此身が餘は喘りて由き遺書を送りし計みて父の期する非業の最期箇の如何よせん悲しやと前後不覺に泣立る三五郎の聲ふり立て。今更女々しく泣ばとて死だ親分の蘇生でもなければ後世の爲もなりやアしぬへ外の奴等の左も右も己は是から曾根野の屋敷へ命を的は斬込で親分の仇を討ねばならぬと席を蹴て起上れば併居る乾兒一同口を揃へて。コレ兄哥お前一人やりやアまねへ私ら等も俱々曾根野の邸へ押行と各自奮つて身支度なし思ひくの獲物を取て向ふ鉢巻繩襷三十餘人の江戸奴三五郎を押し頭とあし手筈を定



めて駈出すをお濱の忙て、押し止め心急の道理あれと父さんの死骸を片付た上と半分言せず三五郎。オ、其事も心得た和太夫の首を取た上立派な葬禮を出す積だお前の家も落付て已等が今の間に仇の生首を提げて歸つて来るを待て居あせへと袖振はらつてソレ行と合圖の一聲合點だど鯨波を作りて三河町の往來狭しと一目散神田橋の方へと押出す此時遅く那時迅し彼方よりして駈来る姿も知るも俠客マアマア待たど諸手を上げ駈立つ一同を喰止たる其人を見てわれバ當時賣出の江戸娘宿屋町の大元締彼相摸屋政五郎なり登下政五郎の嘆き立る一同を制し止め己が此場へ出るから喜三郎殿の敵を撃取りお前方の無念も聞るやう屹度婿を明るから此政五郎の顔も免じ此場の一先引て下せへと事を分たる扱ひも食られぬへ慮なれど相政の云事なれば左も右奇麗も預やせうと解も迅き江戸ツ子の氣早さ承知も相政の深く喜び何れ見もわれ喜三郎の死骸を取片付んと形如く葬送を營みまて遠近も名の賣たる喜三郎の事なれば棺送の人敷五百餘人の多きよ及びいと賑しきとなりまると却説相政の三五郎等と謀りお濱の名を以て父喜三郎の讐たる曾根野和太夫を撃果したる旨成規の順序を経て讐討の義を酒井家へ出願せし處同藩もて種々評議の上和太夫の非道を惡み讐討の義の聞届られざるも其罪を糺し本國出羽の庄内は護送り割腹申し付られまるとおん是よ於

てお濱始め三五郎等も僅く怨を復すを得たり斯て後三五郎の喜三郎の死後何くれとあくお濱の世話をも爲居たるが遠さかる者日々疎く夥多の乾兒を離散して喜三郎の跡式を繼べ男子のあらざればお濱の三五郎方へ引取れ仕しき光陰を送るうち襲は三五郎より此等の變事を紀州和歌山なる紀伊國屋方へ報知きたるよ宇太郎より其返書届き父宇右衛門の養生叶い先頃終に死去致し姉豊の岩上方より預り呉との意も任せ私し方よ罷在等の事を始よ認め父喜三郎の變死を悔み私し事之五歳の時より喜三郎殿は御養育の御恩を受たる其報とて孤獨とあられたるお濱殿のお世話致したく早々お濱殿を當方へお遣し相成度云々いと頼母しき文面あれはお濱を仔細を説し當時江戸を嘆しげれば却て田舎こそ心安かれといよく紀州へ遣るとよ一決ま彼お濱の危難を救ひたる茂助をお濱の俱も立せ東海道を下るより道遠くとも木曾街道の方よかるべしと世話もありたる三五郎と尽ぬ名残の袂を分ち年頃日頃住馴し東の都を跡よして紀州さして旅立けるさらぬだも旅の物憂ものあるをお濱の父も死別れ友も離れて漂泊の身の寄邊さへ落漕ぐ繫船の楫を得て頼母しき人の庇も依んと哀れ果敢あき初旅路軟弱さ足も草鞋指道拂取ぬ行路難僅も茂助も筋勞られ山無も揺れて中山道第一の難所と聞えし碓氷峠よかゝる時傍の草叢撥分て現れ出だる一個の曲漢搦丁等



も仲間と見え突然茂助と千伊の谷へ片足揚で蹴落つゝ濱を櫻ふて何處ともなく姿を隠しぬ  
 幕府倒て王政復古明治の聖代とあら玉の年立返る五年の春紀州和歌山ある紀伊國屋宇太郎  
 の父宇右衛門が死去の後其家督と相續して父の名を襲ぎ宇右衛門と改め幾も岩上勘十郎の  
 養女即ち自分乃實姉の豊を其夫和三郎小頼れ我家より引取て後の音信を待といへと岩上父子  
 の當時維新の戦争より興りたれば生死の程も知る由なく絶て音沙汰あられず戦死せしと思  
 ふの外なくい豊の悲嘆の一方あらぬと思ひ弟の宇右衛門が心の鬱憤の夫のみからず松崎喜  
 三郎が變死の後其子の濱を恩返の爲の養育せんと三五郎方へ其趣きを言遣し梨の礫の沙  
 汰もかく時勢と共に推遷る世の有様を思ひ詫び思届しつゝ昨日今日経といへし夥多の星  
 霜を送て爰も明治五年廣瀨縣の令出て和歌山縣に置れしかバ土地稍繁華よ赴きたる機會  
 を謀て商法よ抜目あき宇右衛門の縣廳の前より移轉して呉服店を開きしよ運小叶ひて繁昌し  
 家豊よ富榮へ又同人の早三十路よも近く者から先頃より妻を索れを左右長短しよて相應さ  
 縁をあくまだ無妻なれと酒色い更に顧みず風雅の道よ心を寄せ誹諧を學び發句を善し俳号  
 を孤松堂雪喬と呼たり去程も翌六年六月難波の宗匠蘆の家一舟と云る人紀伊路へ杖を曳し  
 と聞き宇右衛門の好む道ゆへ直に我家よ招待し其人を見てあれは箇いとを什麼松粉細大小

の威儀を姿を脱し頭を圓めて被布を纏ひ風流三昧の粧飾あれを見違もあき岩上勘十郎よて  
 ありければ是の如何よと客も主人を思掛なく絶て久き對面よ問も語も今更に只涙のみ先立  
 ける登下一舟の勘十郎の斯る姿よ成變し身の上話を摘記せんよ去る年伏見戦争の際薩軍の  
 俘虜となり既よ首を刎られべき噺隊長大山格之助よ助られ順逆の理を諭されて心からずも  
 官軍よ降り其先鋒よ加へられしが程あき王政維新となり官途よ就よと大山始め勤る人の多  
 かりしを徳川譜代の恩義もあり且の供よ出戦したる豊和三郎の生死存亡も見定ざるよ我一  
 人官途よ就よ不義不忠の嘲笑を受んも必苦と堅く辭して東京よ出で松崎方を訪れしよ浦島  
 が子の故郷よ歸りし故事の夫ならで家居の元の儘あれを住む人はいつしかよ變果たる有爲  
 轉變様子を問へ喜三郎が不慮の暗喑よ横死を遂しと幻氣よ聞知つ开が娘お濱の上を問へ其  
 人答て云やうお濱殿の父横死の後三五郎よ引取れ問もなく他國の縁者方へ身を寄るとて出  
 立されしが其後の機子を知らずと云ふ爾バと直に三五郎の家を問へ同人の開拓使の御用を  
 請負て組合の誰彼と共に去頃北海道へ出稼したりと聞て忽ち望を失ひすべき方を非されバ  
 漫よ夢の世を觀じ官よも付す農商よも歸せき世を我儘よ送らんと豫て嗜る風雅の道よ入り  
 諸國を行脚る其間よ豊和三郎夫婦の所在又一度我子とせしお濱の安否を探知せんと多年の



念願空から御身等二人は不思議も巡逢ぬる嬉さよと語出たる詞の端よをお豊は頼み懐  
 しく鳥の鳴ぬ日のあるを片時忘れぬ良人の行南不圖發父は逢見ての其喜びの有ながら父  
 さへ知らぬ和三郎の生死存亡如何あらんと哀歎交々胸を廻り堰止ぬへぬ涙の玉碎る思ひ千  
 萬無量ヨ、と計り沈沈び道埋資たるお豊の悲嘆を勘十郎の舟の切は慰め助りつ集散離合  
 の天あり命なり誠心さへも通じあへば再會の時あらずやの然のみ嘆くは要ありしと勵す傍よ  
 り治右衛門を左ふ右を詞を添へ親戚再會の祝宴を開き多年の憂を玉箒拂ふて巡杯を酬つ  
 献へつ別後の情を語つ聞つ喧しき甲一駒乙一駒稍や懐襟を開きけり恚りし程は勘十郎の一  
 舟の猶もお豊と宇右衛門方より預ひき諱和三郎の生死存亡を探るため世を捨し身の心安さ  
 襲がぬ舟の流れは任せ又た國々を僞歴せんと云を宇右衛門の押し止め。襲は御身の口つから  
 離合時ありと云れしはあらずや今更國々を巡らるゝとを時機至らすの草を刈り葎を分て尋  
 ねたまふとを邂逅ふと難かるべし且和三郎との御身と違ひお豊のを我儕方へ委ぬ置  
 れしとあれは遠からず彼方より尋ね來まふと必定ありお心急の道理なれを只いつまでも我  
 家は逗留せられて和三郎の、尋ね來まふを待ちまたへと云れて一舟を道理と黙頭さ其意  
 見え就しかば宇右衛門の父が存生中建築したを隠居所の利休好の數寄家と幸ひ宗匠は住居

よは打て付と爰も一舟を住はせて誹諧宗匠の表札を門口に掲出しければ此道は遊ふ風雅人  
 等遠近より訪れ來ていと安らげく夢の世を送る光陰は關守さく春告鳥の音をびし園の楓を  
 いつとなく又た幾秋を染換て本年の春となるものから和三郎の行衛門更は知れずお豊の  
 歎きの言も更なり勘十郎の舟を焼野の雉子夜の鶴我子の事のみ思ひ屈し思ひ詫ぬる曾の  
 有也無也且夕其事を言出て沈み勝ある心根を慰めばやと或日の事宇右衛門の一舟とお豊の  
 二人は打對ひ此程の殊の外商法の繁多で僅少の暇もあざりしは本年の番頭利兵衛を始  
 め店の者一同能く働いて在升れば年來の骨安めため坂地見物と兼て伊勢參宮を爲んと思  
 へり長谷の觀音の利益尊とく男山八幡宮の子孫長久を守らるゝとか此二柱の神々へも參詣  
 ちして和三郎殿は逢合とを祈るべしと最と面白さうは勸立て各々旅支度を整へて三人連立  
 ち同地を出立道すがら名所舊跡を遊覽しつ須磨明石を経て難波津に至り夫より西京から伊  
 勢へ廻り兩宮へ參拜しての歸途古市の舞踏を見んと同所有名の貸座敷前屋へ登りいと珍  
 しく見物す中思ひきや舞妓の中は一際目立つ美人あり能々見れば箇の如何は松崎喜三郎  
 の娘お濱よて在ければ是の如何よと三人の呆れて詞を出ざりけりお濱も目早く一舟始め此  
 三人を認めんお懐しやと云えよ岩は碎る白糸の瀧をす涙諸共は走寄て面會す不慮の逢瀬よ



岩上始め何して愛もマ無事だと異口同音と問掛るお濱の涙を拭つゝ、父喜三郎が横死の後、宇右衛門殿の故郷なる和歌山へと赴く途中、碓氷峠にて悪漢に出逢ひ、供ある茂助を谷へ蹴落し、此身の遂に勾引されて情用捨を荒勢雄の毒手に落て、情なきや逃る間さへ荒波を船路も揺れて行衛をしらの離れ心も筑紫瀧筑前博多の花街ある柳町の若瀬屋と云ふ八屋へ賣渡され、浮川竹も沈みしが明治五年娼妓解放の令出て漸く自由を得しものから漂泊の身の遺瀬なく、蘇も慕し愛身の苦勞を捨る神あれば助玉へる神風誘ふ伊勢國松坂の商人何某も受出され、此地より來りてマレ嬉やと思ふ間をさく其人の病も罹りて果敢なき最後、又も生計と失ひて果に此古市へ流込み身の耻しき舞踏の手も客の興を添るとも、愛絶ぬ胸の内を察しなされて下さりませと語り盡せし身の履歴三人は顔と顔を見合せ、辛苦左こそと思遣り、歎息の外あかりける、就中勘十郎の一番の尋る聲の和三郎も逢ざるを我子の如く育上たるお濱も邂逅なるとの嬉しくも又憂き宇右衛門と相談して左より右身受せんと云ふ此時、闇の夜を明た、濱の身受の拙者が爲すべしと入來る人、別人からず、勘十郎の養子、和三郎なり、跡も續て入來る、二つ旋毛の三五郎、されば是の如何よと人々の餘の事、驚き呆て暫し詞も出さず、鬼お豊の年頃戀慕し、良人の無事を顔を見て取廻らんと、思しも養父始め人々の手前を憚りよくマアは無事で

と言し、外の嬉涙も、吳竹のふしぎの再會と喜びて言ぬ、云ふ彌増る女の情を、慘らし、开も和三郎と三五郎の兩個が如何よして、此處に來合しかと、其聲を尋る、和三郎は伏見の戦争敗て、後陸奥地方へ脱走し、屢々官軍に抗敵せし、順逆遂に敵する能はず、函館五稜廓の戦争も手庇を受け、同港櫻木町の木柄何某方よ心からずも、滞留し治療も日數を送るうち、翌明治二年三月中旬、至り漸く手庇の愈たりける

第六章

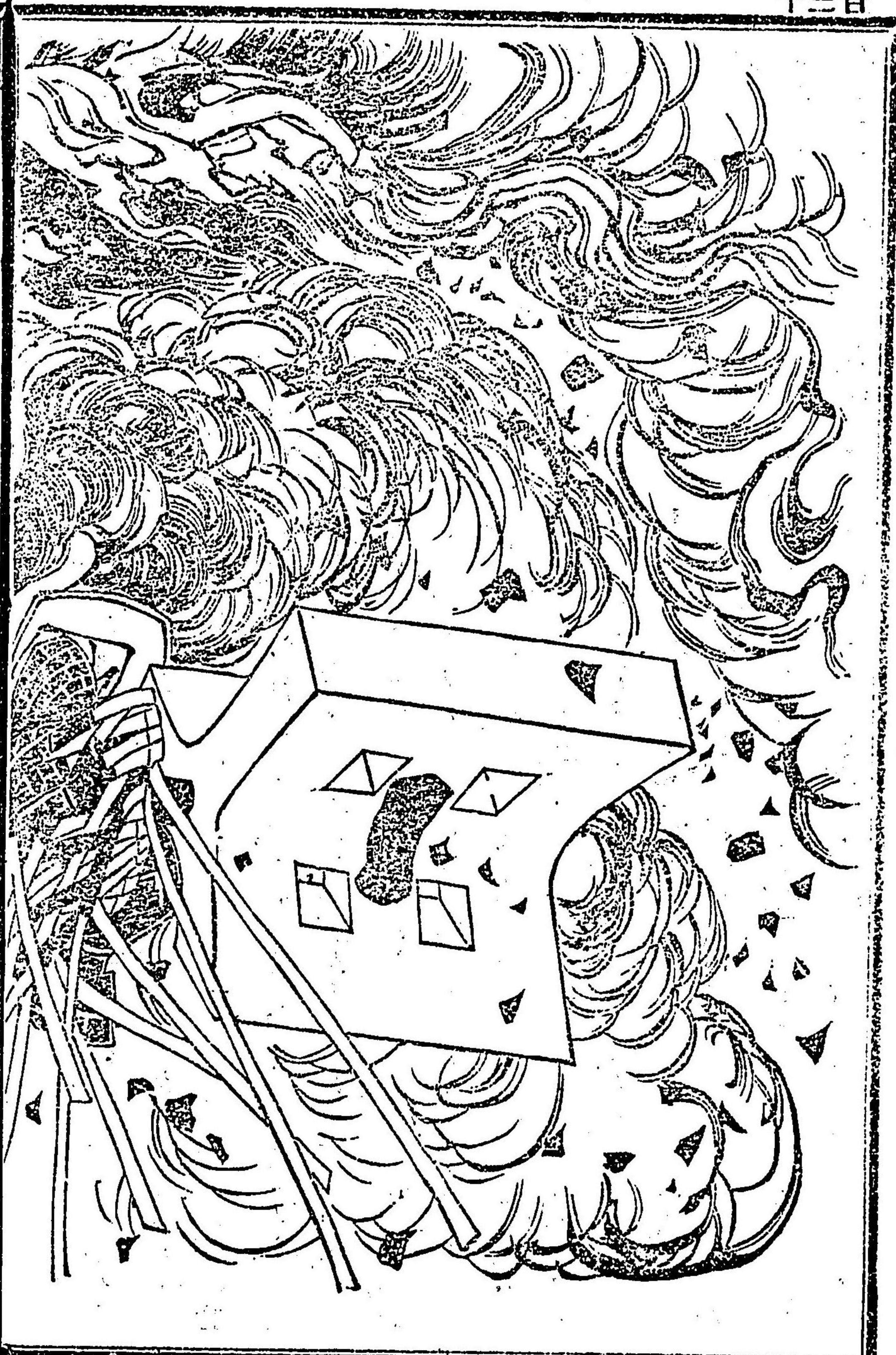
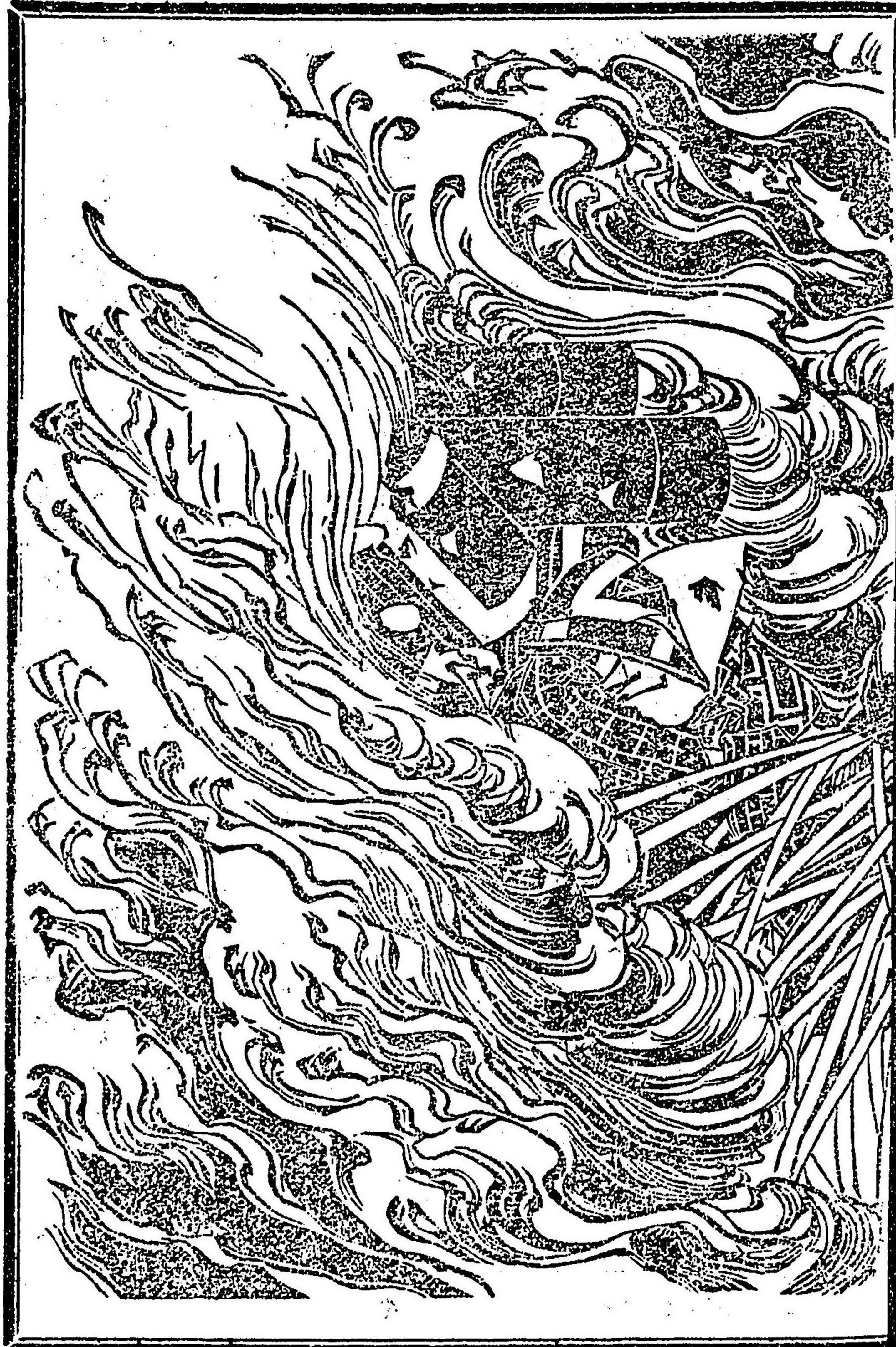
爾程、和三郎の手庇漸く愈たるより、先宇右衛門方を訪れ、たと紀の路を指て、函館を出立せ、おが戰場にて離散なしたる、養父の生死存亡も見定めず、妻を尋て、行時、孝を後よし、色も瀬しと、世の誹を護身影し、妻お豊の宇右衛門方へ預置たれば、氣遣なし、差向、養父の身の上を問定めんと、思立ち、直も東京へ出府なし、限なく、捜せ、更も知れぬ、茲に一ツの工夫を案し、先は脱兵の長たりし、榎本君より借得たる二百兩の金を資本とし、橋渡相生町に旅人宿を開業し、去明治七年中まで入來る客も眼を注ぎ、養父も似たる人もあるやと、空願なる事を頼て、永の光陰を送じ、絶て其甲斐なきものから、望人の有を幸ひ、同家を、或人譲渡せし、其金を旅費として、養父を尋よ、發足せしが、雲を捉へ、風を逐ふ、何處を的と定まら、旅から旅、徒徨んよりいと、又も心を轉じ



つゝ五街道筋まで尤も賑と驛々の旅人宿へ雇人よ住込此處よ半年彼處よ一年と廻りくつて  
 讃州丸龜ふ至り同所の旅人宿米萬屋方へ備れしは昨年八月の事あるが本年の春中此なる三  
 五郎殿がと云尾よ附て三五郎膝押進めて一同よ對ひ。私ハ先年お濱さんを字右衛門様方へ  
 送り届て後災難よ逢ふすつたどハ夢よも知らず其内よハ和歌山へ無事よ着たどハ昔便も有  
 うと思居るうち世の中ハカラリと變りて往昔ハ江戸の花と稱られたいろは四十八組の商人  
 足も規則が變り次第よ家業を衰へたのだ北海道の開拓場へ行ては如何だど或人の勸よ依て  
 決心よ家族あき身の氣輕さハ家を疊んで腕一本小樽港よ出稼せしが未開拓の初發されハ思  
 の外よ利益を得て少の間よ三百圓餘の時へ金さへ出来たれハ函館へ守戻り何ハ商法を始や  
 うかと思按の折柄其以前三河町よ居た延常と云ふ清元の師匠が東京を喰詰め是を同く函館  
 へ藝妓の出稼よ來たよ逢ひ語るを面目なきとあがら互ハ故郷の懐しく昔馴染の話よ實が入  
 り不圖した事から延常と夫婦よあつた世帯を持ち稼ぎ溜た金を資本として小料理店を出し  
 た處東京料理と評判高く運よ叶つて繁昌し意外の利益を得ましたが今更思へハ和三郎さん  
 が手洗治療の爲め同所の櫻木町よ在でなさつて其翌年の事あれば僅半年計の違ひでお目  
 よも掛らす斯て同港を廻々開け同商賣が殖たよ付供讀て次第く不氣景よあるものから

最愛等が見限時と料理店一切諸道具付て或人よ賣渡し其金を持って去明治八年函館港を出  
 立し故郷へ急ぐ旅の天錦を飾る迄ハ行かねど何やら斯やら一資本よ有付き頼て歸京して  
 見ると流石以前の組合仲間が馴染甲斐よ捨おかすオ一兄哥かよくマ無事で歸つて來た維  
 新以來衰微した商人足も先頃より消防組と改まり警視廳の附屬とあつて規則も云々斯々だ  
 から舊の組合よあつたが宜と勤め返されて皮剥は皮で果ると云ふ比喩の如く又も以前の黨  
 仲間へ加はり間もあく纏持とあつたところ昔さんも御存知かハしらねへが先年神田松枝町  
 より出火して本所深川まで延焼がつた近年稀な大火の際雨國廣小路の福本と云ふ講釋場の  
 屋根よ登り火先よ向つて消口を取んど命を纏の向不見測巻く火烟を物ともせず止る火先の  
 煽よ巻れ足踏外して猛火の中へ真逆様よ轉げたら飛た怪我をして半死半生警視病院へ入院  
 して治療を加へた甲斐あつて怪我ハすつぱり愈たれと腰の打身と左の二の腕ハよく挫きて  
 自由を得ずと物語る中宇右衛門が誂へおきたる酒肴を酒樓の下婢が持出し先一杯と飲む  
 酒を堅く酔みて語るやう。今じやア私ちも好きな酒を斷たど云ふ其仔細ハ事長くと聞て下  
 せへ今もお話申す通り火掛の時大怪我をして疵ハせつぱり癒つたあれど左の二の腕ハ不如  
 意とあり元の家業も出來さないので其筋より手當を貰ひ又ハ組合の甲乙等が花會をして呉た







ので浮羅く遊んで居るもの、何か此身体の不自由を癒したさ日來信する琴平神社へ好酒を生涯断ち只管願つた利益でかどうく本復した上は昨年警視廳より特旨を以て副頭取勤務中多年勉勵の賞として金若干を下し賜り重ねくの歡ひ事是も偏は琴平の利益と思へば一度の讃岐の象頭山へ参詣したしと思ひ立ち組合の者も話して其道伴を求めし我も行く彼も行くと忽ち五人の伴が出来去りと直は宿足あし道中恙なく讃岐へ着き琴平神社へ参詣しての歸途米萬屋へ宿を取たその晩圖らず和三郎様よれた目も掛りどんだ處で逢ふ者だと互に驚き以前の事を問つ語りつどうしてマア此様處よか存せるとお尋せば云々とお咄しあされし有枝有葉御養父乃行術をお尋なさる千辛萬苦な心尽しの孝行お感心いたして不及ながら御相談敵手とあり右を左東京へお出なせへ諸國の人の入込む場所ゆゑまた逢ふ便宜もありませうかとお勧め申して御同伴も吾妻指て立出しが案より急がね旅よまわれバ京大坂を見物し進むの序は伊勢参宮をいいたさんと此地へ参り東京へ土産話と古市の舞踏を見んと此家へ来た計で恰も好し宛ら暗号をしたやうに皆々一所は落合とい不思議と云を餘ありと送代りの長物語は勘十郎の一舟をお濱も亦其身の上を語り尽し和三郎の此年頃稼ぎ貯たる金あればその金よてお濱の身を購ひ磨業させんと樓主と呼び右の談判よ及び

たり(附て云ふ此插畫は三五郎が火掛の圖よて東都の花と稱さるゝ太火の様を寫せしあり)お濱を購身の相談も事ゆゑあかく整ひければ勘十郎の一舟の改めて宇右衛門に對ひ。此なるに濱の知らるゝ如く父を喪ひ親戚もあかく如何も哀れあ身の上おれ何卒足下の妻は賞ひうけて下さるまじらやと云れて宇右衛門異議もなくお濱殿へ承知ならも頼み承諾く返答よ此場の結局に至極好く依て此處より和三郎もお濱諸共宇右衛門等の一行は伴なはれ紀州和歌山へ戻るよ付き三五郎も高野山へ参詣がてら是非とも同道されよと一同口を揃へて勧めければ三五郎の組合の伴をあれはと堅く辞み後を契りて尽やらぬ名残を惜みて袂と分ち西と東へ別れし後宇右衛門等の一行は恙なく紀州を着し和三郎お濱の夫婦は媒介人となりて宇右衛門もお濱を娶へせ婚禮の儀式済たりしが宇右衛門お濱の兩人の相共は五歳の往時川開の夜迷子とあり他人の手よて人とありしも離合時あり樂散命あり巡りくして今茲は借老同穴の契りを結ぶも現は奇縁と謂まくのみ又た和三郎の最初より手馴し業と營あまんと宇右衛門とも相談の上和歌山縣廳の前町へ立派な旅人宿を開業し養父勘十郎をも引取て孝養怠りなきものから勘十郎の一舟の隠居仕事は從來の俳借を友として風月の中よ心を委ね風雅の聞え殊ふ高く兩家ますます繁昌し往時の憂苦を踏草よ樂き光陰を送り居るよ



頃日一舟乃元より三五郎へ送りし書状の末は我が繪入自由新聞は夏野の刺草を題して各自の履歴を記載するを讀たりとて「理を火やかき集めたる藻沙草」又宇右衛門の添書の末も勸善懲惡眼前に見たりとて「未枯ていよく喬し松一十木」と以上二首の句を記しありしと开も該話ハ勘十郎の一舟と風雅の友なる湖月堂松蔭と云る人茶話の折々一舟が親から語りし奇事事實を聞かまよく書綴り弊社へ寄稿されたるを斯永々しくは綴しあり

新開明  
説明  
聖代の球謡後編終

明治十九年十一月十九日翻刻御届  
同年十二月 日出版

定價金六拾錢

編輯人 渡邊義方

原 版 人 宏 虎 童

翻刻出版人 東京府平民 富田直次郎

日本橋區通四丁目七番地

發 兌 明 進 堂

同 所



大賣捌

横山町三丁目

辻岡文助

橋町四丁目

鶴屋社

日本橋通四丁目

春陽堂

南錦町

兎屋誠堂

馬喰町二丁目

山口屋藤兵衛

本石町二丁目

明三閣

飯田町二丁目

榮泉堂

本石町三丁目

空暉園

富山町

岡進堂

賣捌全國各地密林



